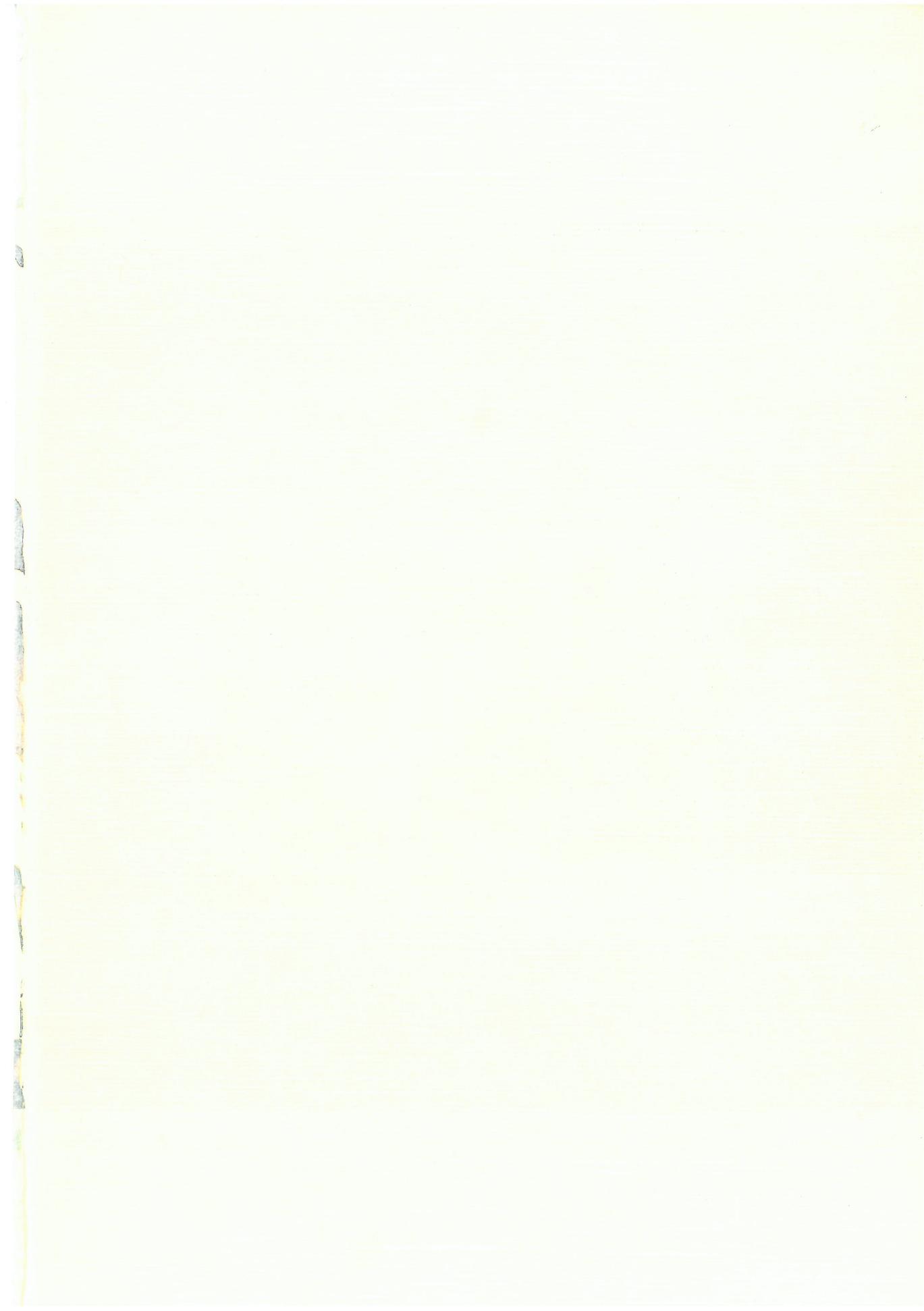


五十周年記念誌

自由と人間尊重の伝統

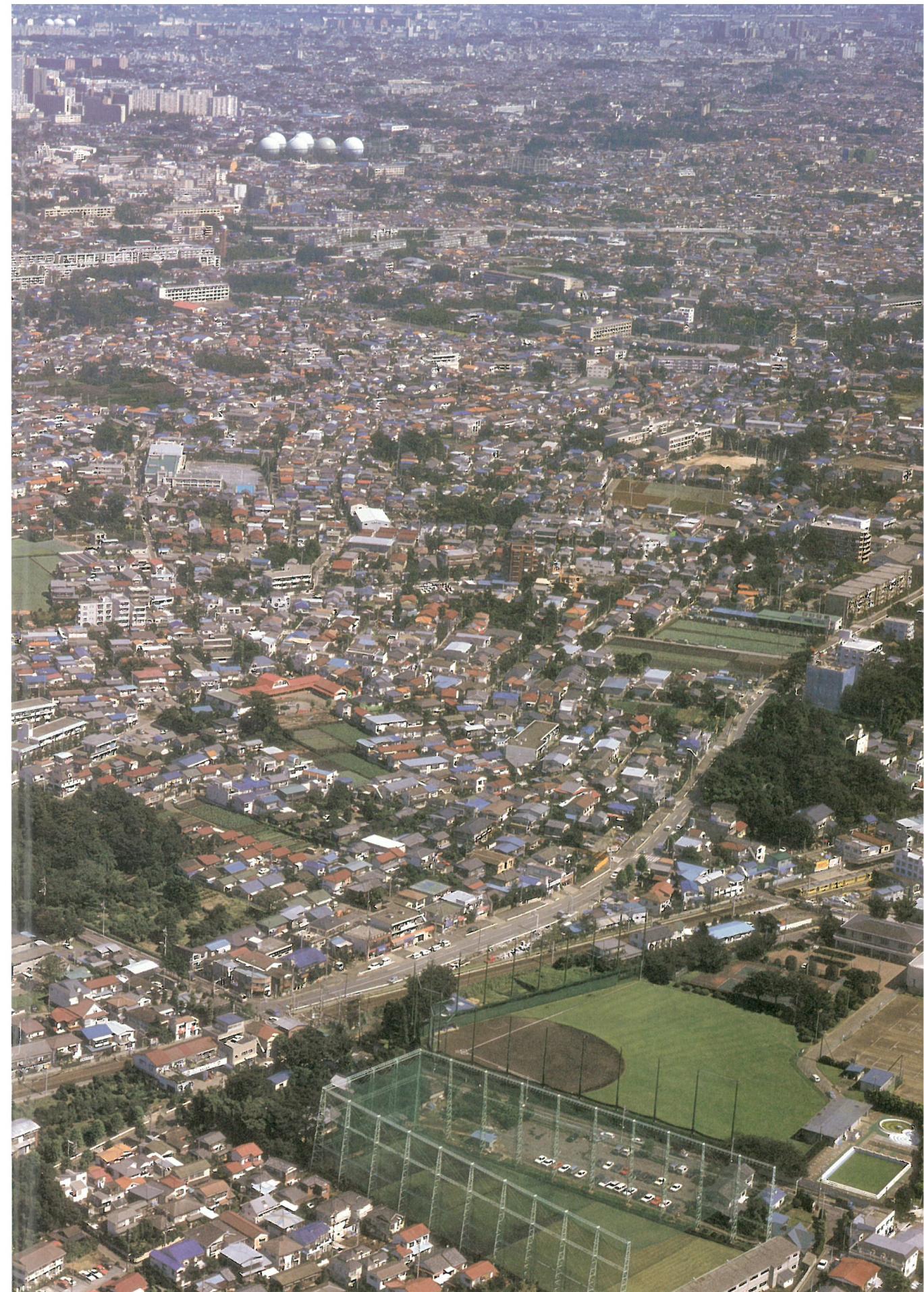


東京都立井草高等学校



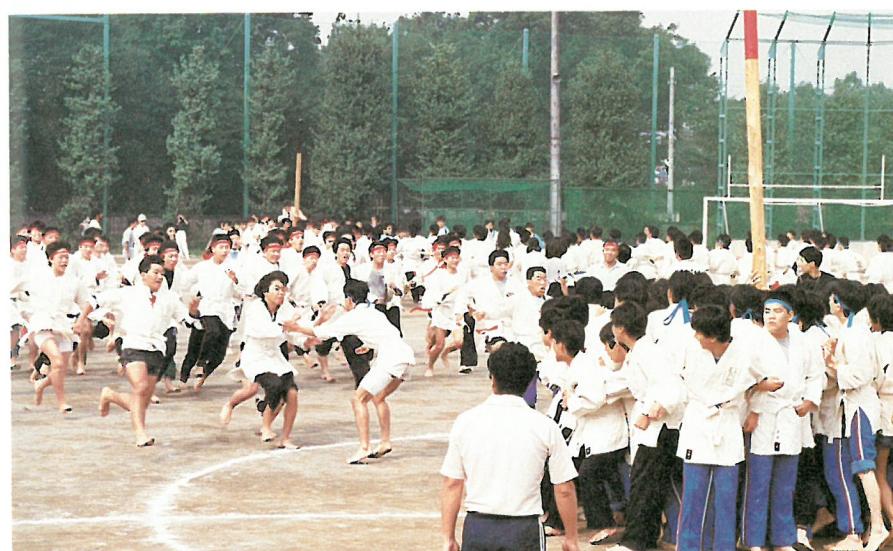


井草はいま





草祭



井草高校の 五十年

二 挨拶

カラーグラビア 今日の井草高校

学 校 長 滝 口 輝 男

井草会会長 山 崎 隆 司

新 井 雅 晴 司

井草の五十年

編集の趣旨

昭和一六～二四

戦争の中にも春は花開く

①

昭和二四～四二

新制高校の幕開け

②

昭和四二～五七

興隆期の動向

③

昭和五七～

明日に向かっての歩み

④

昭和史の中の五十年

井草年表

〔資料〕

校歌

在職教職員一覧

創立五十周年記念誌編集委員会

井草祭の歴史

進路資料

卒業生徒数

定時制の灯

三十六年の輝き

定時制同窓会会长長 井 口 茂

親愛和氣あふれ——旧教職員のことば

青春の灯は消えない——卒業生のことば

〔資料〕

定時制課程の歩み

在職教職員一覧

あいさつ（東京都教育委員会）

お別れにあたって（清水庫之祐）

ご協力者名簿
編集後記

表紙・カット 大辻 敏成

87 86 85 84 84 83 82 80 75 74 72 70 68 64 62 54 42 30 20 10 9 8 7 6

"井草に緑を創る"

創立五十周年に寄せて

学校長 滝 口 輝 男

学校の近くに、「觀音山憩の森」という雑木林がある。決して大きな林ではないが、これが近くの農家の屋敷森に続いているため、付近は武藏野の面影をとどめ、緑深い景観を呈している。本校を訪れる人も緑が豊かですねと嘆める。そこでこの緑に因み、創立以来の我校の緑創りについて振り返ってみたい。

本校における緑創りの歴史は古く、昭和十六年東京府立第十八高等女学校として開校した本校が、府立井草高等女学校と名を改め、中野区鷺宮の仮校舎から現在地に移転してきた昭和十八年までさかのぼることができる。物資・労力が乏しい太平洋戦争下、全職員・全生徒があげて正門沿いなどに、さくら、いちょう、つつじなどを植えたという。その多くは近隣の方の好意で寄贈されたものである。こうしてできた情景は、『堤の桜、花咲きにおい、野辺の空澄みて清し……』という高女時代の校歌に歌われたが、美しい思いがする。昭和二十三年の学制改革で新制高等学校と

なり、全日制のほか定時制課程も設置された。緑深い環境も定時制の諸君にとっては、登下校時むしろ淋しい思いがしたであろう。昭和二十五年に現校名に改称し、創立十周年記念式典も行われ、男女共学実施を機に校歌も新しくなった。『はなびら影深いやえざくら、照りそうつづじ、黄葉するいちょう』といふ

現在の校歌である。そのころには本校発展のシンボルともいえる井草三木も校歌に歌い込まれるほど立派に成長していったのであろう。

植物はスマッギング処理、酸素供給などの環境

浄化作用のほか、子ども時代の緑の原風景が人の精神安定に役立つなど、その効用はすぐる大きい。反面、都会では、枝葉・落葉の片付け、処理に苦慮しているのも事実である。緑を創るとは、植物の植栽だけを意味するのではなく、手入れ、処理をも含む。このこと連する万葉歌を書いた立札をたてようというものである。しかし、歌を書いた立札も増え植物園らしくなったのも束の間で、まもなく体育館建設工事のため、いつしかそれはなくなったという。誠に惜しまれる。

昭和三十・四十年代、逐次鉄筋校舎が建てられ、今日の概観に近付く一方、かの井草三

木は、井草高の見事な桜、つつじとなつて道行く人々の間に広められた。そして昭和五十年代後半、最後の木造校舎が鉄筋に、プロックベイが鉄のフェンスにという現況への環境整備が行われる中、一人の職員によって手作りの緑創りが秘かにすすめられた。半日照で排水も悪い所に、費用も要しないで、外から眺められ、楽しめるという条件を満たした紫陽花の植栽が行われたのである。これも今では立派に成長し、六月梅雨のころ、紫の大好きな花を沢山つけ、校内外の人の目を充分に楽しませるまでになった。さらに、ドクダミなどの薬草園をもうけ、近隣の人に利用してもらうというロマンも告げられた。

植物園をつくる試みがなされた。植物は遠足の時や近くなどから集め、植物名とそれに関連する万葉歌を書いた立札をたてようというものである。しかし、歌を書いた立札も増え先人の残した緑創りは、現員の人に受け継がれている。私は創立五十周年を機に、その成果を来世紀にむけてより一層高め、いつもでも緑深き井草高校、地域の人に親しまれる井草高校であることを熱望して止まない。

新たなる飛躍を

——創立五十周年にあたり——

PTA会長 山崎 隆司

東京都立井草高等学校創立五十周年にあたり、まず初めに、今日まで本校を支えてこられた歴代の学校関係者の方々をはじめ、地域、同窓会、PTA等ご関係の皆様方に對して「本当にご苦労様でした。」と申し上げたいと存じます。

昭和の激動の時代と共に生き抜いてきた本校の五十年の歴史を振り返りますと、必ずしも順風満帆な時期ばかりではなく、幾多の試練を乗り越えてこられた頃もあり、ご関係の皆様方には感慨無量のものがあろうかと思われます。

井草高校史を読み返してみると、本校は昭和十六年東京府立第十八高等女学校として誕生し、翌年井草高等女子学校に改称され、その後戦後の動乱期を経て昭和二十五年、男女共学校として今日の井草高等学校に改組されております。

PTAもこの時期に結成され、現在の校歌（私の大好きな歌ですが）が制定されたのも

ない程の速いテンポで時代が変化していくことが予想されます。

まさにこうした時代にこそ、しっかりと自己を確立した人間が求められています。世界の中の日本人として広い視野と、やさしい心を持って、眞実に向かつて敢然と、たくましく生きていく——そうした人達を送り出し続けている井草高校が、益々発展することを祈りつつ、

春また夏へ 希望ゆたかに

秋また冬へ 前途あかるく

ああ井草 われらここに

未来に向かつて、この校歌の心を高らかに
歌い続けていきたいものだと思います。
「今を未来に、未来を今に」

——井草高校の新たなる飛躍へ、乾杯!!

確かに五十年目は一つの通過点でしかないかも知れません。しかし、この絶好の機会をとらえ過去を振り返り、そして知り、未来を語り合う中で、今年を本校の“新たな飛躍のスタートの年”にしていきたいものです。

今後21世紀に向けて、地球規模で環境問題を始め様々な問題が提起されてくることは必定な情勢です。又過去五十年とは比べようも



自由な校風に学んだ一万六千名

井草会会長 新 井 雅 晴

東京都立井草高等学校の創立五十周年を、井草会会員を代表して心からお祝いを申し上げます。

また当『記念誌』の製作及び五十周年記念式典の挙行準備等に携わっていらっしゃる諸先生方のご苦労に深く感謝いたします。

ところでひと口に五十年と言いますが、この五十年の間には日米開戦、敗戦、戦後の混乱と復興、六十年安保、東京オリンピック、学園紛争、石油ショック……等々、いろいろなことがありました。誠に陳腐な言い方であります、この“激動の五十年”を、公立校として大した不祥事もなく無事五十周年を迎えることが出来ますのは、ひとえに校長先生をはじめ諸先生方の生徒に対する深い愛情と、教育に対する真摯なご努力の賜ものと存じ上げます。

私が井草高校に在籍していたのは真田幸男校長先生の時代で『井草会会報』第二十三号の真田先生の文章を懐かしく拝読し、三年の

卒業式終了後、校長室に行き、配布されたばかりの卒業記念アルバムに真田先生のサインを戴き、それを級友に誇らしげに見せたことなどを思い出しました。

在学中は自由な校風をよいことに、クラブ活動等の“遊び”に熱中し、あまり“勉強”した記憶はありません。まさに“よく遊び、よく遊べ”的毎日だったような気がします。

井草卒業後は、その“遊びぶり”を当時井草会の顧問となさっていた山口よしの先生（昨年惜しくもお亡くなりになりましたが）に見込まれ、今でいう“スカウト”されて井草会の幹事になり、先年、不徳の身を顧みず会長に就任し、現在に至っております。

この井草会も今年三月卒業したばかりの新会員を含め、会員数一万六千名を超える大きな組織になり、先輩諸兄姉は日本全国は言うに及ばず、広く世界各地で目覚ましい活躍をしております。

また井草会としては、母校の記念式典とあ

い前後して「五十周年記念同窓会」と銘打ちは進学せずに就職でした)自由でのんびりした高校だったと思います。ですから一流大学を目指して勉学に励んでいた一部生徒にとつては、あるは物足りない気がしていたかも知れませんが、昨今、テレビ・新聞等でよく取り上げられる“厳しい校則”問題などを見聞きしますと、当時の生徒の自主性を尊重した自由で伸び伸びした井草の校風は、誇りに思つていいのではないでしょうか。そしてこうしたものだと思います。

勿論、三十年前と現在とでは社会状況が大きく変わっていきますので、いつまでも我々が在籍していた当時と同じであればとは申しませんが、少なくとも大学受験のための予備校と化したような高校にだけはなつて欲しくないものだと思います。

最後になりましたが、我々の母校の益々の発展と、諸先生方のご健康とご多幸をお祈り申し上げてご挨拶と致します。

(高校十三回卒)

編集の趣旨

井草高校の伝統と特色は、「自由」と「人間性の尊重」にあると言われている。私どもは、その伝統と特色を誇りに思う。

しかしながら、伝統はしばしば形式と化しやすく、本来の意義を失って変質しやすいことも、多く見るところである。

高校が受験競争の場となり、社会状況の反映による管理的な思想が問題となっている今日、井草高校の伝統はその意味を一層増していると思われる。

未来につながる教育の場は、生徒・保護者・教職員の共通の意思によってつくられる。井草高校の「自由」の伝統がいかにして形成され、受け継がれ、展開してきたか、その軌跡を明らかにすることは、共通の意思と、共通の行動原理を確立する上で、些少の助けとなろう。五十年という歴史の区切りに、過去と未来に思いを致す意味を、私どもはその点に見出した。

言葉をかえれば、伝統を検証し、それを今に生きるもの、すなわち歴史上の事実ではなく歴史の理想としているのが、私どもの願いであった。

したがって、この冊子は編集テーマを「井草高校の自由と人間性尊重の伝統」とし、その他の記録については多くを他日に譲った。

この大きなテーマを限られた紙数の中で実現するため、多くの方々から寄せられたお知恵と資料をそのままの形で生かすことができず、私どもの手によって改めてまとめざるを得なかつた。そのため、当然ご執筆いただかなければならぬ方々の玉稿を割愛し、あるいは頂戴した玉稿を大切に紙面に生かすことができなかつたことを、残念に思う。慎んでご海容を乞う次第である。

以上の理由から、私どもはこの冊子が、同窓生・旧教職員の皆さんはもちろんであるが、それにもまして、在校中の生徒諸君に読まれることを期待して編集した。卒業生や旧教職員の意を受け継ぎ、井草高校の明日をつくるのは諸君である。私どもの意を酌んで先人に学ぶことを希望する。

戦争の中にも春は花開く

—府立第十八高等女学校の発足—

誕生

—大きな期待を背に—

迫り来る暗い足音の中に府立第十八高等女学校は誕生した。昭和十六年春である。

昭和十六年とは言うまでもなく、日本が『嚴たり、帝国の対米態度、凡ゆる事態に万全!』(二月六日・読売)、『断乎駆逐の一途のみ、隱忍度あり。一億の憤激将に頂点』(二月八日・東日)、そしてついに『帝国・米英に宣戦を布告す』(十一月九日・朝日社説)と、太平洋戦争に突入した年である。

日本を取り巻く世界の情勢が緊迫の極みにある時、一般国民の生活も厳しい制限と耐えを強いられつづった。当時の新聞では『お米の通帳・十二歳→六十迄一人当たり一合三勺・府の年令別定量決まる』(四月一日・中外商業)、『つつましい暮と正月・労務者の

忘年会や新年会はやめ・料理店等も戦時体制(十二月六日朝日)、『土曜半ドン何事ぞ・国民挙つて毎日儀礼を』(十二月五日・東日)、『鉄製品の回収・外務省の鐵扉も外す・一本の折れ釘も“くろがね”の力』(四月一日・読売)、『豆撒きは取り止め・節分に松本の新体制』(二月一日・信濃東日)、『犬には代用食・“失食”の五万五千頭と悩む愛犬家』(二月三日・読売)など、戦争遂行を唯一の目的とした施策が連日報道されている。国民は『贅沢は敵だ』『欲しがりません勝つまでは』という掛け声の中で、ただひたすら耐えていたのである。

これらの動きは、文化、芸能の世界を覆うものとなつて行つた。

『いまや我が国は男も女も国家の要請に応じて何時でも労働報国隊を結成して工場に赴かねばならないが現在の工場は単に機械の延長としてのみ考えられ働く人々の健康な精神を培つてそこに一段と士気の高揚

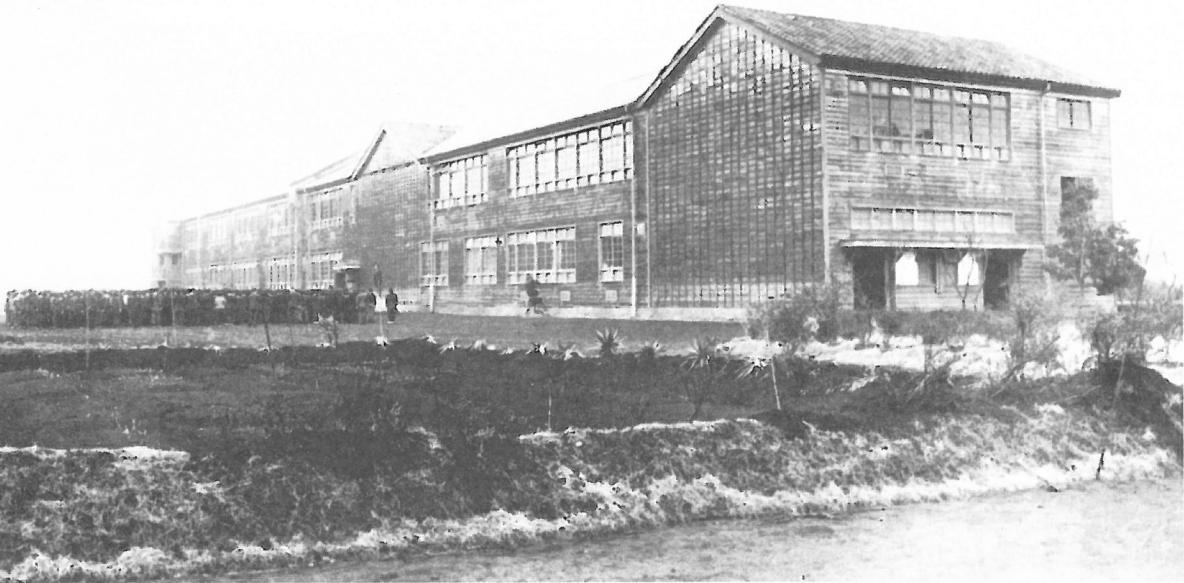
井草の戦中戦後

隆野豊子

昭和十八年早春、井草に建つた新しい校舎で初めての入学試験を受けた。まだ木の香がたち、明るい陽光の射し込む面接の教室では、五人の先生から次々に、国語、歴史、数学等に亘つての質問に即答する緊張の数分間であった。体力テストは鉄棒、懸垂と短棒投等、歩くとまだきびすが畑だった黒土にめり込み、順番を待つ間は刈り込んだお茶の垣根の陽だまりに誘導された上級生の配慮が思い出される。

戦時中の井草は科学指定校とされ、科学する心を啓蒙された。廣瀬校長は上級生の工場動員の餞にと、液体空気をご苦労されて学校まで運ばれ、金魚が瞬時に凍結してしまった実験をされた。守邦先生のご指導の下、田無の





校舎全景

を産み出しが忘れられているのではな
いかと各界代表の高村光太郎氏は第一回中
央協力会議に「全国の工場施設に美術家を
動員せよ」との議案を提出してこれを強調
する、……略……この時局に絵だけを描い
ていて良いのだろうかとの美術家達の気迷
いを一掃して明確な方向を示すことにもな
るというのである』(十一月五日・東日)。

芸能界でも

『さきに演芸人のふざけた名前の撤廃を
断行した内務省では今回映画法の実施によつ
て映画スターの芸名を廃止、それぞれ本名
によるよう各映画会社に要請した。時局下
国民文化の一翼として立つてゐるスターが……
略……。今度の当局の要請によつて大河内
伝次郎は大部勇、阪東妻三郎は田村伝吉、
小杉勇は小杉助次郎、入江たか子は田村英
子、風見章子は北川ふさ子、高峰三枝子は
鈴木三枝子として新たに登場することになつ
た』(十二月六日朝日夕刊)。

新派、新劇などの俳優は言うに及ばず、古
い伝統と歴史を持つ歌舞伎俳優まで、国家の
要請に従つてその慣習を放棄したのである。
学校もこうした流れを真正面から被つた。

『さらば 小学校』。抑も始まりは悪童のし
つけ』(二月二十五日・都)によれば
『長い七十年間の歴史、目に耳に馴染んだ
小学校』にさらば……、そして、わが国児

を産み出しが忘れられているのではな
いかと各界代表の高村光太郎氏は第一回中
央協力会議に「全国の工場施設に美術家を
動員せよ」との議案を提出してこれを強調
する、……略……この時局に絵だけを描い
ていて良いのだろうかとの美術家達の気迷
いを一掃して明確な方向を示すことにもな
るというのである』(十一月五日・東日)。

敗色濃くなる十九、二十年頃は、強制疎開
地の整理に荒川方面に行き、カンパンを代給
されたり、廃材を防空壕用に阿佐谷辺りから
延々と歩いて学校へ運んだりした。防空壕は
この廃材を柱や側面に用い、掩蓋には教壇が
使われた。教壇はとても重く大人数で難儀し
ながら教室から運び出した。そして防空壕は
校庭の南側にいくつか掘り作られた。

授業中の空襲警報で避難し、被爆はしなかつ
たが、敵機が去つた後の青空から、電波妨害
用のジュラルミン(テープ状)の塊が、キラ
キラと降りてくる情景。山本五十六氏が南方
洋上で戦死の知らせを聞いた日、校庭の西方
の夕日の中に黒くたたずむ富士の姿に、友と
二人合掌してしまった情景等、断片的に想い
出します。

工場動員(私達の学年の)は二十年早々か
ら始まっていたが、学校の配慮で限度まで学
窓においてくださいり、基礎講義は工場の講師
が来校され教室で受け、実際の就労は終戦ま

気象観測協力のため、各家庭での定置定刻の
気温測定をしたり、川崎方面へ電気分解によ
る海水の実験用製塩工場を見学に行つたこと
もあった。

たのである。

物心両面の国家によるこうした統制がまさに極みに達しようとする時、府立第十八高等女学校は誕生した。

いったい当時の女学校とはどんなものだったのだろうか。『九割は事務希望・移る女学生の就職気質』（二月三日・報知）は、当時の女学生の意向と、世の中が女学校に何を求めていたかを伝えていて面白い。



学年対抗リレー

童教育を根本から改革する『国民学校令』は二十五日に公布されて、いよいよ四月一日から耳に新しい響きとなって伝えられ、我が国教育の大きいなる発足は二年延長の八年義務制となつて少国民練成の力強い第一歩を踏み出すのである……略……四月新学期を期して国民学校生徒部隊となつて無限の進軍をする……略』

学校も国策に沿つて姿を大きく変えていつ

での三ヶ月余りであった。朝比奈鉄工所の分散工場が保谷の沢庵漬けを作る農家辺りの地下工場にあって、飛行機用氣化器の組み立て作業をした。私は間もなく製図室に転配され、青写真をトレーシングペーパーに鳥口で移し書きする仕事になつたが、技術はとも角必勝の心意気は真向だった。空襲は激しく、本社の爆撃される地響を防空壕の中で聞いていた。

やがて、工場本部の側に竹槍が束ねて置かれ本土決戦の言葉が囁かれていた頃、漸く終戦を迎えた。学窓に戻り、お仕着せの民主主義がとうとう流れ込んできた。二十三年頃後産業界に一役買うという健気な国策型お嬢さんだ。希望は堅実な事務員志望が九割五分まで、ショップガール志望は一人もなく女工さん志望も全然現れていない……略……東京職業指導所では一月初めから就職奨励隊を組織、糸井指導所長、山田婦人部長が先頭に立つて希望者の少ない女学校五十を歴訪、古い因習を捨てて国家的立場から勇敢に職場に出るよう説得している……略……『山田婦人部長談』事変以来男子労力の不足を補うためにも、また生産拡大のためにも婦人の労力が重要になって来たが、まだ父兄には古い考えに囚われて子女を職業につかせない方が多く見受けられるのは遺憾です。最近の傾向では華美なデパート

（昭和二十四年卒業）

等より堅実な事務員の志望が多くなったことが目立っていますがもう一步進めて直接役にたつ簿記を在学中習得しておくことが必要です。今までの職業婦人の勤続年限平均三年から見ても嫁入り前のお小遣い稼ぎといった気分が多いが、もっと本格的に産業戦線へ出て女工さんでも何でもやってほしいと思います……略』。

憧憬

垣間見た自由と學問のよろこび

東京にはナンバースクールと称して、第一から順次番号をつけた府立中学校及び高等女学校があった。東京府立第十八高等女学校（井草高校の前身）は、昭和十六年設立認可を受け、鷺の宮、現在都立武蔵丘高校のある東京府立高等家政学校内に開設した。同一敷地内に二十中（大泉高校の前身）、二十一中（武蔵丘高校の前身）、第五商業の四校がそれぞれ仮校舎を構え、第一回の入学式はその仮校舎で行われた。

十六年十月頃現在の地に本校舎の建設が決定。土地の買収価格は道路側（東側）が坪三円、西側が十一円であったという。すぐに東京府当局から校名変更についての相談があつ

た。『東京府立井草高等女学校』への名称変更のいきさつについては、初代教頭・第二代校長の杉山文雄氏が井草新報第一〇〇号（昭和四十六年十一月）に書かれている。

『ちょうど校地の決まつたその頃府当局から当時の広瀬校長に学校の名称変更についての相談があつた。『第十八高女は、そのうちに上石神井に本校舎を建築して移転

井草と私の出会い

阪口小枝子

井草と私の出会い……父の転勤で小学校六年の二学期に東京にもどつて来ました。そして、受験。その頃は今のような厳しい進路指導はなかつたようで、東京にもどつたばかりの私に、先生は新設校の井草を勧めてくれ、また両親もそうですかといった感じで、すんなりと決まつたのでした。

土・畠・草・花、木々、空氣とにかく豊かな自然に恵まれた素晴らしい環境でした。

また中野から久我山に転居してからは、西荻窪の学校まで歩くようになり、なお自然を満喫する機会が増えました。花の季節にはよろこびを、緑の季節にはいのちを感じながら五年間を過ごしました。

ただ、春の突風には悩まされました。周りの土砂が風に乗つて木製のサッシを通り越して、校舎の中に侵入してくるのでした。ザラザラとした教室の床や廊下のお掃除の大変だったこと！

“春が来ました。毎年必ず来る春ながら、今年の春は、わけても新しい姿でやってきました。野にも山にも満ち満ちて、希望と力を私達に与えて呉



創設当時の先生方

西村先生 大津先生
田中先生 大久保先生
青山先生 新井先生
赤岡先生 広瀬校長先生
近藤先生 杉山先生
海老原先生 隅先生
吉澤先生

することになるのだから、石神井高女といふ名称にしたいが、学校はどう思うかというのである。これを聞いた教頭が『校地は確かに上石神井に決められているのだから、それも一案であろうが、女の学校にジイ学校もあるまい。それに学校に通う電車の下車駅が上井草であるから、むしろ井草高女とする方が、この新設校を訪ねてくる人々にもわかりやすく親切ではなかろうか』ということで、職員にも呼びかけ学校内の全員の賛成をもって、第十八高女は十七年一月から井草高女と呼ばれるようになつた。本校舎の第一期工事ができ上がつたのが十八年一月でそこに移動したのが二月だから、鷺の宮の仮校舎時代、すでに井草高女と呼ばれていたわけである。』

学校の移転は二月一日から四日にかけて行われ、四校の中では最後のものとなつた。鷺の宮から上石神井まで、職員も生徒も一緒になって机、椅子、そして理科の標本などを運んだ。どこまでも雑木林の続くのんびりとした武藏野の風景であった。

真新しい木の香りも高い二階建ての新校舎は、それまでの小さなパラックの仮校舎とは比較にならぬ立派なものであった。事実校舎建設を請負った勝村組は車でおさえていた良材を特に使用したという。この新校舎に移った職員と生徒達は、喜びと期待に胸を膨らま

れているようです。』……これは最初の国語の教科書の一節です。少しうろ覚えですが、思い出すままに書いてみました。

(昭和二十三年卒業)

過ぎ去りし日の思い出

田 中 紀 子

第一次世界大戦が終り、疎開先から東京に戻れる嬉しさで、敗戦のもたらす意味まで全く考えられなかつた私は当時十四歳でした。もと通つていた学校は、空襲で焼かれて校舎もなく、満員電車での通学などとても考えられませんでした。たまたま妹が通つていた井草高女が家から歩いて行けるし、すぐ勉強出来るのが魅力で編入させて頂くことにしました。

田園風景そのものの森や林の点在する畠の中の木造校舎で戦後の民主主義教育が始まつたのでした。先生方はおやさしく、生徒ものびのびと勉強して居り、私は温室の中のようない居心地の良さで過ごすことができました。クラブ活動もはじまり生物部に入れて頂きました。道具も揃つていないので蛙の解剖や、学校で飼っていた山羊が死んでその解剖をす

せて学校造りに取り組んだ。廊下はぬか袋で磨き上げ、残っていた竹林の切株と地下茎を懸命に掘り起こし、地ならしをし、つつじ、八重桜、いちょうを移植して育てた。これらはついこの頃、現在の校舎が建設されるまで、この付近の名物となっていたものである。第一回の入学試験は口頭試問と体育テストであった。口頭試問では、ガスは何から作られるか、掃除の仕方は、親の職業はといった質問がされた。

当時府立は小学校の成績が優秀な生徒が選ばれ、印象としてはクラスの十分の一から十分の二位の生徒だけが入学できたという。高女では若いナンバーの学校を希望する生徒が多かった。この地域には第三、第五、第十、第十一高女と、人気の高い学校があり、その中で井草高女を新設で安全圏ととらえて受験した生徒達もいたようである。

授業は水曜日のみ五時間授業で、他の五日は全て六時間というハードなものであった。授業の内容を一年生のものを通して見てみよう。高女という性格から、被服が四時間、家庭庭が二時間のほか、時局柄、武道が一時間、そして農業が二時間であった。校庭の続きに烟を造ってさつまいもを収穫し、家庭科の調理実習で、さつまいものつるが食べられることが知ったのもこの頃のことである。

体育の授業では千メートルのマラソン、卓

球、ハンドボールなどが行われた。また現在の物理と化学を一つにしたような物象という名の授業があった。

英語の授業をやめるという迎合的な措置を採った学校が多かった中で、『ますます必要になる』として、依然授業を続けていたといふのは、かなり勇気の要ることであつたに違いない。

土	数	式	口	体	農	之
金	口	物々	被々	被々	之	之
木	音修	口	數	之	文	
水	地	英	史	工	画	
月	被々	物	體	家々		

朝マラソンや、なぎなたの寒中げいこから始まる学校生活は、若い優秀な先生が多いこともあって、初めから自由な雰囲気に包まれていた。赤紙が来て出征することになった先生から貰った本で、『世の中がひっくり返る』思いをした生徒もいる。話し合いが多く持たれ、のびのびとした活気が満ちていたのである。

(昭和二十三年卒業)



学校農園のさつまいも収穫

る人等さまざまでした。私はたまたま飼っていたなめくじが産卵をして、その記録を辻忠二郎先生が生物雑誌『むさしの』に掲載して下さいまして光榮に思って居りましたら、東大石田教授の生殖の専門書に引用文献として、私の名前で取りあげられたとの事を知られ、よき師にめぐり合えた事を嬉しく思いました。

また都内女学校の弁論大会に出させて頂ぎ、同年代の生徒が学校教育への要望を唱えるのを聞き、驚きと共に井の中の蛙だった自分を発見する反面、平和で穏やかな井草で学ぶことの出来る幸せをかみしめた私でした。

『創立期の贊の宮、井草時代は共に生徒も先生も少ない数でしたから、和氣あいあいとして、しかも運命共同体の様な思いがおのずから育つたのでしょう。楽しい思い出の中には何時も先生が加わっている学校生活でした。』（井草新報一〇〇号）

この時代の人達がどの人も持っている特質がある。それは自由への憧憬、そして学問や美しい世界へのあこがれである。彼女らのこうした学校生活が勤労動員や疎開によって短い期間に終わってしまっただけに、切迫する時局の中で濃密な人間関係を通して垣間見た自由と学問の意味は、彼女らの一生を貫くテーマとして銘記されているのである。

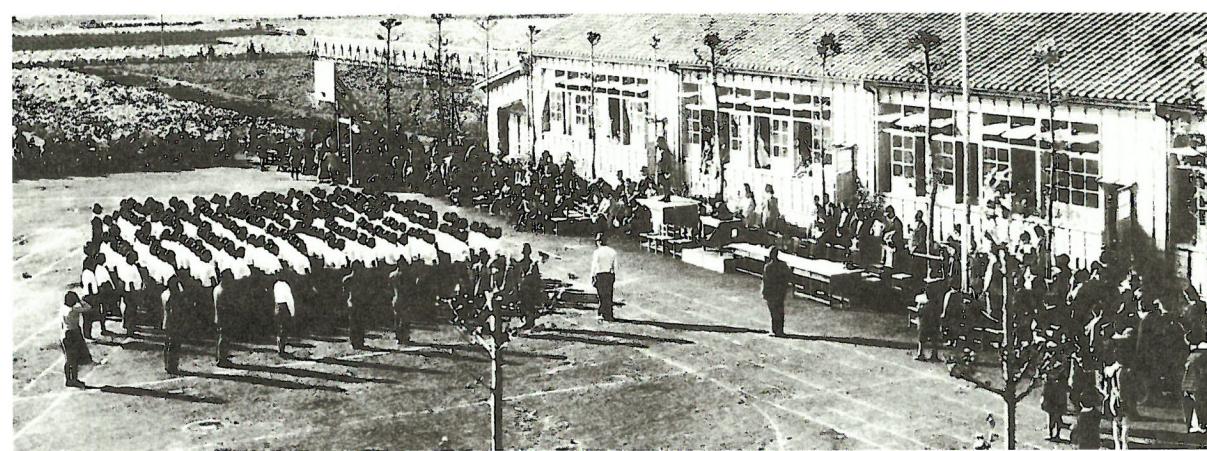
まだ『お山の杉の子』『とんとんトンカラリと隣組』『湖畔の宿』の旋律が流れる中で、『ひまわり』や『少女の友』、『赤本』をひもとくことの出来る彼女達であった。

勤務は六時から二時、二時から十時、十時から六時の三交代。『月月火水木金』の歌通り、毎日出勤して二週間で初めて休みが取れるという過酷なものであったが、当時はそうは感じていなかつた。幾人かの生徒は八時から五時までで、仕事の内容も検査、事務というものであった。身体や家庭の状況を勘案した先生方の配慮があったのではないかと皆が感じていた。

やがて戦局の切迫に従い、井草高女の学校生活も大きな変化を強いられるようになる。昭和十八年、東京府立井草高等女学校が東京都立井草高等女学校と改称した七月、女子学

徒動員が決定される。北九州に米軍機が飛来した昭和十九年六月、軍用機の製作所である朝比奈鉄工所と中島飛行機での勤労動員が始まった。一、二年生は学校に残って授業を続け、三年生が動員された。動員に出かける前日、廣瀬校長は校庭に三年生全員を集め、朝礼台の上で化学の実験をして見せた。沢田女子さんはそれを、学問を忘れるようにという無言の教えとはなむけ、と解釈している。

動員先の仕事は、鋳型、旋盤、溶接、ターレットなど、工員と全く同じものであった。勤務は六時から二時、二時から十時、十時から六時の三交代。『月月火水木金』の歌通り、毎日出勤して二週間で初めて休みが取れるという過酷なものであったが、当時はそうは感じていなかつた。幾人かの生徒は八時から五時までで、仕事の内容も検査、事務というものであった。身体や家庭の状況を勘案した先生方の配慮があつたのではないかと皆が感じていた。



全校朝礼

より多い御飯に、かばちゃんの煮物というようなものであった。皆で軍歌などを大きな声で歌つたことや、一週間の労働の後、松林で松ぼっくりを拾い、付近の農家からいもを貰うなどして、家族へのみやげにしたのを覚えている。

最初の東京大空襲があつた昭和二十年三月、

第一回の卒業式が行われた。式場は畳敷きの裁縫室、長い机にふかしたいもとお茶で別れの会をした。

その直後の四月入学した三回卒の中村恭子さんは、それから終戦までの学校生活について次のように書いている。

『東京が焦土化した三月大空襲後間もない第二次世界大戦末期に私たちは井草高等女学校に入学した。昼夜をわかつぬ空襲の状況下無試験で入学許可された私たちは何人あつたか記憶していないが、定員に満たなかつたことは確かである。疎開、学級閉鎖、罹災など文字通り多事多難の時代であったが、それだけに学校で勉強できる時間は何にも換え難く思えた。

しかし、授業は突然不気味なサイレンに中断され、かばんと救急袋を背負い、防空頭巾をかぶつて一日散に帰途につくことがしばしばであった。駅への途上、車中なのに敵機がすでに頭上に現われ、傍らの防空壕にころげ込む事もあった。』（井草新報第一〇〇号）

そして『戦争終結の大詔済発・新爆弾の惨害に大歎心・四国宣言を受諾』（昭和二十年八月十五日・朝日）。一、二年生は真夏の太陽が照りつける校庭で、終戦を告げる玉音放送を聞いた。頭の中が真っ白になつて、何が起つたのかよく理解できなかつたという。

宝物の写真

島崎葵子

それは四十五年も昔の事。日本の國もだんだん物資の不足が目立つ昭和十九年の六月、私達は高女一年生でした。一年担当の隈明先生が、『せめて僕のカメラで皆の入学写真を…』と撮つて下さったのがこの写真です。当時のネガの小さいのを（ライカという機種だったと思われます）大きく伸ばして下さいました。一寸ボケ気味で残念ですが、私達にとつてもう戻つて来ないあの日の大切な大切な写真です。

それから間もなくクラスの人々も一人一人と疎開で別れて行き、二度と会えなくなつた人もいます。隈明先生もすでに他界されたとの事で、この写真に写つて居られないのがとても悔やまれます。

あの頃の女学生はヘチマ襟の制服（戦時体制の学生服）も、衣服切符でようやく購入出来たものです。カメラも今日とは異なり一般家庭にはあまりなく、フィルムも手に入りません。入学の集合写真などはほとんどない時代だったので。今のように「使い捨てカメラ」が簡単に入手出来る時が来るなんて考え



授業風景

ただ涙がとめどなく流れたのをよく覚えていた。やがて学徒動員の生徒達も全員学校へ戻ったが、その時の自分達の気持ちを『意氣揚々』というものであったと表現している。地理を教えていた生野真直先生（物故）から、たつた一言『よかったです！』と言われて、初めて戦争の終わったことを実感したという。生徒達は井草に戻って憑き物が落ちたという感じがしたのである。

八月十六日の朝日新聞は、一面の半分を割いて原子爆弾についての記事を載せている。『ウラン原子核の分裂。最小量で火薬二万トンに匹敵』『真珠湾以前に準備。かくて成る非人道の極致』『十平方キロが破壊・爆弾投下直後、空から見た広島』。そして同紙面に動員学徒と疎開児童の扱いについての文部省の方針が報道されている。『原則として親許へ。引き上げ不適当の者はそのまま』という方針により、学徒動員と疎開地から引き揚げて来た生徒達で、井草も日毎に賑やかなものになっていた。

昭和二十二年から二十五年にかけて、日本は天皇上間宣言、公職追放令から始まって、農地改革、新憲法発布と、新しい価値観と秩序を求めて大きく変わりつあった。井草もその例外ではあり得ず激動の期間を迎えることになる。制度上では二十二年併設中学設置。二十三年都立井草新制高校設置。二十四年高

られないことでした。

この写真が口を開く事が出来るのなら今の世の中を何と言うでしょうか？語れども語れどもつきない“世の移り変わり”をいろいろ話してくれると思います。

（昭和二十四年卒業）



忘れられぬクラス写真

物は無くとも
心は満たされていた

目崎洋子

戦争が終わって一、二年経ち、疎開していなつかしい顔がボツボツ戻って来たあの頃は食べ物も着るものも何もありませんでした。

女、併設中学廃止。二十五年東京都立井草高等学校への改称と続く。

『新制高校に移行したとはいえ女子校であった当時の井草の教育目標は、相変わらず良妻賢母教育にあつたと思われる。女子教育の特殊性を説かれる先生方に、私達が男女同権機会均等などのスローガンをもつて反発することもしばしばであった。当時高校の教科に組み入れられた解析IIを選択希望した生徒に、"女子は数学より、家庭科を選ぶべきだ"と先生が言われ、私達はこれこそ男性の封建的思想と憤然と抗議したことがあった。その結果開講されたコースを選択したのは一十人足らずの生徒であったが、受験勉強の弊害など全く見当たらぬ井草であればど真剣に全員が勉強したクラスは異例であった。女子は数学に弱い、微積分が結婚に役立つ訳がないなどという大人の常識を反証しようという意氣が、皆を卒業の日迄ひたむきに数学に取り組ませたのである。』（中村恭子・同）

新しい学校の理念を模索する時だったのである。

井草駅から畠の中にボツンと建つてゐる木造校舎まで何もなく、校門は丸太棒が立つてゐただけでした。

運動場を耕し、さつま芋を作り皆で分け合つた事等、今の方には信じられない事でしょう。でも物は無くても心は明るく満たされていたと思います。お腹の空いた体でも走つたり踊つたり英文を暗記したり勉強出来る幸せで一杯でした。『アントニオの演説』等今でも

Friends Romans, Countrymen Lend me your ear..... と口をひいて出で来ます。下校時等、先生方の真似をしけラケラ笑いころげて道の真中でしゃがみこんで笑つた事も思ひ出です。それ程車も通らずのんびりしていました。校舎も大切に使いぬかを持って行つて廊下等ピカピカに磨きました。あれから四十?年。いつの間にか気のとおくなるような年月が過ぎましたが今でも当時の友達と会えればケラケラ笑える私どもです。

井草高校の末長い発展を陰乍らお祈り致しております。（昭和二十四年卒業）



合唱コンクール（日本青年館）

新制高校の幕開け

—自由へ繋がる一本の赤い糸—

新たなる出発

— 握曳する創造期 —

価値観の急転換を経て、新たな民主教育を軸に大いなる創造へと立ち上がり、「麦を食いながら」意欲に燃えた期でもあった。男女共学としての新制井草高校の誕生である。

今までの女学校に初めて男子生徒が入つて来る訳で、先生方も、生徒達もかなりの緊張を余儀なくされた。昔から近くのF高校等と並び才媛の居並ぶところへ少数の男子が入るので、男子の意見は殆ど通ることがなく、はやりの多数決がその勝敗を分けていたようである。

制度が一新されたからといって、旧制高女の名残を一気に払拭することは出来なかつたろう。近くの外語大の寮生との関わりを避け、自ら彼等とは違う通学路が出来て行つ

たそうである。また、当時の「私達の心得」の一部には、

「ちり紙、ハンカチは常に携帯し清潔にする」

「先生及び外来者に対する会釈する」

などとあるが、そんなところへいきなり「生徒の自主性・自発性」を問われたのだから逡巡も止むを得なかつたであろう。それにしても後者の心得ぐらいは現今にも受け継がせたいものである。

この期、毎週一回全校で持った集会、“アッセンブリー”が盛況であった。いわゆる直接民主主義である。「高校五日制のは是非」などに、かなり活発な議論の花を咲かせたようである。

昭和二十四年に生徒会の結成を見るが、その基本組織であるクラブ活動はどうだつたらう。全員所属で週一回行われたもので、先生方も何か必ず一つをやらねばならなかつた。将に生徒と先生が共同で作るという民主的な

物は無くても
青春の熱い血潮が

谷 恭子



出で立ち。中でも様ざまなエピソードがある。

一、映画部員による淀川長治氏（映画の友編集長）の招聘、これは大盛況であった

為、運動部の活動が食われてしまい、松島四郎先生（体）の怒鳴り込み事件。

島四郎先生（体）の怒鳴り込み事件。
一、英語部はもとより、第二外国语＝ドイツ語、フランス語部があり、数学の齊藤先生がドイツ語を教えられた。

三、演劇部も盛んで、リーダーシップをとする生徒とか、なかなかの役者もいた。その中から現在、日生劇場やTBS等で主重要なポストを担っているOBもいる。

等々である。

旧制高女を母胎にした学校といえば、やはりコーラス部を忘れる訳には行くまい。Y高校などは未だに全国レヴェルの実力と聞く。井草高は、近くの旧制男子校であった石神井高との交流に道を拓き、混声の見事な合唱、メンデルスゾーンの「雲雀」や「河」等が、流れれる初夏の風を彩つたものである。ところが、男子を音楽部にスカウトするには大分苦労したそうで、初回はたったの一人だけだったとか。因みに当時（昭和二十五年）の学芸系クラブを見ると、

英語、映画、演劇、音楽、ドイツ語、読書、美術、歴史、理科、社会、手芸、書道、生物、文芸、図書

の諸部である。

生徒会新聞「井草新報」創刊号には、「学

校新聞の前途を祝して」（一宮保文P.T.A会長）、杉山校長訪問、「新体育の目標」（松島四郎）、校内体育競技会とその批判、男女共

学座談会等々が載り、なかでも文芸欄には一

頁を割き、読後感想文（赤司正子、梅本清人）、創作短編「死友」（難波田節子）等、大変立派な内容である。なお、この新聞は東京都の

新聞コンクールに入選している。

校歌制定について触れておこう。以前の校歌も抒情豊かな佳品であったというが、敗戦後の新しい世界を支えるに相応しい、若々し

い内容のものに変わった。（現在のも

の）

歌人、佐佐木信綱

氏と、当時の新進、芥川也寸志氏のコンビである。この種の歌には珍しい三拍子

であるのは、「イグ

サ」の三文字にアクリ

セントを強調したか

らとのことである。

井草の人と自然を詠み込んだ清新な校歌

である。

我々は昭和十九年に入学しています。当時は、

「英語は敵国語だから本来は教えてはいけないのだが、将来困るといけないから」

といわれ、時間数こそ少なかつたけれど基礎から教えられた。

また大野先生の御指導のもとに「修禅寺物語」を放課後一生懸命に練習した懐しい思い出があります。私は姉娘＝桂の役でした。桂は華美で誇り高い性格です。私は母の筆筒の中から一番派手で綺麗な振袖と、高価な丸帯

I		1		2		3		4		5		6			
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	P	Q
14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 2510 2511 2512 2513 2514 2515 2516 2517 2518 2519 2520 2521 2522 2523 2524 2525 2526 2527 2528 2529 2530 2531 2532 2533 2534 2535 2536 2537 2538 2539 2540 2541 2542 2543 2544 2545 2546 2547 2548 2549 2550 2551 2552 2553 2554 2555 2556 2557 2558 2559 25510 25511 25512 25513 25514 25515 25516 25517 25518 25519 25520 25521 25522 25523 25524 25525 25526 25527 25528 25529 25530 25531 25532 25533 25534 25535 25536 25537 25538 25539 25540 25541 25542 25543 25544 25545 25546 25547 25548 25549 25550 25551 25552 25553 25554 25555 25556 25557 25558 25559 25560 25561 25562 25563 25564 25565 25566 25567 25568 25569 25570 25571 25572 25573 25574 25575 25576 25577 25578 25579 25580 25581 25582 25583 25584 25585 25586 25587 25588 25589 25590 25591 25592 25593 25594 25595 25596 25597 25598 25599 255100 255101 255102 255103 255104 255105 255106 255107 255108 255109 255110 255111 255112 255113 255114 255115 255116 255117 255118 255119 255120 255121 255122 255123 255124 255125 255126 255127 255128 255129 255130 255131 255132 255133 255134 255135 255136 255137 255138 255139 255140 255141 255142 255143 255144 255145 255146 255147 255148 255149 255150 255151 255152 255153 255154 255155 255156 255157 255158 255159 255160 255161 255162 255163 255164 255165 255166 255167 255168 255169 255170 255171 255172 255173 255174 255175 255176 255177 255178 255179 255180 255181 255182 255183 255184 255185 255186 255187 255188 255189 255190 255191 255192 255193 255194 255195 255196 255197 255198 255199 255200 255201 255202 255203 255204 255205 255206 255207 255208 255209 255210 255211 255212 255213 255214 255215 255216 255217 255218 255219 255220 255221 255222 255223 255224 255225 255226 255227 255228 255229 255230 255231 255232 255233 255234 255235 255236 255237 255238 255239 255240 255241 255242 255243 255244 255245 255246 255247 255248 255249 255250 255251 255252 255253 255254 255255 255256 255257 255258 255259 255260 255261 255262 255263 255264 255265 255266 255267 255268 255269 255270 255271 255272 255273 255274 255275 255276 255277 255278 255279 255280 255281 255282 255283 255284 255285 255286 255287 255288 255289 255290 255291 255292 255293 255294 255295 255296 255297 255298 255299 255300 255301 255302 255303 255304 255305 255306 255307 255308 255309 255310 255311 255312 255313 255314 255315 255316 255317 255318 255319 255320 255321 255322 255323 255324 255325 255326 255327 255328 255329 255330 255331 255332 255333 255334 255335 255336 255337 255338 255339 255340 255341 255342 255343 255344 255345 255346 255347 255348 255349 255350 255351 255352 255353 255354 255355 255356 255357 255358 255359 255360 255361 255362 255363 255364 255365 255366 255367 255368 255369 255370 255371 255372 255373 255374 255375 255376 255377 255378 255379 255380 255381 255382 255383 255384 255385 255386 255387 255388 255389 255390 255391 255392 255393 255394 255395 255396 255397 255398 255399 255400 255401 255402 255403 255404 255405 255406 255407 255408 255409 255410 255411 255412 255413 255414 255415 255416 255417 255418 255419 255420 255421 255422 255423 255424 255425 255426 255427 255428 255429 255430 255431 255432 255433 255434 255435 255436 255437 255438 255439 255440 255441 255442 255443 255444 255445 255446 255447 255448 255449 255450 255451 255452 255453 255454 255455 255456 255457 255458 255459 255460 255461 255462 255463 255464 255465 255466 255467 255468 255469 255470 255471 255472 255473 255474 255475 255476 255477 255478 255479 255480 255481 255482 255483 255484 255485 255486 255487 255488 255489 255490 255491 255492 255493 255494 255495 255496 255497 255498 255499 255500 255501 255502 255503 255504 255505 255506 255507 255508 255509 255510 255511 255512 255513 255514 255515 255516 255517 255518 255519 255520 255521 255522 255523 255524 255525 255526 255527 255528 255529 255530 255531 255532 255533 255534 255535 255536 255537 255538 255539 255540 255541 255542 255543 255544 255545 255546 255547 255548 255549 255550 255551 255552 255553 255554 255555 255556 255557 255558 255559 255560 255561 255562 255563 255564 255565 255566 255567 255568 255569 255570 255571 255572 255573 255574 255575 255576 255577 255578 255579 255580 255581 255582 255583 255584 255585 255586 255587 255588 255589 255590 255591 255592 255593 255594 255595 255596 255597 255598 255599 2555100 2555101 2555102 2555103 2555104 2555105 2555106 2555107 2555108 2555109 2555110 2555111 2555112 2555113 2555114 2555115 2555116 2555117 2555118 2555119 2555120 2555121 2555122 2555123 2555124 2555125 2555126 2555127 2555128 2555129 2555130 2555131 2555132 2555133 2555134 2555135 2555136 2555137 2555138 2555139 2555140 2555141 2555142 2555143 2555144 2555145 2555146 2555147 2555148 2555149 2555150 2555151 2555152 2555153 2555154 2555155 2555156 2555157 2555158 2555159 2555160 2555161 2555162 2555163 2555164 2555165 2555166 2555167 2555168 2555169 2555170 2555171 2555172 2555173 2555174 2555175 2555176 2555177 2555178 2555179 2555180 2555181 2555182 2555183 2555184 2555185 2555186 2555187 2555188 2555189 2555190 2555191 2555192 2555193 2555194 2555195 2555196 2555197 2555198 2555199 2555200 2555201 2555202 2555203 2555204 2555205 2555206 2555207 2555208 2555209 2555210 2555211 2555212 2555213 2555214 2555215 2555216 2555217 2555218 2555219 2555220 2555221 2555222 2555223 2555224 2555225 2555226 2555227 2555228 2555229 2555230 2555231 2555232 2555233 2555234 2555235 2555236 2555237 2555238 2555239 2555240 2555241 2555242 2555243 2555244 2555245 2555246 2555247 2555248 2555249 2555250 2555251 2555252 2555253 2555254 2555255 2555256 2555257 2555258 2555259 25552510 25552511 25552512 25552513 25552514 25552515 25552516 25552517 25552518 25552519 25552520 25552521 25552522 25552523 25552524 25552525 25552526 25552527 25552528 25552529 25552530 25552531 25552532 25552533 25552534 25552535 25552536 25552537 25552538 25552539 25552540 25552541 25552542 25552543 25552544 25552545 25552546 25552547 25552548 25552549 25552550 25552551 25552552 25552553 25552554 25552555 25552556 25552557 25552558 25552559 25552560 25552561 25552562 25552563 25552564 25552565 25552566 25552567 25552568 25552569 25552570 25552571 25552572 25552573 25552574 25552575 25552576 25552577 25552578 25552579 25552580 25552581 25552582 25552583 25552584 25552585 25552586 25552587 25552588 25552589 25552590 25552591 25552592 25552593 25552594 25552595 25552596 25552597 25552598 25552599 255525100 255525101 255525102 255525103 255525104 255525105 255525106 255525107 255525108 255525109 255525110 255525111 255525112 255525113 255525114 255525115 255525116 255525117 255525118 255525119 255525120 255525121 255525122 255525123 255525124 255525125 255525126 255525127 255525128 255525129 255525130 255525131 255525132 255525133 255525134 255525135 255525136 255525137 255525138 255525139 255525140 255525141 255525142 255525143 255525144 255525145 255525146 255525147 255525148 255525149 255525150 255525151 255525152 255525153 255525154 255525155 255525156 255525157 255525158 255525159 255525160 255525161 255525162 255525163 255525164 255525165 255525166 255525167 255525168 255525169 255525170 255525171 255525172 255525173 255525174 255525175 255525176 255525177 255525178 255525179 255525180 255525181 255525182 255525183 255525184 255525185 255525186 255525187 255525188 255525189 255525190 255525191 255525192 255525193 255525194 255525195 255525196 255525197 255525198 255525199 255525200 255525201 255525202 255525203 255525204 255525205 255525206 255525207 255525208 255525209 255525210 255525211 255525212 255525213 255525214 255525215 255525216 255525217 255525218 255525219 255525220 255525221 255525222 255525223 255525224 255525225 255525226 255525227 255525228 255525229 255525230 255525231 255525232 255525233 255525234 255525235 255525236 255525237 255525238 255525239 255525240 255525241 255525242 255525243 255525244 															



非舗装の道が続く校門前

霧雨氣をベースに、いわゆる「井草の自由」、
自主・自律へと道が拓かれて行くのであった。
各委員会活動も活発で、中央委員会の世論
調査がよく実施されたものである。その一つ
(昭和二十六年一月四日・井草新報)によれば、

各高校では「社研部」が青年の知を標榜し
ていた時代でもあるが、井草では「社会部」
がそれに該当した。弁論を中心に思想、経済
の各研究班を設け、地道な研究を積んでいた。
しかし、やがて蜂起する血のメーデーに直接
関わった者はいなかったようである。学生と
しての良識、穏やかな雰囲気は、現在に井草
の伝統として受け継がれている。

やがて、谷先生の御着任と続き、そうした

霧雨氣をベースに、いわゆる「井草の自由」、
自主・自律へと道が拓かれて行くのであった。
各委員会活動も活発で、中央委員会の世論
調査がよく実施されたものである。その一つ
(昭和二十六年一月四日・井草新報)によれば、

一、全校生徒と委員会の連絡を密に。

二、上からの質問を投げかけて欲しい。

三、投書箱の設置と世論調査の実施。

となっている。一般生徒と委員会とのギャップを埋めることを、委員ではなく一般生徒側が求めているのが印象に残る。

ここで当時の生徒觀を学年別に覗いてみよう。意外にも良妻賢母が上位を占めているのに驚く。

三年生「私のなりたい人」

家庭婦人(良妻賢母)三五%が最も多く、
他に秘書、教員、医者、弁護士、栄養士、

バレーナ、ピアニスト……。

二年生「理想の人」

教養豊かな人。とりわけ生活力のある人
が半数以上で、「……けだしア・プレゲー・
ルの面目躍如たる所か」と結んでいる。

一年生「私達の欲しいもの」

講堂四三%で断然トップ。次いで体育館、
映写設備、プール、更衣室……と続く。

オクラホマ・ミキサーについて想い出深いの

をひっぱり出して着用し出演したのでした。
中でも大場さんの夜叉王が見事な出来栄えで、
大層好評を得ました。(昭和二十二年卒業)

K・H

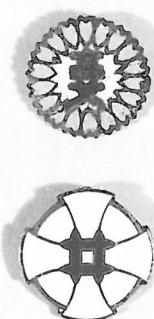
世の中すべて物のない時代でしたので、教科書も最初は粗末な更紙に、バラバラに印刷されていたものを配られ、自分で切ってペイジを合わせ綴じて使ったことを覚えてます。

当時は制服など勿論なく、入学式の写真はそれでも精一杯のオシャレをして、皆輝いた顔をして写っていますが、足元は、靴ありズックあり、下駄ありと懐かしくも哀れをおぼえます。

隔週土曜日休校(自主研究)の十一日制と

いうときもありました。また、「暮しの手帖」
社の花森安治氏(故人)の講演会があり、変わった風貌のお姿が目に残っています。

(昭和二十七年卒業)



校 章
上: 第18高女
下: 現在

岡 安 敏 子

ある日、大沢先生から「都立書道展に出しなさい」と言われ、毎日早朝より練習した。井草高からは私が金賞、部長が銀賞、下級生

がスクエアダンス。雨あがりの中庭を賑わしたものである。男子が未だ少ない頃だったのでの奨励には大分苦慮したらしい。先生方は、やっと馴染み始めた男女共学の男女の溝を埋めることに躍起となつた。消極的な男子を引張り出そうと、昼休みになると放送で呼びかけたものである。てれているニキビ面の男子の手をとる白い指のお姉様ぶりも、ついこの間のように目に浮かぶ。

当時は読書家が結構多かった。希望図書のアンケートでは次の結果が出ている。（昭和二十六年七月十五日刊・井草新報）

谷崎源氏（谷崎潤一郎新訳・源氏物語）

宮本百合子全集

ジエニーの肖像

寺田寅彦全集

白痴（ドストエフスキイ）

浮雲（林芙美子）

白痴（宇野浩二）

武者小路実篤もの……

等々。尚、家庭科関係に

「アメリカン・スタイル全集」

とあるのは、時代の反映か極めて懐かしい。

現在迄、延々とその伝統を守っている行事「水泳教室」のルーツとも言えるのが「夏季水泳実習」である。中でも日本古代泳法＝水府流伝授は特色があった。昭和二十六年、第一回合宿、千葉県館山市立川高校寮に八十

五名が集まつたものである。参加者には、「日本水府流太田派」の免状が授与された。民衆の声をとらえる為に、ひとところラジオで「街頭録音」なるものがはやつたものだが、わが校では「校庭録音」が実施された。がその実は、謙虚なお嬢様方が多く、発言が少なくて「磁気録音機の出動虚し＝インタヴューに消極的」であり、「文明の利器が涙を流して泣いた」とか。ちなみに、P・B・Cの秘蔵利器のお値段、八万五千円。

昭和二十八年を迎えると、さすがに当初のエネルギーにも翳りをきたし、種々改善策への努力がうかがえる。

昭和二十八年を迎えると、さすがに当初のエネルギーにも翳りをきたし、種々改善策への努力がうかがえる。

設立が府立十八高女というごとく女子高であつたため、私共のクラス編成は女子三十名、男子十五名という比率で、入学したての頃は女子に圧倒される感じがありました。

男子十五名のほとんどが他校を受験して井草にまわされて来た経緯があり、入学したての四・五月頃はお互に牽制し合つてなかなかはじめませんでした。それが中間テストあたりから、実力にボロが出て来て、殻がどれ、皆お互いにどんぐりの背比べだったことが解かり、気楽な雰囲気になつてきました。

まだ体育館がなく屋外コートでの練習なので天候に左右されることが多く、特に冬になると霜柱のためコートが使えず、今もあると思いますが朝礼とか生徒会の総会などに使われていた、アスファルト製の中庭での練習でした。

相手高校での試合ですと体育館で出来るので、勝敗を抜きにしてうれしかったことを覚えてています。

プールがないので、夏には千葉の館山に臨

人が佳作入賞。また「計算尺の扱い方」などでは生まれて初めて鉛筆でガリバンをきり、コヨリで綴じたこと等々……。

丁度その夏から、洗濯機、テレビが店頭に並んだ。

（昭和二十七年卒業）

閔 場 昭 德

昭和二十八年を迎えると、さすがに当初のエネルギーにも翳りをきたし、種々改善策への努力がうかがえる。

設立が府立十八高女というごとく女子高であつたため、私共のクラス編成は女子三十名、男子十五名という比率で、入学したての頃は女子に圧倒される感じがありました。

男子十五名のほとんどが他校を受験して井草にまわされて来た経緯があり、入学したての四・五月頃はお互に牽制し合つてなかなかはじめませんでした。それが中間テストあたりから、実力にボロが出て来て、殻がどれ、皆お互いにどんぐりの背比べだったことが解かり、気楽な雰囲気になつてきました。

まだ体育館がなく屋外コートでの練習なので天候に左右されることが多く、特に冬になると霜柱のためコートが使えず、今もあると思いますが朝礼とか生徒会の総会などに使われていた、アスファルト製の中庭での練習でした。

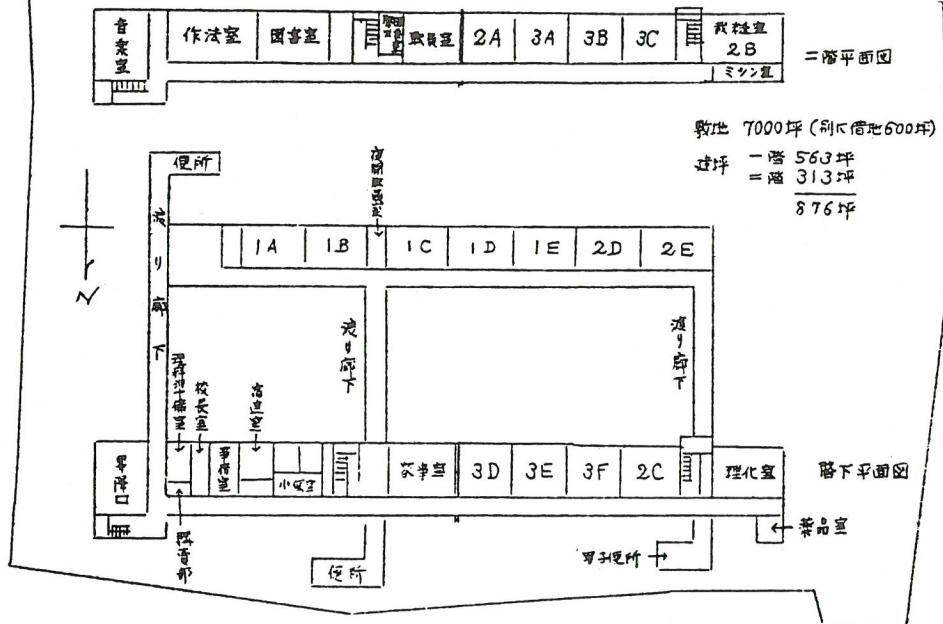
相手高校での試合ですと体育館で出来るので、勝敗を抜きにしてうれしかったことを覚えています。

プールがないので、夏には千葉の館山に臨

活発なクラブ活動



校舎配置図



この頃、突然、遠足をめぐって一年生が抗議集会を持った。学校側だけで決めた「水郷巡り」に対する決起である。計画立案への生徒側不参加、遠足不参加者の一方的欠席扱い等が原因である。急速、生徒側委員と担任団が協議、三百円内外の場所と決定、「銚子」に変更された事件である。井草には常に話し合いがあり、生徒を紳士と見做す教育が存在するのであった。

この六月には生徒会会則の改定があった。二度にわたる大会流会の難航だったが、これは暑さと時間超過によるもので、定数不足の故ではなかった。しかし、定例中央委員会の定数が充たされず流会することもままあつたようで、これ等の活性化もその改正の一目的であつたろう。

また、生徒会活動沈滞の遠因に、定期試験が挙げられているのは面白い。当時は中間テストが無く、各学期一回の期末テストだけだった。したがつて範囲が広く、負担が大きかつた。女子生徒の半数しかいなかつた。

「生徒会は保守的で、伝統校則に盲従」「生徒の意見をもっと採り上げよ」「週番会の集合が遅い」「服装が乱れ、女子の言葉遣いが中性化」等、ルーズな生活態度を批判する動きが出来た。(昭和二十八年三月十六日刊・井草新報)

(昭和三十年卒業)

（昭和三十年卒業）

谷 明
月に一、二回、土曜日が休日だったと記憶している。

クラスの仲間で金曜日の放課後や土曜日に、奥多摩に自転車旅行を楽しんだ。青梅の先の吉野梅林のつり橋の下、多摩川の河原でのキャンプ、杉林の吉野街道の走りはまた格別だった。自転車に積んだ米や缶詰、みそ汁をつくつて、飯盒炊さん、今でもその頃の楽しさが忘れられず、バーベキューやキャンプ生活をする。

(昭和三十年卒業)

木造校舎

IIこの自然の恩恵のなかで

青木三郎

戦後教育基本法で男女共学の原則が確立され、当校も男女共学になったが、男子生徒は

海実習があり、参加人数は全校で一クラス分ぐらいでした。学年、クラス枠のない家族的な集まりで、引率の松島、天野、山根、松島(宏)の先生方も普段とはちがい余裕を感じられました。実習終了後、各個人に日本水府流太田派から免状が与えられました。

れていた。

体育館兼講堂の建設設計画がPTAより持ち上がったのもこの頃で、「建設資金協力会」が設立された。ところが業者の不誠意等によって完成が大幅に遅れて大きな問題となつた。体育館すら無い状態であるにも拘らず運動は盛んで、ハンドボールでは二年連続で国体の東京代表になっている。当時の主将・森岡さんの

「本校として恥ずかしくない態度でベストを尽くします」

とは決意の程が窺える。井草のハンドボールの伝統はこの辺りからであろうか。そして、クラブに勉学に、日々精進する彼等を見守っていたのが、校門脇の万葉植物園。梅木先生

と共に万葉人の心を訪ねた人も少なかろう。

さて、ここで当時の指導部長・生野先生の御投稿に触れてみよう。格

晴れやかな入場・体育祭

「前略……秩序整然たる行動が出来ることによつて

その真価が發揮される。……中略……それは

井草高校の生徒各個人の自覚と自律性ある行動の程度如何にあるといえよう。……中略……

われわれの望むところは他律的な整然さではなく、自律性に立脚しながらも決して他律的な軍国調の集団行動に負けないものを考えているからである。……後略」

(傍点編集子、昭和二十八年九月十日刊・井草新報)

民主主義における集団行動の規範を探ろうとする姿がないだろうか。

井草新報の社会事評欄には、「教育」法案について」(二〇〇齊藤昌彦生徒会長)の投稿があるが、犯すべからざる思想・言論の自由への希求がまざまざと伝わり、自由学苑としての健全さを見ることが出来るのだ。

従つて自治の気風も高く、"自分達の学苑は自分達で"の意識も濃く、学校側から修学旅行廃止の線が出て来たときなどは生徒代表が各クラスを回つて説得し、教員側と充分に討議を重ね、ついに旅行を可能にしたというケースがある。



廿 樂 美登利

とにかくのんびりしていました。府立十八

高女の名残とかで、男子生徒が女子生徒の半分。今日の女性上位の風潮を先取りした様な雰囲気でした。唯、女子の大学進学が一般的ではなかつた為、頭の良い、しかも美人の人達がみんな銀行に就職した感じがします。

生徒会はそれでも男子が見事にリード、私達との交流を深めようと、三校親善大会と銘打つて、独協、和光の生徒達と井草の校庭で体育大会なども計画されました。その時、後に有名なロックシンガーになつたミッキー・カーチスが、和光の生徒として来ていたのはなかつたでしょうか。(昭和三十一年卒業)

校舎は北側一階建、南側平屋と体育館、全てが木造建築であった。

中庭では全校生徒でフォーケダンスの練習をしたり、運動会の終わりには使用した廃材を利用してファイア・ストームをし、全校生徒で踊り語り合い、楽しいひと時を過し、中には恋が芽生えた人もいた事を記憶している。

(昭和三十二年卒業)

竹下信雄

昭和三十年代も初めの頃である。道路事情はいまとは全く違っていた。千川にはどうと

男女の円陣がボールを空へ

—男女共学の完成—

昭和も三十年を迎えると、神武景氣につれて家庭電化時代が「エデンの東」からやって来た。この期に至り、わが校ではやっと男女同数に漕ぎつけたのである。

ところで、これを機に「六日制」に切り替わる。つまり以前は「五日制」又は「十一日制」＝隔週土曜研究日制が敷かれていた。六日制切替については生徒側に反対が結構あつたようだ。次いで男女共学の完成を見て、從来は消極的・破壊的であった男子への新たな期待が高まっている。また、いわゆる旧制高女時代の遺風、「良妻賢母」のイメージからの脱却があるうか。

男性原理の進入と相俟つて進学校への道を意図し出した。とは言うものの、受験者は未だ約半数、百二十名程度である。男子七十四名、女子四十八名で、うち、早稲田大八名、都立大九名、教育大七名、東大六名等々である。生徒側は、今迄の「十一日制」なら研究日を受験勉強に充てられるのに、とか学校全体が受験の雰囲気はない、とかの不満を漏らし、一方教員側は、生徒諸君は予備校や螢雪時代

の利用に走り、学校の授業に魂が入っていない（吉川先生）と嘆く状況であった。

さて、男女同数とはいえ、上級生は未だその比率が一対二である。そんな中での男女交際は如何なるものであつたろうか。やや緊張した学校側の一方的指導に、或る種の反発は免れなかつたという。

「男女は協力すべきもので、他から干渉されるべきではない」

「男女の交際を否定する指導である」

「父親が子供に諭すように、優しく言い聽かせて欲しい」

等の意見。また、「女の先生は細かい処に立ち入り過ぎる」とか、「我々が今考え程薔薇色ではなく、おおむね交際に対する消極的で

うと水が流れ、サクラなどの大木が枝を伸ばして、幅が現在の五分の一もなかつた道一ぱいを覆つっていた。一部は舗装されていかつたようだ。夏もひんやりとした風が吹いていた。旧早稲田通りは、車のすれ違いもままならぬ、細い曲がりくねつた道だつた。石神井川沿いの道の周囲には、水田と畠が広がつており、冬の風の強い日には、とても走りにくかつた。

春先、風が吹くと、畠から大量の土が舞い上がつた。当時は木製の校舎であり、ガラス窓も木製で隙間だらけだつたから、こうした日には教室内にも埃がたっぷりと舞い込んだ。大陸から飛んでくる黄砂が高く全天を覆い、地面近くには褐色の畠土が渦巻いている。そんな風が吹くこともあつた。

十年ほど前のこと。都立高校の評判を書いた記事が雑誌にあつたとか。いわく「恋愛の井草」。

高校の女教師が男子生徒と仲良くなつて……。ありきたりの小説があつて、高校の名も教師の名もぴったり井草高校に合致する。という事件が私達の入学直前にあつた。これも残念ながら、事実ではなかつた。

（昭和三十三年卒業）

下駄箱の唄 ▶
一ヶ月半も経つたのに隣の席の異性と一言も会話がない人もいたという。
外界の砂川闘争、原水禁世界大会にも静かな対応であった。



一、芸能発表

二、研究発表

三、展覧会

四、前日祭

創造される文化

—井草祭への変貌—

青年期は知性への憧憬止み難いものであるが、やがて「知的雰囲気を作れ」とのスローガンの下に、秋季行事や中央委員会を再検討、文化祭へのこ入れ等積極的な動きが起ころる。知的雰囲気が昂まれば文化も、進学も高まるというのが狙いだ。この時、特別教室も新築され、六学級に膨らみ生徒数増加の傾向にあつた。

昭和三十一年には新教育課程（コース別）を導入した。今迄の必修科目三十八単位+自由選択四十七単位を

文科・理科・一般

の三コースに分類し、進路を決定づけてしまった。これはなるほど受験に對して効率を考えた場合には合理的かも知れないが、それが人間にとって何なのか、という本質論も忘れられず、一抹の不安を抱く生徒もあつた。

ところで、より高い文化を求めるのが学校の姿勢であるが、これ迄の文化祭はどうなつていたのだろうか。内容を窺うと、

の四部門に分かれ、四の前日祭は歌と討論とで構成され、最後をフォークダンスで締めていた。「討論」は男女共学をテーマに盛り上がりを見せた。また、この研究発表は

「生命の起源」（理化部）、「沖縄基地の展示」（社研部）

で時宜を得た佳作であった。

ところが、文化祭と運動会との二大イベンントに、生徒の集中力が分散させられるとの配慮から、両者を統合し、ここに「井草祭」と銘打つことになったのである。

この年、昭和三十一年は、第一回進学模試、NHK録音「私の進路」出演、サッカー部国民体育大会本大会に出場、と華々しい年でもあつた。

第一回井草祭の全日程は次の通りである。
九日（水） 井草祭開会式、文化祭第一日
十日（木） 文化祭第二日
十一日（金） 弁論大会
十二日（土） 映画会
十三日（日） 運動会、井草祭閉会式
ボン・ファイヤー

現在の井草祭では、弁論大会と映画会とが、展示会、体育祭リハーサルに変わったが、ほ

神保捷介

秋の文化祭の本番を明日に控え、芝居やコラスの出し物を予定しているグループが昼過ぎから体育館につけかけ、急ごしらえの舞台やフロアで夫れ夫れのリハーサルに一生懸命。照明器具やどん帳等と一緒に、道具屋から借りて来たミラーボールもほぼ舞台の真上の天井からつるされ、さつきからテストを始めているが何故か回らない。つるす長さや配線もあれこれ試してみるものの、ボールは唯じっとしたまま。ところが、夜半になって、文句言っていた連中も帰った後、駄目でもとヤケ半分でもう一度つるし、スウィッチを入れたら回り出したのだ。回るボールに実に不思議な思いがして來た。（昭和三十五年卒業）

平野栄子

オクラホマ・キサーの音楽が校内に流れています。

「さあ、フォークダンスをしましよう。皆さん中庭に集合して下さい」と放送があると、男子も女子も三々五々教室から出て来ます。生徒会の役員が中心となって踊り出し、輪になつてステップを踏むのでした。あの頃は「独協高」「和光高」「井草高」の三校親善や「石神井高」との親睦体育大会等の行事があり、それに運動会、文化祭の後夜祭、雨の日の体育の時間等、フォークダンスをする機会

ば同じ形で五十年の今日迄継続されている。

内容であるが、

オペレッタ「手児奈」（音楽部）

「奥多摩山行」（地理部）

「文学愛好者の傾向」（文芸部）

等はかなりハイ・レヴェルであったという。

三日目の弁論大会はそれ迄に、別の形で既に四回が開催されている。弁論大会が成り立つ為には、発表者、聴衆共にかなりの知力が要求されよう。今昔の感に堪えない。

五日日の運動会の反省座談記に、「国旗掲揚の時、君が代が無かったのは寂しい」とあるがどう判読すべきだろうか。



井草祭ゲート
ゲート作りは現在も続いている



井草・自由の基盤

—政治と危機意識を超えて—

が非常に多かったのでした。

（昭和三十六年卒業）

国 分（坂井）希久子

社会全体が大きな変革のエネルギーに溢れているような時代でした。比較的大人しかつた井草高校にもこの余波は少しあって、生徒会主催で「安保是か非か」という討論会をやったりしました。でも全体的に社会の動きに対する関心でしたから、先生方の中には歯ぎしりをなさっていた方もあったのではないかでしょう。（昭和三十七年卒業）

風田川 植男

秋の文化祭は、歌劇「手児奈」上演（六〇・一〇・二一）したが、美しい旋律が多くあり、女生徒の間でかなり人気を呼んだ。文化祭の準備中に、校内放送で社会党委員長浅沼稲次郎氏殺害のアナウンス（六〇・一〇・一二）を聞き、不安な思いにかられた。世の中は安保闘争の大きなうねりの真っただ中にあつた。

フォーラムダンスが盛んで、この時だけは政治的活動家も、運動部の連中も楽しく踊っていたように記憶している。

（昭和三十八年卒業）

（二年・谷口明宏さん、井草新報五〇号）
といった実状である。こうした論説の基盤となるのは普段の議論や話し合いだろう。例えば当時、身近なテーマを取り上げ討論を重ねていたホームルームもあったという。しかし反面、軽快車的生活派といったムードに流

されて行くのは時代のせいだろうか。高望みや抽象的思考に思い煩わされず、万事スマートにこなす生き方、この流れは現今の中学生とも思える。

やがて待望の鉄筋三階建て校舎が完成し、夏休み前の暑い中、総出で引越が行われた。（昭和三十五年）。これが現在の管理棟東部である。

世は安保闘争の波が高まり、浅沼書記長刺殺と血生臭い事件が、また校内では「井草の自由」が危機の上から叫ばれる始める。

「学校側は厳しく取り締まるべきだ」

「規律を設けよ」

との内部批判の中で

「罰することを、同じ学校に生活する者が果たして喜ぶだろうか」

「罰することでその原因を消滅させ得ようか、心の問題なのに」

と疑問を出し、

「自由を自ら縛るべきでない」

と反論する「世界の前にあるわれら」であった。

問題意識の高い生徒が多いとは決して言えなかったが、安体統一行動に参加した者もあつた。「誇りと、同じ人間同士が争う悲しみと、学校の名を汚したくない感情」とが汗と埃で若い顔に塗り込められていた。将にこのとき我が校はようやく「十周年を迎えたのである。

三年生の三分の一は受験校化を願っているが、大方の進学校と同様に、実力テストの上位五十名の氏名貼り出しを行っていたのもこの頃である。受験校化が高校の本来あるべき姿なのか、人間教育が本来のそれであるのかをめぐって論争が展開された。

やがて生徒数も急増、一年生は十クラスに膨らみ、パイプ教室二室を増設、急をしのいだ。引き続く生徒増に備え、特別教室（地学）、普通教室六室が竣工、この地域の人口増加と共に、二十五周年にしていよいよ大型の高校に変貌した。同時に、林間施設・からまつ山莊が長野県湯ノ丸高原に竣工した。

我が国の大規模発展、生徒増、施設設備拡充の上に、大型進学校としての道を歩むことになる。あたかも学校群制度施行の時代でもあつた。

西田 実
現在、社会問題にもなっている規則づくりの管理教育や、効率優先の受験教育などからは考えられない、自由でゆとりのある環境のなかで、私達は楽しい高校生活を送ることができます。そしてこのような中から、自主性や真の自由を学ぶことができたように思います。

（昭和四十年卒業）

女性（匿名）

今思えばのどかな環境の中に高校があつたと、昔をなつかしく思い出します。

体育祭のクライマックスは、焚き火を囲んでのフォークダンス。ずい分長い時間、いろいろな曲を踊った気がします。そしてクラブが遅くなると、上井草駅前のラーメン屋さんで一杯三十五円の、野菜いっぱいのラーメンを食べたこと……いろいろな思い出が走馬燈のようにあらわれ懐かしさがいっぱいになりました。

（昭和四十五年卒業）



早春の風流れる学苑で・正門脇

興隆期の動向

— 牧歌的・精神風土の中で —

教育の底流

— 貫く棒の如く —

昭和三十年末から四十年初めにかけても、「井草の自由」の問題は、繰り返し論じられている。それは、三十年代後半ごろから、特に乱れらしい風紀に対する批判というかたちで展開される。

昭和三十九年一月には、三年生のあるクラスから、「自主精神」を奨励しようとする、「校風刷新運動」なるものが提起され、口火を切る。続いて、同十一月には、「すばらしくしようじゃないか我が井草」のテーマでの朝の校内掃除運動が、井草始まって以来の、九〇%を超える投票率をもって行われた。また、昭和四十年にも、個人の良識に期待するという「井草ボランティア運動」や、上下履の区別を徹底する「校内美化運動」なども、

主に生徒会役員の手で実施されたという。

資料不足で、それらの運動が、具体的にどんなかたちで展開され、実現と成果を見たのかは、今明らかにすることはできない。しかし、必ずしも全校的な盛り上がりとはならなかつたようで、かなりの生徒は、依然とした混乱の中につながったと推測される。

「自由」の論議は、そのようなジレンマの中からなされているのである。

「井草の自由」については、すでに昭和三十年代初めには、具体的なことばとして現れている。三十五年十一月発行の「井草新報」の中に、井草の自由を守るために、先生方の寛容な態度に甘えず、高校生らしく自己を律せよ、という趣旨の論説が掲載されている。これが議論としての最初であるらしい。だが、どのような経過によって「自由」が語られ出したのかは明らかではない。はつきりした職員会議などでの討議の結果として生まれたものでもないようである。ある見解によれば、

B学級通信「井草雑感」

若林 覚

4/21 「井」の字がシャクの種

入学後二週間を経過しました。いろいろ雑事に追われ、その上授業がないので、生徒諸君とはまだ形式的なふれあいだけです。早く人間同士の交流を深めたいと思っています。入学式当日、「旧女子系はとっくの昔に卒業したと思っている」と、タンカをきつてみたものの、歴史の重みは大へんなものだと思いました。受験番号の横に「井」と書いてあるのを見て、ショックを受けたことを、多くの生徒が述べています。

中学で「この辺でよくない高校は井草で、ガラが悪く、不良が多い」とか、「校舎は古く、制服はカッコ悪く、進学率は低い」と聞かれていた「井」の字へ割当てられたとな



現在の校歌にうたいこまれている、「親愛・礼儀・自主・協同」のことばから、「自主・礼儀・責任・協力」の教育目標としての四つの柱が生まれ、その最初の「自主」が、いわゆる「井草の自由」の淵源となっているのではないかという。

ともかく、学問を教育の原点として、親し

い師弟の関係を作り出した草創期の教師たち以来の、拘束を嫌う井草の伝統が、戦後の自由な空気と結びつき、自然発生的に語られ出したものと考えるのが妥当であろう。

井草からは、いつも「自主」が離れない。

昭和四十一年度の重点教育目標を審議する職員会議。原案は次のようなものである。

れば、なるほどと思います。

何人かの生徒は、必ず井草へ入学する筈であるのに、「心ない、不用意なことば」をまきちらす人たちに憤りを感じます。

「何の心配もナイジャナイ」「日がたつにつれて楽しくなってきた」「ここでの三年間の生活をうれしく思う」「中学の時の友達にあうと、必ず学校がおもしろくないといつている。私は学校も、B組も、おもしろくないとは思っていない。むしろここに入つて得をしたと思っている」「大変な不満をもつて入学したが、いざ入つてみるといいものである。満足感を覚えることもしばしばである」と、現代っ子の変り身の早さ、たくましい順応性、樂天性をいかんなく發揮しているように感じています。

「最初に考えていた学校とは、様子がだいぶちがっているのに気がついた。なんとなくこれからが楽しみだ」と怜俐な目をむけているかと思えば、「入学前はいやだったが、入つてみればなんとも思わない。結局、どの学校へいっても同じだろう」と達観している者もいます。

「あまり良いとは思わないが、ここでいつしうけんめいに頑張るつもりだ」と、斜に構えて、スネたり、リキンだりもしています。小尾通達以来、小さい心を悩ましながらも、たくましく成長している様子が感じられます。



昭和42年ごろの井草周辺

(1) 進学指導に力点をおく。

(2) 礼儀正しく、規律を守る。

(3) 清掃美化と公共物の愛護。

東京オリンピック後の、高度経済成長が進み、高学歴志向が一段と高まっていた時代である。弊害が叫ばれ出している時におかしいという意見はあったが、(1)については、上位者を伸ばすために学習活動を強化することで承認されている。(3)も、井草生に最も欠けている点として承認。だが、(2)については、特に生徒の「自主活動」を重んじる点からの、修正案が提出されている。議論の末に、「規律・礼儀を中心とした自主活動の養成。」で一致している。

これから後にも先にも、井草から「自主」の文字は消えたことはない。教師側からの押しつけや圧力を嫌うのである。生徒の「自主精神」を尊重し、育てようとする姿勢が、あたかも一本の堅固な棒の如く貫かれているのである。

ただし、問題は、生徒たちの中に、その意識がどれだけ浸透し、どの程度の自覺的な行動が生まれていったか、ということである。全体を通して見ると、のんびりとして、素朴で、感じのよい集団。その集団が、善かれ悪しかれ、井草生としての生徒像を形成している。井草タイプと呼ばれる生徒たちである。創作活動が活発であった。昭和三十年代末

から四十年代初めにかけての生徒会誌『いぐさ』には、詩・隨想・手記などの多くの作品が載せられている。希望・平和・思索・恋・友・孤独・虚無・死・神などを扱った作品は、悩み多い青春の日々の思いを、どれも豊かな感受性で詠いあげている。のびのびとした校風の中で、生徒たちはいきいきと活動し、発散させていたようである。『いぐさ・三号』(三十八年三月発行)に寄せている、津川英佐子さんの手記は、姉の臨終を描きつつ、生の重みを今に伝えている。体験に裏打ちされたものを、感傷を排除した文体で語る文章は、それ故に読む人に大きな感動を与えたにちがいない。

だがしかし、「自由」の空氣の中で、はつらつと個性を発露させている多くの生徒たちがいる一方で、無軌道、無自覚ぶりを發揮する生徒たちがいたことも、事実であるようだ。ある朝、あるクラスで、何げなく「遅刻する人が多いですね。」と言ったら、「そこが井草のいいところですよ、自由で……」という声があつてハッとした。時間が決められているからこそ、それに遅れまいと努力することも出来、又遅れればその非を認め、他もそれを許す自由も生まれるので、最初から約束も何もないのでは、かえって人は不安で不自由でならない。その約束が制約であり、規律であろう。それがるのは自

4 / 22 勉強！ べんきょう！ ベンキョウ！

「高校へ入ったら遊べるだろうと思ったが、大変なまちがいだった」「一体全体、ついていけるだろうか」と、不安な表情をかくすことができない。

「進度がはやい。毎日、数学・英語であれこれしそうだ」と悲鳴を上げているかと思うと、「どうも、英語や国語の程度が低いのではないか」と頭をかかえたり、「入学早々、落着いていないのに、こうあおられてはやりきれない」と、いささか反発もしている。

「昼休み位もっと長くして、ひと遊びさせて貰いたい」「今までろくな勉強しなくても結構点数はとれて、まにあっていたのに」と、中学時代の幼さから、△自分の頭を考え、自分の手足で行動する▽体制にきりかえられない苦しさがにじみでいるようです。
乗りこえられるか、挫折するのか、大事な壁にぶつかっているのです。すべての生徒が無事にのりこえられることを願っているのですが、心配です。

5 / 15 クラブ活動の情況

五月六日現在で、クラブ加入者の調査をした結果は次のような数です。男子二十四名の

教育課程及び受講生徒数一覧表

(昭和38年度)

教科	科 目	1 年		2 年		3 年	
		単位	人數	単位	人數	単位	人數
国 語	国語 甲乙文 国漢 現代国語 古典乙I	3 2	513 513	3 2 3	370 370 370	3 2 3。	370 370 153
社 会	日本史 世界史 人文地理 地	4	513	5	370	5△ 5△	182 266
数 学	数学 数学 数学	I II III	6 513	3 3	370 370	5△	141
理 科	物化生 地	4 2	513 513	3	370	3。 2 2	118 370 370
体 保	保健	1	370				
育 体	体育	男4 女2	271 242	2	370	3	370
芸 術	音楽 美術 書道	2× 2× 2×	158 158 197	2× 2× 2×	134 110 83	2× 2× 2×	95 158 117
家 庭	家庭 一般 物食被保 手芸	2	242	2×	43	5△ 5△	125 26
外	英語	5	513	5	370	5	370
	計	32		32		32	
			×から 一科目		×から 一科目		△から 一科目 ○から 一科目

由そうに見えながら、気まで無規律なのがだ。

同じ『いぐさ・三号』にある一教師からの問い合わせである。

H.R.運営を機械的に処理しようとする教師に向かって、生徒の自主性を尊重せよと抗議しながら、授業中には平気で声高に雑談し、掃除当番をさぼって他人に迷惑をかけながら、級友の非協力ぶりを責めたてる。学業・家庭・貧しさ・異性などの劣等感からヤケになり、反社会的行為に出る幾人かの生徒たち。

『いぐさ・六号』(昭和四十一年三月発行)には「井草の自由」の特集記事が組まれている。自覚的な生徒たちの、乱れた校風に対する啓蒙的な文章が多い。遅刻・礼儀・制服・集会の態度・下校時間などの問題を取り上げ、井草には規律を守らない者が多いので、規律がないように思われていると指摘し、先生か

らの圧力によるのではなく、高校生らしく、自分の行動に責任をもち、規律を守る努力をすべきである、といった論調が目立っている。

だが、これらの問題は、井草の、なんと今日的な課題であることか。二十五年間少しも変化していないような気がする。けだし「伝統」とはまた、このようなものなのかも知れない。

とまれ、生徒たちは、井草で「自由」の洗礼を受けて、時にその真の意味を問いつつ、時に試行錯誤を繰り返しながら成長していくのである。そして教師たちは、多様な生徒たちをまるごとかえつ、規則を作らず、良識によって自律し、自主的に協力しながら、「勉強と生徒会・クラブ活動は両立するか」という問題が、話題にのぼりますが、個々の生徒についてはよくわかりませんが、生徒の集団についてみれば、そのエネルギーの活動は、いろんな面で、立派な花を咲かせているということになるのだと思います。

個々の生徒が立派な人間になるよう努力することはもちろんですが、生徒と生徒の相互作用ということを見落しては、これから教員は十五名、女子二十五名のうち十九名。なかなか意欲的な数です。生徒会やクラブは、「社会的訓練の場」で、いわゆる「高校生のしつけ」はこの中で行われるものですから、未加入の生徒はできるだけ加入してほしいものです。既に加入している者は、練習の苦しさとか、人間関係のわざわしさを理由に、中途で脱落しないように努力してほしいと思います。

近くのある学校に十数年来つとめている用務員さんは、こんなことをいっていました。「学校祭やクラブなどが盛んな年は、進路状況はいいですね。今年は低調だから、進路もよくないなと思うと、大体、そのとおりになります。学校祭などにぎやかだったときの生徒さんは、人間的にもしたしめます。卒業後、学校へやってきても用務員室にも声をかけていきます」

この話には、大変考えさせられました。よく「勉強と生徒会・クラブ活動は両立するか」という問題が、話題にのぼりますが、個々の生徒についてはよくわかりませんが、生徒の集団についてみれば、そのエネルギーの活動は、いろんな面で、立派な花を咲かせているということになるのだと思います。

井草には規律を守らない者が多いので、規律作用ということを見落しては、これから教員

群制度始まる

——日々、これエピソード——

昭和四十二年度から導入された学校群制度は、井草にも大きな変化をもたらした。

群制度は、それまでの合同選抜における欠陥とされた、学校間格差を是正することが、主たる目的であった。第一志望を優先し、群内選抜をするという制度は、しかし新たな格差を生み出しあしたが、井草にとっては、そのイメージを大きく向上させるものであった。そして、それは、多分に、大泉・石神井との、三十四群という組み合わせ集団が、偶然良いものであつたことによるのだが、いくらか学力も上がり、それとともにやがて、大学入試実績も伸びることとなる。教師にとっては大いに満足であつたらしい。個性ある優れた生徒たちが多く、授業にも張り合いかつたという。行動力や批判精神に富み、社会的な面にも関心を抱き、敏感な反応を示す生徒たち。井草はこの生徒たちによって、また動いていくのである。

昭和四十一年七月に竣工した「からまつ山荘」（二十五周年記念事業）では、群制度の生徒たちが、クラス全員参加の合宿を行った。数年間は続けられ、全体が非常によくまとまっ

て、整然と実施され、よい成果を収めることができたと聞く。

生徒たちにすれば、井草入学は必ずしも歓迎すべきことではなかつたようである。多くは、特に男子は、大泉高校や石神井高校に入学することを望んでいたにもかかわらず、井草に回されたことが不満であった。

バンカラ的な（こう生徒たちは言う。教師は大正デモクラシィ的と表現する。）雰囲気で、そういう意味では「自由」であった。ハイク通学（届出制？）をする生徒も多く、学校は放任しているという感じさえしたという。これらの、いくらか乱れた校風への反発が、後の紛争を導く遠因にもなつたらしい。

だが、慣れるにしたがつていくぶん好意的にもなつてゐる。男女同数の、ほのぼのとした雰囲気で、毎日がエピソードで、必ずどこかで何かがあつたという。喫煙処分にしても、土曜日の午後一時から月曜日の朝八時までといふもので、度量の大きい先生方が、どこまで自由にやらせるのか興味があつた、と当時の生徒の一人は、やや皮肉交じりに振り返る。ユニークな教師たちも、多かつたという。なりふりかまわず研究生活に没頭する先生、気象に詳しい先生、生徒と一緒に校庭の雪で車を埋め尽くす先生など。周囲には空地や畑

育を考える場合、大きな間違いをすることになると思ひます。

6／12 生徒会活動

中間テスト終了後、生徒会主催の恒例の校内大会が行われました。校内大会実行委員会が組織され、すべての運営は、生徒諸君の手によつて行われました。炎天下で、乾ききつた運動場に土ぼこりをあげての熱戦は、なかなか壮観でした。バレー・バスケットなど球技を中心に行つたのですが、B組の成績はあまりよくありませんでした。

一年生にとっては、井草高校の生活の中で、はじめての自治活動の洗礼を受けたわけです。今年の前期生徒会の役員改選が先日行われたのですが、会長一人だけしか立候補がありません。今、補欠選挙の公示中ののですが、二年生の組織活動が、多少弱い傾向があるので、一年生の役割は、極めて大きくなっています。すでに各種の専門委員会などでは、副委員長、会計、庶務などの仕事をひきうけて、動き出している者も相当な数にのぼつています。

家庭でも、生徒会を中心として行われる自治活動のために、生徒諸君が献身的な努力をすることに対し、限りない援助をしていただきたいたいと思ひます。

その中でこそ、人間相互の連帶性を基本的な理念とした、新しいタイプのたくましい指

と隔たりがあるようでも、働きかければ、中学校以上に親密で深い信頼関係を作り出せる」と、親しみを意識しているのである。

毎日がエピソード——それは決して負のイメージばかりではない。多感で真摯な生徒たちがいて、平穀無事の管理教育を嫌い、「人間ドラマのある学校」を求める教師たちがいたことと無縁ではなかろう。「井草高校」は、

終始そのような中で星霜を重ねてきたように思われるるのである。

でも、昭和四十三年三月発行の『井草新報』

には、「教師と生徒」その問題点」と題するアンケート結果を掲載している。それによると、二年生の七四%、一年生の二五%が先生に対して何らかの不信感を持っているとある。群制度一期生である一年生は、二年生に比べると少ないものの、九〇%が生徒を信頼していると答える教師との落差は大きかろう。新聞委員会では、原因を教師の人格面や授業内容などの不満にあると分析し、相互の話し合いの必要性を力説してはいる。

しかし、時代は確実に流れているように思われる。草創期から三十年代初めころまでの、素朴で和やかな師弟の交わりは、戦後の復興から発展へと成長するにつれて、進学熱の高まりとともに喪われていったような気がするのである。

それにしても、昭和四十三年度の井草には大小さまざまな事件が起きていた。それらの事件に対して、「現代っ子」と称されはじめた生徒たちは、表面では無関心を装いながら、内面には少なからぬ陰を作りつつ、ささやき合っていたようである。

また頻発する大学紛争や学生運動などにも、教師たちは、やがて高校に飛火する予感めいたものをもっていたらしい。四十三年九月ご

導者に育っていくのだと思います。

3／8 自己制御

最近「未来学」ということばが、さかんに使われています。激動する現代社会の未来への「予測」と「期待」について考察しようとしているようです。

とにかく未来は確実に変化する。かりに未来が進歩したとしても「未来を予測」することはむずかしい。社会の変化は人間の営みによって起ることですから、人間が「創造性」を發揮すればするほど困難になつてくるでしょう。今の生徒諸君は、その未来を活動の舞台にするわけですから、なかなか大変です。

教育は本来、人間の潜在的にもつてゐる、「創造性」をひき出す仕事ですから、教育の効果が上れば上るほど、社会変革のエネルギーは高まり、変化のテンポを早めることになります。

社会の変化は、どんなものであつてもよいわけではなく、個人にとつても、人類全体にとってものぞましい方向、即ち「期待される未来」でなければなりません。そうなると、どうしても「創造性」を發揮することと同時に「制御能力」が充分になければならないわけです。

例えば原子力はその最もよい例です。二十世紀のエネルギーの中心は原子力でしょう。

ろから、すでに生徒の動きを気にしている。ならば、「話し合い」の中にその防止対策を模索することもできたはずなのだが。

『井草・九号』（四十四年三月発行）の巻頭言で、生徒会長は次のように結ぶ。

常識をすてなくては、本当に自由になれない。実際に何でもやってみなくては本当のことはわからない。自分で思ったことは、叫ばなければ本当の考えにならない、と思う。

間違つてもいいじゃないか。何でもやってみようぜ。

試行錯誤の許されないことになつていてるぼくらは、あえて試行錯誤をしようじゃないか。

それが若者じやないか。そうだ、ぼくら、みんな若者にならなくてはいけないんだ。井草に回されたことの偶然を、必然へと変えていこうとする若々しい活力を感じる。その「叫び」を教師集団はしっかりと受け止めることが求められていたのではなかつたか。先に「ほのぼのとした雰囲気」とあつたが、四十一年、三年ごろから「恋愛（遊び・出会い）の井草」という風評が起こっている。

事の起りは、こんなことであろうか。

- (1) 二十年代前半の男女別学時代の合同活動で、女子校だけが特別の目でみられた。
- (2) 三十年ごろ、井草高校の名だけ実名で、自由な空気に対する憧れもあつたようで、親も

しかし、安全制御の機構を充分にもつていなければ、どんな暴走をするかわかりません。オートメ化された現代の機械はいずれも、すぐれた制御機構をもつたものです。

「自主・独立の精神を養う」ことは、いい



井草の制服

あとは無責任な、性教育と称する扇情的な小説が週刊誌に発表された。

(3) 四十年ごろ、教師と生徒の恋愛問題が発生した。（未確認である。）

だが、こうした事実だけで「恋愛の井草」

という風評が自然発生的に生ずるであろうか。昭和四十二年に群制度が発足し、それまでいわゆる「学校の格」からいと、大泉や石神井の後塵を拝していた井草が、「同格」となったことで、「勉強の大泉、運動の石神井」という「風評」と相俟って、言われだしたものであろう。加えて、複数の男女生徒の家出事件なども起きているが、おおよそ、一般の生徒たちには、実体のない、無縁のものであつたようである。

高校生ともなれば、異性を意識しはじめるのは、自然のことであろうが、初めは抵抗感のあつた教師たちも、「対等」となるにつれて、次第に井草のゆとりのあらわれと感じるようになったという。他校生には、井草の自由な空気に対する憧れもあつたようで、

高校生の生活は「あれをしてはいけない」「これもいかん」といった、いわゆる消極的な「しつけ」だけではいけないと私は。なんでも食欲に學習し、実践し、失敗したら反省し、再び同じ失敗をくり返さない努力をし、しだいに「制御能力」を獲得してゆく時代ではないでしょうか。親も教師も、若者の暴走をはらはらしながら、じつと見守つてやる忍耐も必要だし、大事な時に一喝してやる勇気を持ち合わせていなければ、「創造力」と「自己制御の能力」をもつた若者は育たないのではないか。

（注記）—右の「B通信」は、若林覚先生が、昭和四十二年度に、群制度一期生の父母に向けて綴った文章の抄です。）

生徒もまんざら悪くないと思い、おもしろいと感じていたらしい。

揺れる学舎

— いつたい何がそうさせたのか —



焼失前の校舎

昭和四十二年の群制度発足により入学した生徒たちは、行動力や批判力もあり、社会的関心も持っていた。「教育」が、生徒の判断力や批判力を育て、現在を越える未来を創る人間の育成と意識する教師たちは、そのような生徒たちの入学は歓迎され、喜びであった。だが一方では、教師たちは、それまでの「教師の指導によって伸びる生徒」というイメージから抜け出しきれていた。

一方、東京オリンピックの前後から高度経済成長が進み、「いざなぎ景気」が謳歌され、中流意識の芽生えとともに、微妙な保守化現象が広がっていった時代でもあった。

自覚的な部分は、高揚した意識と現実の保守化という矛盾に苦しんだのだが、こうした

状況の中で、「大学の自治」「学問の自由」に対する危機意識から、いわゆる大学紛争が起きたのである。それらはやがて、弾圧によって公然たる活動が困難になる中で、火種は高校に波及していくことになる。

昭和四十四年度は高校紛争が最も激化した年である。大阪・東京に端を発し、日とともに燃えあがり、全国に広がっていった。

高校紛争はその時代風潮、とりわけ大学紛争との関数関係において起きたものに違ひはない。しかし各高校にも、校則、施設、処分制度、定期試験、授業内容、管理教育など

ないかとも思われる所以である。

この時代はまた、社会的にも極めて緊迫し、混乱した状況にあった。

井草高校の思い出

田中一彦

私が一年のとき、制服廃止になり、自由服となつた。あの当時は別に、制服を買ったのだし、今さら私服などと思って、ことさら、自由服を着たいとも思わなかつたが、三年間私服で過ごしてこれたことにより、自由を具体的に感じてこれたようと思う。現在の高校生は制服に対しても感じていない者が多いようだが、我々はいろいろと考えさせられ、私服化の意味は大きかつたようだ。

(昭和四十七年卒業)

宍戸鈴子

私が入学した二・三年前から、制服が廃止になり、標準服があつたものの、一応、自由服となっていました。一年の頃は、皆、それらしき服装でしたが、二年になつたら、もう、ほとんど私服。Gパン姿もたくさんありました。不思議なもので、制服がないとなると、妙に学生服が着たくて、中学時代に着ていたセーラー服を着て通学していたこともあります。

今でも忘れないのは、一年の時の教室。古ぼけた木造校舎の二階の汚い教室に、E組とF組だけ。なんだか他のクラスから隔離さ

の、それぞれ事情の異なる紛争の根はあった。

次第に激しくなる進学競争の中で、鬱屈した日々を強いられている生徒たちの、人間教育を求める抗議の声でもあつたよう思う。

井草では、他校より遅れて、十二月を中心起こっている。今、何がそうさせたのかを解明することは難しい。真相は歴史の陰影の中に隠れて姿を見せてくれないからである。

推察するに、少數の社会的意識をもつ、いわゆる活動家の動きに乗せられたもので、紛争の土壤として、井草高校は元来希薄であった。井草では、全共闘的な生徒の活動がほとんどありません。（略）高校生のこの種の活動は現在流行のようになっていますが、何故井草にはないのか？これがもし生徒諸君のエネルギーが低いことが原因だとしたら、必ずしもよいことはいえません。

（四十四年七月十九日発行、PTA会報誌『井草』）

学校から父母へ向けた「井草の教育の諸問題」と題する文書の抄である。少々挑発的ともどれる内容であるが、自主的な自己開発を願う教師たちの憂いからであろうか。井草生は、将来人なみ以上の収入のあるポストを獲得できる方法についてはよく考えるが、生徒会活動は全くサエなくて、社会意識の面では、ニヒリズムの傾向が強いというのである。だが、夏休みも終わり、九月になると動き

が出はじめる。

九月二十五日、三年生のある生徒が、マイクを使用して、生徒会活動、政治活動についての緊急アピールをする。詳細は不明だが、その中で、二十七日（井草祭初日）の中庭集会を呼びかけたが、集会は許可されず中止になつたらしい。これが井草闘争（関係生徒たちはこう呼ぶ。）のきつかけとなつたという。動きは十二月に一挙に拡大している。生徒たちは六項目要求（検印制度廃止・集会届出制度廃止・定期考查見直し・評価の撤廃・制服制度廃止・文部省指導通達に対する統一見解の要求）の生徒総会での討論を求めたが、教師たちとの間で日時の調整が一致せず、議論の揉み合いの中で、十二月九日の唐突なバリケード封鎖へと発展した。

封鎖は、期末考査と冬休みを直前にしての、生徒たちの焦りからでもあつただろう。実行した生徒たちも、男女少數であり、それに対する積極的な支援も大きくはない。

また、「要求」の中には、学校規則も含まれている。だが制服を除けば、当時の規則は今日のそれよりも、さらに簡潔である。規則や制限ができるだけ少なくするのが、井草の伝統である。

だが、関係した生徒たちは語る。乱れた校風が、叫んでも、呼びかけても一向に盛りあがりを見せない生徒会活動が、受験対策ばかり

れた気分でした。でも、クラスの皆は明るくにぎやかで、楽しく過ごしました。偶然ですが、前職場に、そのクラスの同級生が二人も居て、よく三人で同窓会をしていました。今にもはずれそうな窓を開け、ネットごとに、校庭の男子生徒を見ていた女子。すきま風が冷たいから、窓側の席はじゃんけんで負けた人がする冬。翌年から、そこは教室ではなく、生徒会室が部室になつたようでした。

卒業する年の一月、体育館改築に入り、きたなく暗い体育館は姿を消し、杉並公会堂で卒業式をしたのも覚えてます。今のrippaな体育館の前身の最後の使用者でした。

現職場にも同窓生が一人居て、三人で、なつかしく井草談義をしています。そして、いつも「井草って自由だったね。」という話題になります。

（昭和四十九年卒業）

森 理 薫 子

全てにおいて自由だと思っていました。私の年代の学生は、親の生活水準がほぼ同程度（ある程度以上の家庭の人のがほとんど）でしたので、学生達は精神面でも肉体面でも、ハングリーでなかったのです。ホンワカしきて、根性、意地がないという弱点もあつたと思います。本来、服装、男女交際等、自由にしておいては問題が起きやすい年頃なのです。が、問題を起こすようなことはありませんで

りを考える学校、ガリ勉タイプのおかしさや見せかけの自由が、たまらなく嫌だったと。

今、このことで「紛争」の全てを説明することはできない。紛争の根は、やはり政治的意識に目覚め、社会的関心をもった、批判精神の旺盛な生徒たちによる、外に向かられた思いが中心であったことに違いない。だが、また「放任主義」（と彼らは言う。井草教育は決して放任ではないのだが。）に対するいくらかの反発もあったのではないか。

ともかく「封鎖」は、普段無関心で、非協力的であった一般生徒たちにも、ある種の高揚的気分をもたらしたことは事実のようである。以後幾日間かの集会や討論は、それまでになく活発であったという。同調者や同情者が多いのは、一般に、教育に対する不信や不安感があるからではないかと、当時、教師は分析し、反省している。教育のあり方・教育課程・生徒会活動などに対する学校の姿勢への不満が、大きな火をつけたのであり、紛争後が本当の争いとなると認識しているのである。

当時の教師たちは、その大体の傾向において生徒の自主性を尊重し、自身の政治的見解においても、ほぼ民主的であった。試行錯誤の連続が教育の歴史であろうか。民主的であればこそ、苦悩も一段と大きかったようである。連日の深夜まで続けられた職員会議の記

録もある。あまり思い出したくはない、當時の教師たちは言うのである。

封鎖は一日で解除され、十五日からは定期調査が実施されたが、その中で、四名の生徒が校門脇でのハンガーストライキに入っている。その後も二度、三度と封鎖の動きはある。しかし、余波は三月の卒業式まで続いている。

平成二年十一月一日、日曜日。校長室にて、紛争に関係した卒業生諸君数名に話を聞くことができた。皆、立派な社会人としての、素晴らしい顔の持ち主であった。そして、卒業以来、足を踏み入れることのなかった井草に来られて、うれしいと話してくれた。井草はいい高校だった、もう一度戻りたいとも言ってくれた。

だが、話が紛争に及ぶと、やはり翳りがあった。「辛いので」と出席を断つてきた人もいる。教師同様、重い過去を、現在も引きずつて生きているように感じられた。それほど大きく揺れ動いた学舎であつたことを思う。

した。もちろん、これには先生と生徒の信頼関係が成り立たなければならなかつたと思います。先生との関係は、師弟の他に、先生を人生の良き先輩として接していました。だから今でも、井草高校時代の友人とのつき合いはもちろん、先生達とのおつき合いが続いていると思っています。

問題のない井草の自由は、先生と学生の良好関係から成り立っていたと感じています。（昭和四十九年卒業）

入部美樹

ずいぶん昔のことなので、細かい記憶はありませんが、高校生活がそれ程窮屈でなかつたことは確かですね。細かい校則を気にしたこともありませんし（あつたのかしら、校則）、生徒会も自由な空氣でしたし、クラスにも様々なタイプの人間（良い意味でも、悪い意味でも）がいて、適当に刺激を受け、言いたいことを言って、先生からも押さえつけられるというよりは、対等に話が出来る空氣だったように思います。（昔のことなので、多少美化しているかもしませんね。）

（昭和五十一年卒業）

大杉朋子

規則、内申書に縛られていた中学時代を終え、重い制服を脱ぐと、そこに春が来ていました。



校舎火事（43年10月）

紛争解決に中心的に当たった教師たちも、これは政治問題や治安問題ではなく、高校に内在化している教育問題であると、考えていたという。大きな救いである。

盛んなる活動

—世界の前に我れらあり—

昭和四十三年十月の出火によって一部焼失した校舎が、四十一年度の工事で新しく建て替えられたが、紛争はちょうどその改築工事の最中にあった。校舎が落成するとともに、揺れた学舎も、次第に落ち着きを取り戻していったのである。

それにもしても、群制度一期生たちが、「紛争」によってまで提起した問題は、井草の中にも何らかの進展を見出すことになったのであろうか。生徒と教師の意識の乖離は、その後も完全には埋められることなく、以後、急速に生徒たちを襲う、いわゆる「三無主義」によって、問題はついに発展の余地を失ってしまったように思われる所以である。

けれども、紛争によっていくつかの制度的なものは変化している。その大きなものは、制服の廃止であろう。四十五年度から自由服が認められることとなつた。また、これも紛争時の要求であったが、検印制度の廃止も、

四十五年十一月の職員会議で決定されている。多少の議論はあつたが、生徒会の自主管理に委ねる形で認められている。生徒を信頼しようという方向からであった。

それでも生徒の無関心層は広がり、その自治意識の低下は進んでいる。生徒会活動は、役員の立候補も少なくなり、さらに渾濁（まよ）み、時にその批判と喚起と反省が加えられるものの、教師たちの嘆きの種となっていたようである。

しかし、その中で、専ら個人の趣味と益実の方面向けられたものではあるが、生徒の活動はエネルギーであった。

この時代は、クラブ活動が一種の高揚期にあつた。なかでも、今日から見て特筆すべきことは、文化部の活動が盛んであったことである。例えば、井草祭での発表は部が主体であった。日常の活動が発表の基礎になつていたのである。

また、体育祭の運営なども、実質的に生徒の手によって行われている。技術的な問題は、教師が少数の指導的な生徒にノウハウを伝授

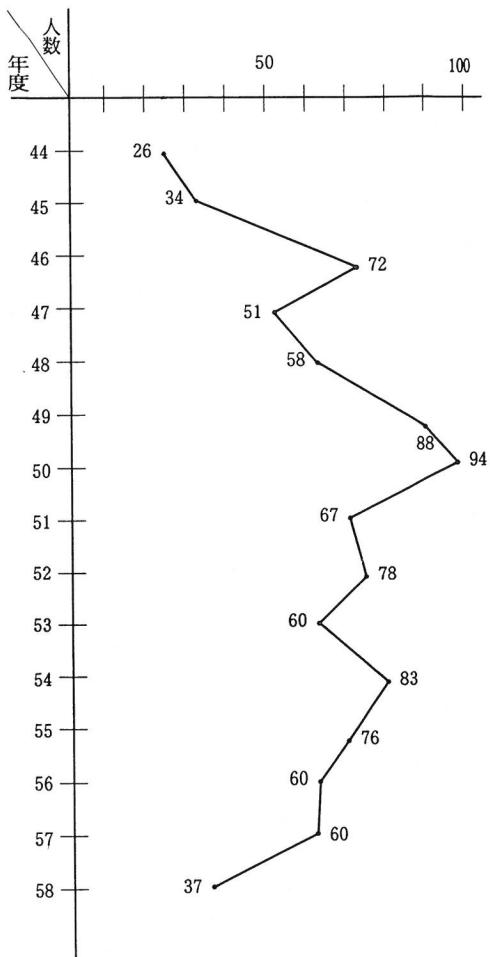


展示会風景（書道部）

した。放任とはちがう井草の自由の息吹が八重桜とともに私たちを迎えてくれました。大学受験という重圧はありましたが、今、わが井草時代を回想すると楽しかったことしか思い出せません。その中でもとりわけ愉快なエピソードがあります。

ある日、担任のN先生が授業の時間になつてもなかなかいらしゃらないので、みんなで戸につつかえ棒をして教室に入れないようにしたのです。やがて先生がお見えになり、戸が開かないとわかるやいなや、先生は（おそらくロッカーによじのぼられ）廊下側の上の窓から教室の中に、ひらりと飛びおりてこられたのです。そこに、黒板消しやら消しゴムやらを投げつける不届き者もいたのですが、一切おとがめなし。N先生は華麗に着地すると、何事もなかつたかのように授業を始めたのでした。

あの頃は三無主義とかしらけ世代といわれていた時代でしたが、私にとっての井草は明るく躍動しているように思えました。中学時代までの上からの強要から自分たちで歩きはじめた第一歩。何よりもうれしかったのは、それを見守る先生方の目がとても暖かかったことです。そんな井草が今でも続いていることを願っています。（昭和五十一年卒業）



すれば、事足りる場合も少なくなかった。

これらの陰に、卒業生の指導の大きさがあることも見逃せない。卒業生が後輩を指導するという伝統が、井草の自主活動を支えてきたのである。ただ、これらの活動が、群制度の末期ごろになると、次第に衰える傾向となつたことは残念なことである。

さらに、大学進学率も大きく向上している。群制度一期生は、もともと力を有しながら、紛争の後遺症で伸び悩んだが、その後は漸次向上している。五十年代を頂点とし、総じてよい結果を残している。「世界の前に我らあり」と飛翔する大きな素地となつていよう。ただしそれは、日本の経済大国化が進むにつれての、進学競争の激化が生み出したものともいえる。その中で「三十四群」の生徒たちは、否応なく有名大学を志向せざるを得なかつたのであり、学校現場にもさまざまな矛

盾を生み出したのである。学校現場に要求するものが、保護者・生徒とも、次第に変化していったのである。

四十年代末から五十年代には、受験競争は一層激化して、井草生たちから、自主活動やクラブ活動への参加と意欲を、少しずつ、しかし、確実に奪つていった。そして、教師たちも、教育産業の繁栄、保護者の意識の変化などの圧力の下に、進学指導を強化していく。そうした状況の中で、教師たちに「管理を否定する姿勢」が明確化してきている。もともと井草には、一貫して管理を否定する精神があったが、管理主義教育が公然化してきたことへの、井草の伝統に立った批判である。たとえ教師が無意識に管理の姿勢を見せることがあっても、それは決して定着することはなかった。その姿勢は、井草の中に現在も生き続けているのである。

宇田川朋子
勉強の大泉、スポーツの石神井、恋愛まではお祭りの井草と言われていた私たちの高校時代。最初は抵抗があつたものの入学してしまえば率先して体育祭係会に籍をおいていた私でした。

私が都立高生のたぐましさ、エネルギーを最初に感じたのは、修学旅行を廃止しようという話が先生方からでたときです。「授業中は静かに」「先生の話をよく聞いて」と、義務教育九年間たたきこまれて数カ月後、「これではいけない」と学年全体が立ちあがり先生と話し合いを続け、結局修学旅行に行けることとなりました。代表者たちはクラスをまわり演説をします。自分たちが積極的に学生生活を作りだしている実感がありました。

学園祭もあくまでも先生は補佐。不満があれば先生とぶつかりあい話合っていました。「班長会議廃止」「教室掃除ボイコット」（この時の教室のはこりはすさまじかった！）授業をぬけだし「ノア」に行く者、雀荘に消える者。なにもかもがなつかしい。

我がクラスでは昨年一人が他界し、級友の絆はますます強くなりました。桜の季節になると井草の美しい校歌を想い出します。

（昭和五十四年卒業）

展示会風景
(囲碁部)



明日に向かっての歩み

— グループ制の時代 —

一九八二年（昭和五十七年）、一九六七年から十五年続いた群制度が解体され、グループ制に移行した。これに伴って、井草高校も三四群（大泉・井草・石神井）から、三二グループ（先の三校に、光ヶ丘・大泉学園・大泉北・田柄・練馬が加わる）に所属することになる。と同時に、これまでのよう三四群に合格した生徒達は希望のいかんを問わず、

三校のいずれかに振り分けられるということがなくなり、井草を第一希望とする生徒のみが入学してくるようになった。それによって、「他の高校を希望していたのに、井草に回された」という不満を持つ生徒達がいなくなる一方、「同じような意識・学力を持つ子ども達」の集団が生み出された。

一九六〇年代から始まつた社会変革の昂まりは、現実の壁の前に挫折し、一九七〇年代後半から八〇年代にかけては、「三無主義」（無気力・無関心・無感動）と呼ばれるような社会風潮が広がつていった。こうした社会

の流れと呼応するように、学園紛争の終焉後、生徒達の自治への関心は次第に薄れ始め、生徒会活動なども停滞し始める。

井草の自主・自由・自治

— その考察と検証 —

「井草の自由」とは一体何だろう、と最近よく思います。現在の一・二年の中にはこれを聞いて井草に来た人も多いだろうし、当然新一年も例にもれず、でしょう。

ただ僕は「井草の自由とは、自分の好き勝手にできる」という自由ではなく、自分達で何でもやろう、という「自由」だと思ふのです。つまり、世間一般でいう自由ではなく、先生に管理されがちな学校の自由を、生徒自らの手で運営し、守つてゆき、先生はその監督にとどめる、というものであります。（一九八三年『井草』巻頭言）

私にとっての

井草の「自由」とは

熊谷 まさき

自由なくせに何もできないのが高校生だった。

たとえば、恋愛。今だってうまくできるわけではないが、あの頃より随分自由になつていると思う。自由になるまで、みつともないことばかり重ねてきた。

小学生の時、堀の中から聞こえてくる井草祭の熱気に憧れていた。きっとみんな大人なんだろうなと思った。中学生の時はズルズル重たい標準服がだいっきらいで、好きな服を着ていける高校がいいなと思っていた。大人の恋愛もありそうだったし。

堀の中に入れ、好きな服が着れて、私は幸せだった。私は井草が好きだった。でも、私



学校における伝統とは何を指すのだろう。それは行事の単なる名目や形式ではなく、その中に息づく心意気である。全校の日常生活の雰囲気である。とすれば、今の井草に「自主・自由の伝統」など無いのではないいか。なぜなら井草の伝統の自主・自由は、眞の自主・自由であったはずだからだ。そして昨年度の卒業生の答辞にあった様に「眞の自由とは、自分の義務と責任を果たして初めて主張できるもの」なのだ。

(一九八四年『井草新報』論説)



生徒総会

井草の「自由」とは、常にその中身を生徒自身が問い合わせていくことによって受け継がれてきたように思われる。井草の「自主」、「自治」の精神、また然りである。自らの意識の変革と学校の変革が同一平面のものとして捉えられた時は過ぎ去り、自治への関心が次第に薄れていく傾向の中でも、常に井草の自治を問い、生徒会活動の現状を憂え、そのるべき姿を訴える声は続いてきたし、そこで語られている問題もまた、くり返し俎上にのぼっては吟味されてきた。「自由」なるものに決まった形などはない。それは、大きな空虚のようなものであり、中身はその中にいる者が不斷に問い合わせ、創り続けてゆくしかない。一方、教職員は井草の「自主」・「自由」・「自治」をどのように捉え、生徒達に語つてきたのだろうか。

「踏みゆく自主の道、協同われら楽し」これは校歌の一節です。

個人の自由とか自主性と、集団の協力とか規律の関係は、いつの時代でも難しい問題があります。ともすれば、自由という名の勝手と、規律という名の抑圧に流されやすいからです。(略)高校生にとって、学校生活は、さまざまな試行錯誤を繰り返して個人と集団の関係を経験的に解明する場だ

井草の「自由」とは、常にその中身を生徒自身が問い合わせていくことによって受け継がれてきたように思われる。井草の「自主」、「自治」の精神、また然りである。自らの意識の変革と学校の変革が同一平面のものとして捉えられた時は過ぎ去り、自治への関心が次第に薄れていく傾向の中でも、常に井草の自治を問い合わせ、生徒会活動の現状を憂え、そのるべき姿を訴える声は続いてきたし、そこで語られている問題もまた、くり返し俎上にのぼっては吟味されてきた。「自由」なるものに決まった形などはない。それは、大きな空虚のようなものであり、中身はその中にいる者が不斷に問い合わせ、創り続けてゆくしかない。一方、教職員は井草の「自主」・「自由」・「自治」をどのように捉え、生徒達に語つてきたのだろうか。

「踏みゆく自主の道、協同われら楽し」これは校歌の一節です。

個人の自由とか自主性と、集団の協力とか規律の関係は、いつの時代でも難しい問題があります。ともすれば、自由という名の勝手と、規律という名の抑圧に流されやすいからです。(略)高校生にとって、学校生活は、さまざまな試行錯誤を繰り返して個人と集団の関係を経験的に解明する場だ

は大人じゃなかつたし、大人の恋愛もなかつた。やっぱり、みつともないことで悩んでいた。高校生の恋愛じや、好きな男と暮らすこともできない。私は劇作家になりたかったが高校生の力じや、自分の才能を世間に認めてもらうこともできない。

何かをしたい、自分のなりたい姿になりたい。校則あるいは、社会的規則など、それを邪魔するものがなかつたとしてもすぐできるもんじやない。力がなかつたら駄目だ、馬鹿だつたら駄目だ。ガキじや駄目だ。だから、自由は当たり前のこととしてあるべきだ。自由があるても大変なんだから、なかつたら目もあてられない。

堀の外で波風があつても、好きな服を着て、幸せでありたい。自由な大人というのは、日本では遠い道のりだが、せめて、高校を振り返つて、あの頃の馬鹿さ加減からすれば、今の方がましになつたと言えるようでありたい。そして、馬鹿なガキに、力をつけるための準備期間を与えてくれた井草高校には、心からの感謝をしよう。

(昭和六十年卒業)

森 陽子

私が“自由の井草”を本当に意識したのは実は井草を卒業してから後のことであった。教師は我々を放つておいてくれたが、そこで我々は好き勝手に楽しんできた。この様に

と思います。幸か、不幸か、「井草の自由」といわれるほどの柔構造の場ですから、充分に生かす努力をしてほしいものです。

若林 覚先生

自主的な活動のエネルギーが、少し足りないのではないかだろうか。たとえば、生徒会役員の立候補者がなかなか出なかつたり。井草祭でも伝統に頼りきっているようなどころもあると思う。自主的な面では上に位置する学校だと思うので、そういう点でもつと力をつけてほしい。

谷 栄一先生

井草高校に在つて、私が気に入っていること、それはこの学校には自由があるということです。しかし、最近その自由が本物でなくなりつつあるという不安感を抱くのは私だけではないと思います。(略)

自由の中には、自主性が育ち、発展があります。自ら学ぶ心が養われ、発見があり、創造があります。真に自由な井草高建設のため、若いエネルギーを注いで欲しいと願います。

石部武子先生

井草生に対して望むことは、同時に、私が私自身に望むこともあります。一口に言うなら、己れ自身を知り、自ら欲する所従つて、各自の道を歩ませたし、ということです。己れ自身を知るとは、自分がい

かなる人間であり、何を自己の人生に望んでいるのかを知ることであり、自ら欲する所とは、生きがい、ということになりますよう。(略)

自らに誠実にそれぞれの道を進んで行って下さい。その歩みの中で、各自が己れの存在を輝かせ、かつ、他の命を生かすことができたら、と念願しています。

春日盛男先生

(一九八三年『井草』井草教師の意見集
「今後の井草高及び井草生に望むこと」)

井草の教職員がいつの時代でも一貫して持ち続けてきたのは、「反管理」の思想であつたと思う。「他の何ものにも束縛されず、自らの意志と判断でものごとを選択していく」という自由な環境を作り出すためには、無用な管理をしないことが、何よりも大切だつたからである。既に決められている形を生徒に押しつけて、それに従わせるのを良しとする発想からは、自由など生まれるべくもない。生徒自らが主体的に判断し、選び、行動できる土壤を作り上げると共に、常に彼らに問い合わせ、語り続ける。——それが井草の自由であり、井草の教育の生命でもあった。一人の卒業生が在校生達に、次のようなエピソードを語るのを聞く機会があつた。

「入学してすぐ、オリエンテーションがあ

明るくのびのびと自由に過ごせたのは信頼されていましたからであろうが、それも代々の先輩がそれに応えてきたという歴史があり、さらには我々がそれを引き継いでゆけるであろうという期待をかけられていたからだと思うのだ。そして、そもそもこの自由は、ある時代に先輩が自治の権利を勝ちとった結果によるものだ。だから我々は、何でもやりたい放題だからこそ、日常生活から行事に至るまで、自分たちで井草をつくれたのだし、つくれてゆかねばならなかつた。これが本当の自由の井草の伝統なのだと、今さらながらに思うのである。

抑圧されることのない幸福な井草生は、逆に自由の有難さを知らない。今、皆で意識して井草の自由を考え、守り、育ててゆかねばならない時期にあるのではないだろうか。

(昭和六十一年卒業)

松元敦子

私は井草高校を卒業して今年で五年めに入ります。高校時代は勉強もせずに、クラブや応援団などに一生懸命になり、テストはいつも一夜漬けという有り様でした。悪いこともドドももちろんやりました。古文の某先生が年齢をさば読んでいらっしゃるのをぼろつと指摘してしまい、前に呼び出され、問題を解かされたことや、生活委員の腕章を利用して、

り、先生に引率されて教室などを確認しながら、全校を見学して回ったんだよね。廊下を歩きながら、ふと目を上げると、中庭を隔てた三年生の教室の窓ぎわの席から僕たち一年生を見て、手を振っている女の人があるんだな。『井草にようこと』といった感じの、すごく素敵なお顔で、その大人っぽさも含めて、ドキドキしてしまった。でも、多分、その時は授業時間以外の何ものでもなかつたんだけどねえ——。

もう一つのエピソード。自習時間のことだったなあ。近くのロッテリアとかマクドナルドで、『何とかシェイク』というのを百円かなんかで安く売っている時があるじゃない? クラスの何人かがジャンケンをして、負けた者が代表して、それを買いに行こうということに決まった。運悪く、僕がジャンケンに負け、ついで、買い物に行くはめになつたんだけど、入学して少ししか経っていないし、もし先生に見つかってしたらどうしようかと、内心びくびくしていたんだ。見つからないように、急いで門を出ようとした時、丁度外から入ってこられる先生とバッタリ出会ってしまった。

『上履きだけは履きかえて行きたまえ』と言つて、校舎の方へ行ってしまったんだ。その時、僕は『井草に来て、本当に良かった。この学校なら、僕はのびのびと呼吸をしながら生活することができる』と思った。井草での、その二つの出来事は忘れられないんだ。そして、その時感じた思いは三年間裏切られなかつたなあ——。

在校生達を前に自分にとっての井草を、ユーモアを交えながら語る卒業生の顔を見ながら、この井草に横溢する明るく、のびやかな空気が、いかに生徒一人一人の心を解き放ち、人間はあるがままに生きていっていいのだよと、無言のうちに語り続けていることかと、改めて井草を見直すような思いがした。生徒一人一人の個性を尊重し、彼らを判断力を持った一人の大として扱おうとする教育姿勢が強く印象に残つた出来事であつた。

生徒総会をぬけ出し、日なたぼっこをしたことで、朝大寝ぼうをしてしまい、中途半端な時間に行くのがいやで、上石神井の喫茶店でホットケーキを食べて、四限目から授業に出たことなど、すべて今だから言えることですが、私にとってはどれもこれもいい思い出です。私の通つている大学は個人をとても大切にすら押ししきられることは決してない学校です。そんな中で私は最近やっと自分らしく生きるということが、すこしづつできるようになりました。そして今考えてみるとそのステップとなつたのが、井草高校の自由であったと思ひます。特に三年生で美大進学を目指し、予備校に通つていた時に、実力の伸び悩みをぐちる私に、先生が言われた「自分で選んだ道なんですよ」という言葉に、何も言えなくなつて泣いたことは一生忘れられません。くじけそうになるとその言葉が今も頭の中で聞こえます。そしてまた次へと進めるのです。

(昭和六十二年卒業)

羽場由紀子

井草高校に入學願書を提出した日、「絶対に合格して、この高校に通いたい!」と、心から思つた。みんながとても明るく、楽しそうだった。『のびのびしている』様子が、一目で感じられた。



井草祭（体育祭）

「自由」と責任

—主体的に学ぶとは—

以下は島森元校長の文章（抄）である。
「自由な学校—井草」は、ともすれば
「だらしない学校—井草」となりがちであ
る。

本校に着任した年に、生徒諸君と保護者
の方々に次のような文章（PTA会報・No.
48）で私の気持ちを訴えた。

「……自由という文字を目にすると私は
まず『こわい状況』を想像する。
たとえば、冬の雪深い山中で、一人道に
迷ったとする。前に進むべきか、後ろに退
くべきか、右か左か全然見当もつかぬ。道
を訊くべき先達もいなければ、道しるべも
ない。あるのは自分ひとりだけ。この自分
一人の判断に基づいて行動せねばならぬ。
その結果、うまくいって助かるかも知れぬ
し、ますます道に迷って死ぬかも知れぬ。
そこで自分のありつけの知恵をしぼり、
文字通り自分の命を賭けて判断を下し、行
動を起こす。助かるかもしれない。死ぬかも
しれぬ。このような状況が『自由』とよば
れているものではないか。（略）自分の周
辺のあらゆる人々を全部除き去って、自分

ひとりっきりで判断し、その判断に自分全
体を任せ、その結果については全責任を負
わねばならぬ状況を『自由』という……」
このような文章を掲載した私の気持ちは、
次のようなものであった。

① 井草の生徒が『自由な状況』を『カッ
コよく、派手に、思うままに振舞える場』
と考えて、日夜あくせくして動き回り、最
後には疲れ果てて、『井草には自由がない』
と嘆く事を危惧した。

② 生徒の『自主精神を尊重』しようと
する教師集団の努力を生かしていくために
も、自由を支えるものは、『自分一人で判
断し、その判断に自分全体を任せ、その結
果について全責任を負おう』という自主的
な精神であることを、生徒諸君に理解して
もらいたかった。

『主体的に学ぶとは』

自由、自主的な精神というものは、学習
面で生かされなくては意味がないと考えた。
そのためには、生徒がしっかりした目的意
識をもつて『主体的に学んで』もらいたか
った。その考えが、次のような昭和五十九年
度三学期の始業式（昭60・1・8）の言葉
となつた。

諸君が高校時代を楽しい充実した三年間
にしようとするならば、他から強制されて
学校に通うのではなく、自らの中にある強

そんな風に夢見て、憧れて入学したが、実
際に生活をしてみて、初めはとても戸惑った。
校則がほとんど無く、制服さえも無いのだ。
そんな中で私は、自分で考えて行動すること
を覚えた。しなければいけないこと、しては
いけないことを先生に教えられるのではなく、
自分で見つけていった。このことは、とても
遠回りをすることだが、本当に自分に身につ
いたと思う。

また、束縛の無い世界で、自分の個性を発
揮できることの素晴らしさを感じた。クラブ
活動や井草祭で思いっきり私達のスタイルを
主張した。みんなが一生懸命になれた。
しかし、唯一欠点があった。集会の態度だ
けは決して良いとは言えなかった。自分を主
張することは大切なことだが、他人の声に耳
を傾けることは、さらに大切なことだと思つ。
これから生きてゆく中で、井草時代に得ら
れた自由な経験を生かし、他人を受け入れな
がら、かつ、本当の自分を主張できるような
おおらかな心をいつも持つていられるような
人間になりたいと思う。（昭和六十二年卒業）

中村 真美子

私が、初めて井草高校を見たのは、受験申
込みをした時だった。門を入り、目に入つ
きたものは、校舎に貼られた『井草祭廃止阻
止』のスローガンだった。（当時、新館の工

い目的意識に導かれて学ぶことが必要である。

本校の特色・伝統といわれている自由の精神、自主的な精神とは、そのことをいつてしているのである。親から教師から尻をたたかれて机に向かうのではなく、誰からも拘束されずに『私はこうしなければならない』という自らの内なる声に導かれて学ぶ姿勢こそ、自由の精神の発露というべきであろう。この自主的な心、主体的な姿勢がなければ、どんなに立派な学校に通っても意味がない。

新しい校舎・グラウンドも完成された。この校舎に真の意味を与えるのは、諸君の『主体的に学ぶ』という態度即ち自らの内なる目的意識に導かれて学ぶことである。諸君が一日も早くその目的意識（自分がどのような職業を身につけて一人前の人になるのか）を確立することを望む。

（「井草高校の生徒に望んだこと」
元校長 岩森 敏先生 昭和五九年（六二）
年在職）

「自由」は、しばしば「無責任・怠惰・放縦」といったものを生み出す。ここ何年か、井草にも、そういったことへの危惧の声が高まっている。生徒の現状をみると、「自由は与えられたものでしかなく」、「その責任を、

自由を楽しんでいる当人たちが負わない」（ある卒業生の言葉）という面が強く現れているからである。学校で決められた規則に従って行動し、それを良しとされていた中学校の生活から、いきなり規則や束縛のほとんどない井草での高校生活が始まる。生徒達は初め、不安や戸惑いを覚えながらも、次第にそうした生活に、良い意味でも悪い意味でも、慣れていく。問題は、その過程で、「自由」とは、「何もしなければ、何も起きないし、何もしないままに終わってしまう」ある意味では、「非常に冷たく、厳しく、恐い状況」であり、そうした状況の中で頼りにできるものは、「自らの意志と判断と行動力」だけなのだということを、彼らがどれだけ深く認識するかにある。それはまた、教師たちが日々の教育活動の中で、こうした認識を彼らの中にどのように植えつけ、育てていくかという点にかかるまいよう。ここでは、「自由」について、自分なりに考察した一人の生徒の文章を挙げておきたい。

私は、井草に入学して良かったと思います。初めは、確かに不安でした。何もかもが決められていた中学生生活だったのに、そんな中学生が集まっているのに、本当に自由にして学校として大丈夫なのだろうか？と。でも、自由だからこそ、自分の行動に対して、責任を持たなければならないのだ

事をしていたので、その関係だと思う。私は、「この学校は大学みたいだ」とびっくりした。

井草の自由とは、いい意味で生徒を信頼して、先生方が私達の自主性を尊重していく所にあるように思える。その先生方の期待に私達が応えていたかは疑問であるが、三年間、本当にのびのびとさせてもらったようと思う。

けれども、自由というのは、違った角度から見るとかなりきついものである。自分の行動には、責任を持たなければならないし、自分が動かなければならない。校則の厳しい学校ならば、先生の指示に従っていれば失敗しても、先生に責任を転嫁できるが、井草の場合、それができない。生徒にとって、どちらがいいのかわからないが、私には、貴重な時だったようだ。

急げていても、怒られることがないので、癖となって身についてしまった。これも、私の責任なのだから仕方がないが……。

（昭和六十一年卒業）

「自由の井草」というイメージを抱いて、井草高校に入学した私の高校生活は、部活動を中心とした「規律のある自由」だったような気がします。

大澤由美子

から、私達にとって、それが一番いいことなんですね。

今、この自由をもう一度、考えなおすべきだと思います。今まで管理されてきたのに、井草に入学したとたんに、ある意味での管理をされなくなる。「それは、私達にとってどのようなものだろうか。そして、それは私達にとって、どのような意義があるのだろうか。私達は、どうしなければならないのか」などと考えることは、井草生としてだけでなく、人間として大切なことだと思います。人間としての大切なことを

「井草の自由」は毎日の生活の中で教えてくれているような気がします。（略）この井草で過ごせることを誇りに思いたいのです。そして、井草生として恥ずかしくない生活をしたいと思います。今、それから、卒業してからも「井草高校卒業です。」と胸を張って言えるように。

受験戦争の激化と

高校教育の変質

井草高校の教育の特徴は、一種の「教養主義」とも呼ぶべき点にあった。

高等学校は上級学校進学のための予備校ではない、青年に必要な知識と教養を身につけ

る場であるという認識が、教員間で数多く繰り返された論議の結果であった。

将来「文系」に進む生徒も数学や理科の基本的な知識が必要であり、「理系」に進む生徒にも社会や国語の教養は大切であるという考えが、時間割の上にも現れていた。

また、いわゆる「学校紛争」以後、「模擬テスト」が「実力テスト」に衣替えしたように、受験に偏りがちな教育を、生徒の意向をくんで修正している場合もある。

ところが経済の高度成長は、日本の社会や国民の考え方を根本から変えてしまった。「モノがたくさんあるのは、いいこと」であり、「人より一歩上に立つこと」が「望ましいこと」になった。

日本には、官学（国立学校）を出て高級官僚になるのが「出世」の一つの道だという考え方を筆頭に、広い意味での「学歴主義」が古くからあった。

その傾向は、高度経済成長以後、いつそう強まった。そして進学率の急上昇とともに、いわゆる「受験産業」も急成長し、進学競争に拍車をかける結果となつた。東京都では中学校の九割以上が外部テストを受験し、その偏差値に依存する傾向も見られた。

児童・生徒の保護者が「いい学校とは進学率の高い学校のこと」と思うようになったのは、ほとんど必然といってよいだろう。

（昭和六十三年卒業）

私の入ったバレー・ボーラー部は、ほとんど毎日厳しい練習があり、遊ぶ時間などはなかなかとれませんでした。日曜日も練習試合があつたり、もし何もしなかったとしても、月曜日から土曜日までの疲れをとる日となってしまふことが多いのです。勿論、日々は友達と映画を見に行ったりすることもありましたが、私の日常はとにかく部活動を中心でした。何度もやめようと思つてきましたが、やはり、大好きなバレー・ボーラーはやめられませんでした。「自由の井草」で、もっと普通の高校生にはできないようなことをやればよかったです。私がとつて一番やりたかったことは部活動だったのです。

「自由」といっても、何か特別なことができるとか、また何でもやって良いというわけではないと思います。ですから生徒の中にはともすれば、何もしなくていいや、何かするかしないかは「自由」だ、と考える人がいるのかもしれません。しかし、「井草」は、何か新しいことをしよう、まず行動してみよう、という雰囲気を作り出そうと努力しています。私の在学中も、そしてたぶん今も、そういう雰囲気が出来ているとは言い切れませんが、生徒全員で、そんな活気のある「井草」にしていけたら、今よりもっとすばらしい思い出を作ることができます。

最も身軽にこの保護者の要望に応えることができたのは、文部省の規制の比較的弱い私立学校であったが、都立高校もそれぞれの形で受験競争に参加していった。

教養主義を標榜していた井草高校にも、この嵐は襲った。

教員間に多くの論議を呼びながら、昭和六十年ごろには、進路指導部の校内での比重が変化し、実力テストは実質的に模擬テスト化した。（受験科目のコース化、外部テストの導入など）生徒指導は受験に多くの時間をさくようになった。

受験競争が家庭の生活に暗い影を落とし、



中庭のバレーボール風景

生徒の心を歪めた事例は少なくない。学校も

また正常な経営、生徒の個性を尊重した自由な教育を阻害している。

「受験校」としての評価が定着しつつある井草高校が、人間性尊重の伝統を失わず、一方「受験に耐えうる学力をつけてほしい」という要求にどう応えるか、今後の重い課題である。

井草の未来のために

—井草を渡る自由の風—

「豊かで自由」ということが声高に叫ばれる現在の社会の中で、逆に、青年達は、人生の目的を見失い、精神的な自由さをなくしてしまっているように見える。氾濫する情報に操られ、常に周りの状況や流れを窺い、それに乗り遅れまいとあくせく生活している。「経済的豊かさ」の獲得があたかも至上の価値のように言われ、学歴の獲得はそれを手に入れるための欠かせないステップとして意識されている。「価値観の多様化」などと言うが、それも自己の思想から多様な価値観が生み出されていわけではない。あらかじめ、商業主義的に用意され、与えられる断片的な価値の選択肢が増えたというだけのことである。それを青年達は情報（流行）によって選ばれている

私が井草高校を卒業してから、すでに三年が経ちます。クラブ活動や井草祭などの学校行事、友達のことや、授業中のこと、——次から次へと懐かしい思い出があふれてきますが、その中で、私にとって「井草の自由」とは、一体、どんな意味を持っていたのでしょうか。

「井草の自由」について「自由と責任は車の両輪である。」ということを、高校在学中に何度も耳にしました。常にこのことばかり頭の片隅にあったのでしようが、私が高校在学中に「井草の自由」をどう捉えていたのかというと、「服装をはじめとして、日常生活の中での制約がない」・「学校行事など、学生の生活は、学生自身の自覚と責任に任せること」ということでした。井草高校のように、ここまで「自由」を生徒に任せている学校はそうありません。私は、この恵まれた校風と周囲の人々のおかげで、高校三年間をのびのび過ごすことができたのだと思います。今では、そのことに感謝とともに、当時「自由」という言葉に慣れきってしまった自分を反省する時があります。そして、「自由であるがゆえの責任」に、もっと目を向けるべきであったと思うのです。

（昭和六十三年卒業）

にすぎない。

そうした社会状況の中で、大人として成熟することを拒否し、自分の将来の選択を先送りにしていく若者達も現れ始めた。彼らの多くは人生の目的を見失い、自らが進んで何かを選択しようとはせず、ただ成り行きにまかせて、受動的に毎日を生きている。「主観的には無関心、無気力、無感動、そして生きがない目標。進路の喪失が自覚されるのみで、焦燥苦悶、抑うつ、後悔などの症状」ではなく、その行動は「退却」「逃避」という表現がぴったりし、「攻撃性と精力性の欠如」(『アパシー・シンドローム』)という共通の特徴を持つ若者達が、年齢層を広げながら増加している。さらに管理教育や体罰などの問題も含め、今、教育の問題は社会の高い関心を集めている。受験競争の激化という社会情勢、あるいはまた、「日の丸・君が代の義務付け」などの大きな問題に直面しながら、井草もまた幾多の選択を迫られているのである。

しかし、いかなる時代・状況にあっても、「何事も自分で考え、常に『どう行動したらよいか』を判断し、責任をもって行動できる人間」、「自分で自分を律し、高めていくことができる人間」を育てる場として、現在の井草は本当にふさわしいのだろうかという問いは常に続けられてきたし、これから先もずっと消えることがないだろう。自由な教育の場は、異なった一個人の人格を持った生徒一人一人、教職員一人一人が、お互いの「ものの見方や考え方・価値観」といったものをぶつけ合ひ、それを止揚し、行動することを通して、それぞれが「学び、成長していく」に足る中身を不斷に創り出していくところにしか、その価値が存在しないからである。

——「高校生という時は、一人一人の夢を成就するための準備期間だと思います。でも、それらを成就するためには、人が何を言おうとも、人が何をしようとも、自分が一度決めたことをやりとおせる力が必要なのです。井草は、そんな力を養うには、持つて來いの場所なのです。結局、井草は、『未来の自由のための』学校なのです。」——或る卒業生の言葉である。井草の『現在』は、本当にこの言葉にふさわしい内容を持ち得ているだろうか。

昨年から今年にかけての私達、生徒会役員の活動は、全校生徒に好感を持ってもらえたよう生徒会を作ろうという所から始まりました。まずそれには、明るく親しみやすい生徒会のイメージを作り上げなければいけないということになりました。全校生徒との日常の「触れ合い」がなければ、生徒会もただ単なる個人活動の団体にしかすぎなくなってしまいます。私達役員はそのため、昼休みにバレーボールやバドミ

立部 真美子

「私にとっての井草」——改めて考えると、照れてしまいますが、これまでの学生生活を振り返ってみても、一番の思い出の場所と言えます。社会に出た今でも、井草の環境の中で作った仲間が忘れられないからです。

「井草の環境」といえば、真っ先に出るのが「自由」だと思います。私は一度、入学前に父とこのことについて話したことがありまます。自由とは、決して野放しということではありません。自分自身の行動に責任を持てなければ、自由を主張する資格など無いと思います。十五～十八歳という興味本位な若者達に自由を与える学校側にも相当の勇気が必要だと思います。

ひとつ残念なのは、最近衰えてはきましたが、体育祭の応援団の件など、必ずその時期になると多少圧力が加わることです。自由を与えるなら、目先のことに惑わされず、もう少し私達を信用して欲しい。

しかし、それ以上に、私を含めて井草に通ったことを誇りに思っている卒業生が大勢いることを現役の皆さんに知って欲しい。もっともつと自由を主張できる強い精神を培つて欲しい。——とは言つたものの、入学前父と話したことを頭の片隅に置きながら、あの頃の私も自由を少し履き違えて生活していたの

ントンの貸し出しを行ったり、総務会のことをもっと深く知つてもらおうと月に一回、

総務会の新聞を発行したり、その他、思ひ

つく色々なことをやってきました。そうした

活動を一年続けて、今やっと生徒会という

ものが、井草の生徒にとって身近なものと

なり、関心を持たれるようになり始めまし

た。身体の不自由な人に車椅子を贈ろうと、

最近始めたリングトップ・使用済テレフォンカードの収集も自分から進んで集めてく

れる人がたくさんいて、感激しています。

そして何よりも、「学校をどうしようか」

ということについて、生徒が自分自身で考

えるようになってきたと思います。井草高

校は「自由な学校」とよく言われますが、

今までの井草高校の状態は、本当の意味で

の自由というのとは少し違っているように思えます。本当の意味での自由とは、やはり自分達でのんびり行動することを

することから始まるのではないかでしょうか。

今現在では、自習時間の態度、休み時間の外出、委員会などの出席が、生徒の自覚が足りないために不十分ですが、その反面、自分達で同好会を作りたいといつて積極的に活動している人がいたり、生徒総会をもうと実のあるものに変えようとする意識も強くなっています。これらを含めて、少しずつ井草の生徒が本当の意味での自由を

つかみかけているのではないかと思います。
ほんの少しづつ、少しづつですが……。私達はこれからも、生徒一人一人が自分たちの自由について考えていくために、様々な、ちょっととしたきつかけを作り続けていこうと思っています。そして、それらを基に、井草が今までよりもっとすばらしい学校になつてくれれば……と願っているのです。

——一九九一年度前期 生徒会役員会——

右の文章が、前述した問い合わせに対する十分な解答になつてゐるとは勿論言えない。まだまだ足りない面も多く、読みながら、生徒会役員と他の生徒達の関係・意識の変化に隔世の感を覚えた方もいるであろう。

しかし、ただ一点だけ、はつきりしていることがある。「少しづつ」ではあるが、現在の井草に、新しく、「自由・自主・自治」を考える風が吹き始めてゐるという事実である。最後に、そうした井草に最もふさわしい言葉を記しておこう。これから先もまた、こうあってほしいという願いを込めて。

「君は自由だ。選びたまえ、つまり創りたまえ。」——サルトル——

かもしません。

(平成元年卒業)

坂本和歌子

私はかつて牛だった。井草という居心地のよい牧場でのんびり自由に暮らす牛だった。適度に美味しいミルクを出しさえすれば後は自由——優しい太陽の光が降り注ぐ中、人様が育てくれた青々とした草にありついて満腹になれば昼寝をし、時には仲間の牛達とのわいないうどりを楽しむ——そんな気ままな日々を送っていたワカ牛であったが、ある日彼女はふと気づいたのだ。自分の周りを柵が取り囲んでいることに。柵の外には何があるのか? わからぬいが見てみたい。出てみたい。そんな思いは募る一方であつた。そしてある日、ワカ牛は自分の中で何かが勢いよく弾け散る音を聞いた。その瞬間にワカ牛は柵へ向かって走り出していた。体当りしたのである。それは意外にも低く、いとも簡単に倒れた。思いもかけない発見に少々戸惑いを感じたのだ。もはやワカ牛は牛ではなかつた。意志を持った一人の人間になつていた。とともに、井草ものどかな牧場ではなく、ひとつ社会となつていたのである。人間となつた私は気がついた。それまで他人によつて与えられる世界の中で感じていた



解放感を、自由と取り違えていたことに。解

放感とは精神的、肉体的あるいは時間的な束縛から放たれる時に感じるものであって、かつてのワカ牛のように与えられた世界で生きている限りは怠惰と紙一重のものでしかない。自分の力で柵を越えた時から私は自由というものを本当に自分のものとして掴んでいた気がする。その自由とは――

数々の歴史が示す様に「社会」や「権力」は人々の肉体を縛ることは出来ても、心だけは容易には縛れなかった。人々が意図を持ち、自らの精神を信じ、行動する時に、それがむやみに踏みにじられることなく、また圧力のない社会であること――そこに真の自由があるのではないかと私は思う。私にとっての井草の自由とは正にそういうものであった。個々の精神のエネルギーを分散させないエネルギーが井草にはあったのだ。私が有志劇で文化祭に参加したいと一念発起した時、それを先生方と井草はしっかりと受け止めて下さったのである。そんな井草で培った自由の精神は今も私の中でしっかりと生き続けている。

かつてのワカ牛は時折、空を見上げては、「モウ……」などと言ってはみるが、風そよぐ牧場を懐かしいと思つたことはない。

(平成元年卒業)

佐藤俊太郎

この学校を絵にしてみると、きっとどんな有名私立高校よりもカラフルで素敵な絵になるだろう。

学校はぬり絵じゃない。あらかじめ紙に下絵が書いてあって指定された色をつけていくだけの学校は数多い。

制服は紺、くつ下は白、規則で固められたぬり絵のキャラクターのような自分を鏡で見たら、なんて情けない気がするだろう。

この学校は言つてみればパレットに似ている。

パレットの上に様々な色の絵の具があつて、それが混ざり合い、時には濁り、時には輝く。学校はその絵の具たちが混ざり合う場を提供しているにすぎない。

この学校を描くのは生徒自身だ。下手でもいい、いつまでも絵になる学校であつてほしい。

(平成二年卒業)

森祐子

今、こうして「自由」について、私が好き勝手に述べられる立場にいるのも、「自由な井草」の校風が私を大人へと成長させてくれたからだと、痛感せざるを得ません。

これまでの私流の「自由」とは、「勝手になんでもしていい」というもので、なんとも幼稚な考えを抱いていたものです。けれども

これは誤りであり、本来の「自由」とは、実は単なる重荷でしかないのです。というのは、「自由を与えた」とは、「これからは、すべてあなたが一人で判断を下し、責任を持つて行動しなければならない」という意味になります。

そこで、私は標語になりつつある「自由な井草」とは、井草風の教育指導法なのだと思います。立心を養わせる、とも受け取れると思います。先生が無理矢理にさせるのではなく、自由にさせておくということによって、各自が、自己管理をきちんとこなせるようになり、気づかぬ内に、子供の壁をのり越えていく。何に關しても、自然な流れが一番と思っている私には、このような井草の雰囲気が、居心地良くて、とても好きでした。

願いは、一つです。井草の生徒手帳の生活規則の欄が、頭髪・服装の禁止項目で埋まってしまうなんてことが、ありませんように。てしまふなんてことが、ありませんように。

(平成二年卒業)

水野恵司

私が、高校在学の三年間の中で、一番思い出すことはやはり、「自由」というモットーを生かした課外活動のことです。例えば、私の所属していた「井草祭常任委員会」(以下、

略して常任)」は、先生方からあまり干渉を受けず、自分達で、やりたいイベントを盛り込みながら企画推進していくという、まさに「自由」な委員会でした。しばしば先生方に衝突したこともありましたし、人手不足で夏休みまで働かなくてはならなかったり、それでも当日に間に合わなくて悔しさに自分を嫌悪したような時もありましたが、終わってみると、祭りの後の静けさを共に働いてきた仲間達としみじみ味わったり、次の代への引き継ぎをしたりと、人生に花を添えてくれる、何よりも大切な思い出となつて、今でも胸を熱くさせてくれるのです。

(平成二年卒業)

山崎博世

「つまんない」とか「何もない」とか最初は思っていたけれど卒業してみると、「なんだ、ものすごくいろんなことがあったんだな。」とわかった。たくさんの人達にも会えたし、いろんな経験もしたなあ。

ぱり、卒業してみると、井草の人達の素朴さはよかったです。それにちょっといい加減で良いのは、あってもないので同じような校則ではある。「昼休みの外出は許可をもらう」なんて、特にそうだった。

私は「今日のお昼、何か買いに行ってくる。」とか言って、さーっと買い物に行ってしまう気安さがなんとも好きだった。あと、いいと思つ

ボロッと本音をもらしてしまった（誰とは言いませんけど）先生がいてくれたのもうれしかった。井草は自由だっていうのは、つかず離れずのちよつといい加減な人間関係から出てきてたんぢゃないかな、とも思つたりもする。

ともかく、いい人にいっぱい会えたので楽しかった。学校へは友達に会いに行ってたのと同じ。でも、そういうのはいいことなんだ、と信じている。

馬場さより

私が高校時代に全力を出したこと、といえ
ば、もちろん勉強であるはずがなく、唯一考
えることに尽きるだろう。現世のこと来世の
こと、人間というものの動物というもの、女で
あること男であること、等々。まさにヒマさ
えあれば、問題提起をしては色々と考えをめ
ぐらせていました。私がそうした高校
生であった要因の一つに、井草高校に入学し
たことがあげられる。

に、自分なりの意義を見出し、理論づけるようになつた。もちろん、未だに完成に至つたものは少ないのだが、井草における自由は、独立した人間になるための一一種の試練、しかしも積極的に受けようとしないと受けられない試練であると、位置づけた。

「自由の井草」の三年間で、私は考へることを覚えた。自由に振舞う中で、人として生きる上で正しいものとそうでないものを考へ、判断することも、覚えた。私にとって井草時代とは、その意味でも自己確立時代といえよう。ただ残念なことは、私の在学中には結局、さすが「自由の井草」の生徒だと先生方からお詫びの言葉を頂けなかつたことである。

さすが「自由の井草」の生徒だと先生方からお誉めの言葉を頂けなかつたことである。

井草高校の出来事	
1 東京府立第十八高等女学校設立認可 2 東京府立高等家政学校内に開設 4 第1回入学式（仮校舎）	○鷺宮駅北側（現武蔵丘高校）の敷地を共有して、井草・大泉・武蔵丘・五商がそれぞれパラック校舎一棟で出発。
1 東京府立井草高等女学校と改称 7 本校舎上棟式	○校舎建設予定地は、一面の畑だった。買収地価 坪単価11～13円（6989坪）
2 本校舎に移転 7 東京都立井草高等女学校と改称	○移転時に、教師・生徒は徒步で机や椅子を運搬した。○遠足は徒步で野火止用水・平林寺・花小金井方面に。○教練に木刀も使用。防空訓練・退避訓練など実施。○入試に体力テスト（鉄棒・懸垂）があった。
6 勤労動員開始	6 勤労動員 田無中島飛行機製作所・保谷朝比奈鉄工所 4年生200名 7 同上 3年生224名 ○広瀬校長、動員のはなむけに集会で液体空気の凍結実験。○校庭南側に防空壕を掘る。側面は廃材、屋根は教壇。
3 第一回卒業式 ○高等女学校校歌制定	○下級生の勤労動員は建物強制疎開。荒川方面まで出かける。 ○戦時下の修業年限短縮措置により、4年で卒業。 ○校舎が米軍機の機銃掃射を受ける。
	○疎開生徒、次第に東京に帰り、復学。 ○食料難時代。運動場を耕してサツマイモをつくる。
3 校舎増築 7 教室竣工 4 学制改革により、第2・3学年は新制中学となり、併設中学校と称する	○石神井中と男女合同演劇（ラブシーンが、写真新聞「サン」に写真入りで大きく「やがてこうなる」と報道される） ○いわゆる「6・3・3・4制」始まる。
3 校舎増築（782 m ² ） 3 東京都立井草新制高等学校設置（全日制1年5学級 定時制1年1学級）	○生徒会の城北地区の連絡会に代表が参加。生徒会の本格的な活動は24年ごろからか。○夏、石神井・井草混声合唱団誕生（指揮 石神井 山田先生、井草 国藤ちか子先生） ○新校章制定
3 高等女学校・併設中学校なくなる 4 P T A、生徒会結成	○このころ、出版物はアメリカ占領軍の検閲があった。文芸部などクラブの出版物も日比谷のG H Qまで届けに行つた。○週5日制に。（土日休み） ○定期制学友誌「ともしび」発刊
1 東京都立井草高等学校と改称 4 男女共学（男80 女170 5学級） 10創立10周年記念式典 ○校歌制定	10創立10周年記念式典。紅白の餅を配る。11石神井・井草混声合唱団、朝日新聞社主催第5回関東合唱コンクールで、高校総合第1位（日比谷公会堂） ○進学適性検査の練習、年に3～4回。○林間学校、蓼科で
○校庭に塀が完成	8 第1回夏季水泳実習、千葉県館山で。4泊5日 ○「井草新報」調査なりたい人の第1位「良妻賢母」 ○都合唱コンクール2位。 ○ハンド部、東京代表として九州遠征 ○スクエアダンスの会に2年男子反対
	2 石神井・井草混声合唱団解散。 8 夏季行事=夏季講習・水泳実習（鵜原）・富士登山・鍛錬旅行（志賀） 11上妻紀子さん、上井草駅踏切で事故のため死去。○女子ハンド部、東京代表として国体に出場。

井草年表 昭和史の中の五十年

社会・国際	教 育	世 相	西暦	昭和
5 ドイツ、北欧に侵攻開始 9 日独伊三国同盟 10大政翼賛会結成 11紀元2600年式典	6 修学旅行制限（18年以降全面中止） 10教育勅語済発50周年	八紘一宇 <u>せいたくは</u> 敵だ 湖畔の宿 *外国名追放	4 0	1 5
1 「戦陣訓」示達 4 大都市米穀配給制 4 日ソ中立条約締結 6 ドイツ対ソ戦開始 12太平洋戦争開始	3 朝鮮で朝鮮語学習廃止 4 小学校を国民学校と改称 7 文部省「臣民の道」刊行配布	めんこい仔馬 森の水車 *米映画輸入最後 *防空ずきん・もんぺ	4 1	1 6
4 東京初空襲 5 翼賛政治会結成、一国一党 6 ミッドウェイ海戦、戦局逆転 6 関門トンネル下り線開通	7 高女の外国语、随意科目に 7 文部省、漢字左書き案決定 12標準漢字（漢字総数2669字）	欲しがりません勝つまでは 新雪 空の神兵 *金属回収令	4 2	1 7
3 野球用語の日本化 5 登呂遺跡発見 5 アツツ島守備隊玉碎 9 上野動物園猛獸薬死 12カイロ宣言	1 中学・高女4年制に 4 中学・高女教科書国定化 6 学徒戦時動員体制 12第1回学徒出陣	撃ちてし止まむ 「姿三四郎」「無法松の一生」 *最後の早慶戦	4 3	1 8
1 建物疎開（建物強制取り壊し） 8 竹槍訓練開始 10神風特攻隊、体当たり攻撃開始 11B29東京初空襲	8 学童集団疎開 8 沖縄児童疎開船撃沈 8 学徒勤労令（中学以上は軍需産業に通年動員）	鬼畜米英 <u>一億火の玉</u> 同期の桜 「あの旗を擊て」「陸軍」	4 4	1 9
3 東京大空襲(3・10) 4 米軍沖縄に上陸、県民死者17万 8 広島・長崎に原爆投下、終戦 12婦人参政権	4 国民学校以外授業1年間停止 9 墨塗り教科書 12GHQ、修身・日本史・地理の停止を指令	神州不滅 <u>一億玉碎</u> ピカドン お山の杉の子 *戦災孤児	4 5	2 0
1 天皇人間宣言 1 軍国主義者の公職追放 10第2次農地改革 11新憲法公布（実施 翌5月）	10教育勅語奉誦廃止 10日本史墨塗り教科書で再開 11当用漢字・新かなづかい告示	あっ、そう リンゴの歌 東京の花売り娘 *のど自慢始まる	4 6	2 1
1 占領軍2・1スト中止指令 4 独占禁止法公布 4 第1回参院選（社会党第1党） 8 古橋水泳で世界新	3 文部省PTAの結成うながす 3 教育基本法・学校教育法公布 4 6・3制の小・中学校発足	斜陽族 港の見える丘 「鐘の鳴る丘」 *宝くじ *カストリ雑誌	4 7	2 2
1 帝銀事件 6 太宰治死 6 昭和電工疑惑事件 7 公務員争議禁止 11極東軍事裁判判決	4 新制高校（全・定）発足 7 教育委員会法（公選制） 11小学校5段階評定	鉄のカーテン 異国の丘 「酔いどれ天使」 *美空ひばりデビュー	4 8	2 3
1 法隆寺金堂壁画焼失 3 ドッジ・ライインで不況深刻化 7 下山・三鷹・松川事件 11湯川博士ノーベル賞	1 進学適性検査（29年まで） 5 新制大学設置（94校） 9 大学教員レッドページ開始	駅弁大学 筋金入り 銀座カンカン娘 「青い山脈」「哀愁」	4 9	2 4
6 朝鮮戦争勃発 7 金閣寺焼失 7 報道関係レッドページ 8警察予備隊発足 10戦争犯罪人追放解除	2 東京都、教員レッドページ 4 短期大学発足（149校） 10文相日の丸・君が代を勧める	貧乏人は麦を食え「また逢う日まで」・ジャングル大帝 *1000円札	5 0	2 5
1 紅白歌合戦始まる 4 桜木町事件（国電発火） 9 単独講和・安保条約 9 「羅生門」グランプリ	4 教科書無償配布開始 5 児童憲章制定 6 東京都に夜間中学 11文相天皇を道徳の中心に発言	逆コース 上海帰りのリル・鉄腕アトム *パチンコ大流行	5 1	2 6
4 日航もく星号墜落 5 メーデー事件 7 破壊活動防止法 8 アサヒグラフ原爆写真初公開 10保安隊発足	4 参院文教委、大学の自治を重視し警察権の介入を戒める 5 早大に警官隊突入、負傷多数	リンゴ追分 「真空地带」「風と共に去りぬ」 *ナイロンブラウス	5 2	2 7

井草高校の出来事	
	4 遠足問題で1年生が集会、話し合いの上、希望ほぼ通る。6 体育館兼講堂の建設をPTAで決定。○女子ハンド部、東京代表として国体に出場。（2年連続） ○演劇部、中央大会に出場 ○サッカー部東京4位
	○建設業者の経営悪化と不誠意によって体育館の竣工危ぶまれ、学校・PTA苦慮。後に暴力団がらみとなり先生奮闘。○研究発表を文化祭に吸收。○クラブ中心の文化祭にクラスの出演（演劇）を加える。
3 PTAの資金によって体育館兼講堂竣工 4 男女同数 6学級となる	7 夏季行事に山岳講習（林間教室の始めか） ○週6日制。（週5日→2週11日と変化） ○雑誌「平凡」に「井草高校」が舞台の恋愛小説掲載。○臨海実習で日本水府流の免状。○同窓会「井草会会報」創刊。
7 西校舎竣工（555 m ² ） 初めて特別教室（生・化・食・被）できる 9 校舎増改築落成式	6 サッカー部ブロック優勝して東日本大会に出場。○ハンド部、東京都選手権大会で優勝。○前年よりカリキュラム論争が盛んとなり、以後改定が続く。○「井草新報」に松竹歌劇団のラインダンスの写真入り広告
10第1回井草祭	9 第1回進学模擬試験（5教科）。10サッカー部、国体本大会に出場。 ○第1回井草祭。従来の諸行事を統合したもの。 ○定時制演劇部、定通芸術祭演劇部門で優勝（34年まで連続4回）
	7 夏季行事に地理（見学）旅行始まる。10石神井高と親善大会。サッカーワークショップ。合同1500人の大合唱。フォークダンス。以後数年続く。 ○独協・和光との三校親善競技大会。○定時制「観月祭」始まる。
4 第1学年を7学級とする 4 南校舎竣工（714 m ² ） 旧平屋建て校舎取り壊し	○3年鈴木さんが日展入選。○夏季行事 林間（秩父キャンプ・金峯山登山）臨海（伊豆 宇久須）見学旅行（木曾路） ○昼休みに中庭で、生徒会役員が中心でフォークダンス。男子がてれて参加をしぶった。
7 本館竣工（1653m ² PTAの援助で図書室も） 9 校旗制定 10創立20周年記念式典 ○同窓会館竣工か	5 限先生、病気で死去。7 夏季行事 臨海（戸田）林間（秩父）見学旅行（奥の細道をたどる）○生徒会会則全面改定。○生徒会主催「安保はか非か」の討論会。○生徒会新聞「井草新報」創立20周年特集号発行
	○テニス部、都代表として関東大会3回戦まで進出。 ○石神井・井草親善大会、中止。次第に進学に重点が置かれるようになる。
	○サッカー部・ハンドボール部、関東大会に出場。 ○陸上部個人、三段跳びで全国8位に。○このころ、生物部の「三宝寺池の総合調査」など、学芸クラブの活動はひじょうに質が高く、系統的だった。
4 第1学年10クラス（パイプ教室2教室増設）	○このころ模擬テスト（上位50位までの氏名を張り出した） ○音楽部、第3学区合同合唱祭に大泉・石神井・武蔵丘・宝仙と合同合唱。○定時制演劇部、都大会で1位に入賞。
4 第1学年9クラスに復帰	2 歩け歩け大会（全員徒步大会）、グランツ・ハイツで。 ○サッカー部、関東大会出場（37年より3年連続） ○将棋同好会、全国高等学校将棋大会にベスト8。
3 特別室（物理・地学）・普通教室6（787 m ² ）竣工	2 歩け歩け大会、平林寺。 ○囲碁同好会、全国高等学校選手権大会に団体優勝。○水道設置（それまで井戸に頼っていた）○このころ、自由と規律の問題に关心高まる。

社会・国際	教 育	世 相	西暦	昭和
2 NHKテレビ放送開始 7 朝鮮戦争休戦協定 7 伊東絹子ミスユニバース3位 8 民間テレビ放送開始	1 中央教育審議会発足 3 旧制大最後・新制大初の卒業 6 文部省 教育の中立を通達	雪の降るまちを 「ひめゆりの塔」「君の名は」 * 街頭テレビ	5 3	2 8
3 ピキニ水爆実験、第5福竜丸事件 7 防衛庁・自衛隊発足 9 青函連絡船洞爺丸転覆	3 文部省「偏向教育」事例を国会に報告 5 教育2法(教育の中立)公布	死の灰 お富さん 「七人の侍」「二十四の瞳」「ローマの休日」	5 4	2 9
5 砂川基地闘争 8 第一回原水爆禁止世界大会 8 森永砒素ミルク事件 *神武景気始まる(32年まで)	5 紫雲丸衝突沈没、修学旅行生徒多数死亡 8 民主党「うれべき教科書の問題」第1集刊行	ノイローゼ 「エデンの東」「暴力教室」 *家庭電化時代始まる	5 5	3 0
2 週刊誌ブーム 10日ソ国交回復 10ハンガリー暴動 11熊本大水俣病を水銀中毒と報告 12国連加盟	6 新教育委員会法(任命制)公布 10教科書検定強化 F項ページ問題化	一億総白痴化 太陽族 哀愁列車 「ビルマの堅琴」・鉄人28号	5 6	3 1
1 南極観測隊昭和基地設置 8 東京都の人口世界一 10ソ連人工衛星 *なべ底景気(33年まで)	3 学校に剣道復活 12「教頭」設置 12日教組「勤務評定」で非常事態宣言	よろめき 有楽町で逢いましょう 「戦場にかける橋」	5 7	3 2
3 スバル360 発表 3 EEC条約調印 8 インスタントラーメン発売 12一万円札発行・東京タワー完工	3 小・中に「道徳」 5 小・中1学級50人 7 管理職手当実施 10学習指導要領国家基準強化	団地族 「楳山節考」「バス通り裏」・月光仮面 *長島新人王	5 8	3 3
3 少年週刊誌発売 4 皇太子結婚式 9 中ソ対立 9 伊勢湾台風 9 ソ連ロケット月面到着 *マイカー時代	1 勤務評定・学習指導要領などで文部省と日教組の対立激化 7 「送りがなのつけ方」告示	カミナリ族 神風タクシード・黒い花びら・忍者武芸帖	5 9	3 4
5 安保改定反対国会デモ 連日続く 8 ローマオリンピックで体操男子団体総合金メダル 10浅沼書記長刺殺	3 学校安全会発足 *受験産業による模擬試験盛ん 「偏差値」が広く知られる	所得倍増 「ブーフーウー」 *インスタントコーヒー発売	6 0	3 5
2 右翼少年 中央公論社長宅襲撃 4 ソ連人間衛星 8 東独・ベルリンの壁を構築 *日米経済協力進む	8 日経連・文部省 理科教育振興に意欲 10全国一斉学力テスト(反対闘争激化)	地球は青かった 銀座の恋の物語 「七人の刑事」 *レジャー	6 1	3 6
5 サリドマイド禍 8 堀江ヨットで太平洋横断 9 ゼロックス発売 10 貿易自由化進む 10キューバ危機	4 工業高等専門学校発足 4 高校全入全国大会 5 文部省全入運動を非難 8 人づくり提唱	青田買い 遠くへ行きたい 「キューポラのある町」・おそ松くん	6 2	3 7
7 中ソ対立激化 8 米英ソ部分核停戦協約 8 原水爆禁止運動分裂 11ケネディ大統領暗殺	4 高校新教育課程 11能検テスト 12教科書無償措置法公布 12小・中1学級45人に	三ちゃん農業 高校三年生 「天国と地獄」「鉄腕アトム」	6 3	3 8
8 トンキン湾事件 ベトナム戦争 9 王ホームラン記録 10東海道新幹線営業開始 10東京オリンピック	6 短大、恒久制度となる	おれについてこい 「ひょっこりひょうたん島」・オバケのQ太郎	6 4	3 9
2 米、北ベトナム爆撃開始 6 日韓基本条約調印 8 阿賀野川で水俣病 10朝永振一郎ノーベル賞	1 中央教育審議会「期待される人間像」発表 6 家永教授教科書検定は違憲と教科書裁判	鍵っ子 公害 さよならはダンスの後に「赤ひげ」「ザザエさん」	6 5	4 0

井草高校の出来事	
3 特別室（地学）・普通教室3(270m ²) 竣工 7 からまつ山荘竣工 10創立25周年記念式典	10・27 創立25周年記念式典（手拭・風呂敷を配る） ○吹奏楽部、東京都高等学校吹奏楽コンクール3位。
3 給食室竣工(100m ²) 6 定時制完 全給食開始 4 群制度開始(34群=大泉・石神井・井草 合同選抜)	○からまつ山荘合宿（1年全員） ○「遊び（恋愛）の井草」の世評このころから？
4 校庭投光器6基設置 10校舎（教室）一部焼失	2 スケート教室実施。 ○P.T.A会報創刊。 ○井草祭、統一テーマの設定始まる。 ○政治運動・学生運動に次第に関心が高まってくる。
5 借地（校庭の一部）返還 地形整理のため一部交換	12紛争。5項目の要求を掲げて一部生徒がバリケード封鎖。生徒集会連日4日。期末試験ボイコットのアピール。教師・生徒による全校集会・担任を交えたクラス討議などがあった。
3 普通教室12(1514m ²) 竣工	1 ハンスト。 3 卒業式一部混乱。 ○生活規則全面改訂、制服廃止。○「模擬テスト」が「実力テスト」に ○新聞委員会アンケート「授業に不満足」62%、「家出の願望」85%
8 プール(989.7m ²) 竣工 10からまつ山荘設立5周年記念式典	11三校（石神井・大泉・井草）生徒会合同会議。○生徒会新聞「井草新報」創刊100号。○「つぶせ無気力」が井草祭のテーマに。○水着の規定に1・2年が反発。生徒会が問題にし、要求の一部通る。
5 北校舎増改築(1114 m ²)	4 光化学スモッグによる被害発生。 ○オートバイが自由だった。中庭を疾駆するバイクに生徒から批判。
10 木造体育館兼講堂解体	11P.T.A主催座談会「生きがいについて」保護者・生徒・教師100名参加。論点は嗜み合わない恨みはあったが、いわゆる「三無主義」といわれるような現状打破の関心と意欲が感じられた。
10 鉄筋体育館完成	○厳しさを増す入試の実態と、井草の伝統である教養主義について、教師・生徒の模索があった。 ○定時制同窓会「いぐさ会」発足。会報発行。
	○井草オープン（テニス大会。卒業生も参加）始まる。 ○早朝サッカー。クラスマッチ。 ○山荘合宿、この年で最後か。
	○井草祭高揚期。応援団盛ん。マスコットが次第に巨大化したため安全上の見地から翌年より高さが制限される。 ○男子新入生、定員割れ。（34群の偏差値が上がって敬遠された）
	○このころ学校に「修学旅行廃止」の意向があり、生徒が「存続」の運動を起こす。学校側と話し合いを重ねて、存続と決定。○3学区合同文化祭始まる。○総務会総辞職問題。○井草祭のゲート製作始まる。
	○前期生徒会長に女子が当選。（井草祭を始め女子の活躍目立つ） ○「生徒の自主性を育てるカリキュラム」の検討が始まる

社会・国際	教 育	世 相	西暦	昭和
3 人口1億人突破 6 建国記念の日 6 ビートルズ来日 8 中国文化大革命 *いざなぎ景気（45年まで）	7 都教委「学校群」制度発表、群制度・3教科試験・内申重視 10中教審「高校の多様化」強調	星影のワルツ 「おはなはん」「ウルトラマン」・巨人の星	6 6	4 1
4 美濃部都知事当選 4 イタイイタイ病原因は三井金属 9 四日市ぜんそく訴訟 12首相、非核三原則言明	3 高校体育になぎなた・弓道が復活 7 北海道教委が教員異動に思想・支持政党を調査	小指の想い出 「ルパン三世」 *ミニスカート *むちうち症	6 7	4 2
2 成田空港問題 8 ソ連チェコ侵入 10 明治100年記念式典 10 川端康成ノーベル賞 *GNP世界2位	1 中大スト、4 日大紛争、6 東大紛争など大学紛争(110校)激化 12東大等来年度の試験中止	昭和元禄 ゲバルト 恋の季節 ・ハレンチ学園 *シンナー遊び	6 8	4 3
5 新全国総合開発計画 5 東名高速道路全面開通 7 米アポロ11号月面着陸	6 都道府県教委連合 高校教育の多様化（コース制等）発表 *紛争、高校へ広がる	「男はつらいよ」「ムーミン」・ゴルゴ13 *反体制フォーク	6 9	4 4
2 国産人工衛星打ち上げ 3 大阪万博 3 赤軍派日航機乗取り 11島由紀夫割腹自殺	3 都内354高校、卒業式で混乱 5 小学校社会科教科書で神話復活 *三無主義問題に	ウーマンリブ 知床旅情 *ファミリーレストラン *歩行者天国	7 0	4 5
6 新宿に超高層ビル 7 マック1号店銀座に開店 8 ドル・ショック *公害問題深刻化	6 中教審「第3の教育改革」発表(4・4・6制・新教員養成大学)	わたしの城下町 「仮面ライダー」 *カッピヌードル発売	7 1	4 6
2 浅間山莊事件 2 札幌オリンピック 3 高松塚古墳壁画 5 沖縄復帰 6 日本列島改造論 9 日中国交回復	3 不利な内申書記載、裁判に 5 石神井南中学で光化学スモッグ(111名被害)	総括 濑戸の花嫁 ・ベルサイユのばら *土地ブーム	7 2	4 7
10 六大都市革新首長会議 10石油ショック 高度経済成長破綻 10江崎玲於奈ノーベル賞 *内ゲバ激化	5 国際理科テストで日本最上位 12茨城で小6自殺（自殺の低年齢化）	省エネ 神田川 「仁義なき戦い」 ・エースをねらえ！	7 3	4 8
1 経済進出に諸外国の反感増大 10佐藤栄作ノーベル賞 12田中首相金権政治で辞職 *狂乱物語	3 教員人材確保法 4 春闘で日教組初の全日スト	狂乱物語 襟裳岬 「宇宙戦艦ヤマト」 *小野田少尉の「帰還」	7 4	4 9
3 山陽新幹線開業 4 ベトナム戦争終結 7 沖縄国際海洋博 11第1回先進国首脳会議	7 専修学校法成立 11総理府青少年の性早期化を指摘 *小・中の塾通い激増で問題化	乱塾 シクラメンのかほり 「ジョーズ」 *100円ライター発売	7 5	5 0
4 中国天安門事件 4 ポルボト政権大虐殺 7 ロッキード事件で田中前首相逮捕 11天皇在位50年式典	3 主任制度施行 5 生涯教育 5 日教組、落ちこぼれを指摘 10文部省ゆとりある教育を強調	灰色高官 *持帰り弁当発売 *宅配便開業 *戦後生まれ半数越す	7 6	5 1
1 主要各国200カ国漁業水域宣言 9 赤軍日航機ハイジャック 11外貨準備高史上最高 *寿命世界一	3 通塾率小26.6 中38% 7 小中指導要領で君が代国歌化 10 警視庁発表少年の自殺世界最高	翔んでる 津軽海峡冬景色 ・銀河鉄道999 *カラオケ流行	7 7	5 2
5 国連で初の軍縮特別総会 5 成田空港開港式 8 日中平友好条約調印 12米中国交正常化発表	3 警察庁発表、52年の自殺高242、中103 7 労働省アルバイト調査、高校15% 中学4%	窓際族 与作 「未知との遭遇」 ・うる星やつら *嫌煙権問題	7 8	5 3

井草高校の出来事	
	7 渡辺校長、着任12日で死去。
	○六校戦（西・石神井・大泉・豊多摩・杉並・井草）で冬季1位、夏季2位。 ○インフルエンザ流行。学級閉鎖。 ○有名大学に推薦入学増加の傾向。
	○六校戦。 ○「井草の自由」について、生徒の間で「自由を大切にしよう」「井草の自由は無気力・無責任だ」などの論争。
7 グループ制発足（32グループ＝練馬区内の全普通高校）	○制度変更に際し、生徒間に微妙な問題を生じた。 10 磯貝丹己さん登校途中交通事故で死去。 ○インフルエンザ流行。 学級閉鎖。 ○井草祭、台風に襲われる。（展示会繰り上げ終了）
	4 東京都の教員人事異動制度が変わり（いわゆる強制異動）、井草に長く在任の教員が順次いなくなった。 5 体育祭分離、時期早まり、中大グラウンドで。（校舎工事のため） ○校内での「食べ歩き」が目立つ。
3/18・19 定時制閉校式 4 臨時学級増、1年10学級に 12木造改築、体育館ステージ増築。現在の姿となる	○消滅する木造校舎を惜しむ声、生徒にもしきり。名所（？）の「井草便所」も姿を消した。 ○臨時増学級で1学年が10学級となり「J組」ができて、井草祭の団分けなどに影響が出た。
3 定時制記念碑、正門脇に建設（ああ井草 われらが青春の灯 ここに燃ゆ） ○体育馆に照明設備増設	○進路指導の比重高まる。3年校内実力テストのコース制、外部テストの導入など、進路指導体制が変化し始める。
	○エレキ演奏・放送・生徒の声出し・校外ジョギングなどについて近隣からの苦情が増加。 ○桜田君、400mHで山口インターハイ出場。
3 臨時増学級終了	8 木村さん、200mバタフライで、佐藤君、110mHで、北海道インターハイに出場。 ○東京都の方針で春季休業中の修学旅行ができなくなり、実施時期試行錯誤。 ○自転車通学増加を続け、駐輪場拡大が追いつかない
	○練馬区内での井草高校の評価次第に高まる。 ○井草祭の応援団の練習が「きつい」と敬遠され始める。教師側でも応援団のスタイル・意義に疑問が出された。 ○文化祭でクラス・有志の演劇が増加。
	○インフルエンザ流行。学級閉鎖。 ○修学旅行の時期が2年の秋となる。 ○井草ジャージがモデルチェンジ。
	○生徒会の活動に新しい傾向。イラスト沢山の親しみやすい広報活動が活発化。
○中学生の減少が、第一志望合格者に影響（全都的現象）	
10 創立50周年記念式典	

<参考図書> 「近代日本総合年表」（岩波書店） 「昭和史年表」（小学館） 「日本史年表」（岩波書店）

「日本教育史年表」（三省堂） 「日本史辞典」（角川書店） 「現代用語の基礎知識」各巻

および付録（自由国民社） その他

以上の著作物に感謝します。

社会・国際	教 育	世 相	西暦	昭和
1 第2石油ショック 3 米スリーマイル島原発事故 6 元号法制化 6 東京サミット 12ソ連アフガン侵攻	1 共通第一次学力試験 5 中野区教委区民投票条例 7 警察庁少年の自殺の第1原因は学校に	ウサギ小屋 エガワる 関白宣言 贈る言葉 * ウォークマン発売	7 9	5 4
7 モスクワオリンピックに西側不参加 8 ポーランド自主労組「連帯」結成 * 校内・家庭内暴力急増	3 総理府調査 日本の子供は校外の勉強時間が最長で睡眠最短 10中学の校内暴力に警官隊出動	それなりに。Dr スラント * 山口百恵引退 * 自動車生産世界一	8 0	5 5
3 中国残留孤児来日 3 神戸でポートピア'81 開幕 8 鈴木内閣全閣僚靖国神社参拝 * 貿易摩擦顕在化	7 臨調、40人学級凍結具申 8 防衛白書が愛国心を強調 10常用漢字表(1945字)告示	蜂の一刺し ルビーの指環 * タッチ * 窓ぎわのトットちゃん	8 1	5 6
1 ロッキード事件有罪判決 5 国連軍縮特別総会に日本から反核署名2754万 6 東北新幹線開通	3 警官つき卒業式、中高の1割 6 日教組大会 右翼妨害で分散 8 教科書記述に中国・韓国抗議	ネクラ 北酒場 「E T」 * 風の谷のナウシカ * エアロビクス	8 2	5 7
1 中曾根「日本は不沈空母」発言 9 ソ連、大韓航空機を撃墜 10田中元首相に有罪判決	2 中学生が浮浪者襲撃 3 人死亡 6 文部省校内暴力調査 公立中13.5% 公立高10.5%	めだかの兄弟 「おしん」 * パソコン・ワープロ急速に普及	8 3	5 8
2 社会党に「自衛隊違憲合法」論 3 アフリカ飢餓深刻化 5 自民党、防衛費G N P 1%枠見直し	1 文部省調査 高校中退 公2%、私3.2% 11高1男子いじめの仕返しで同級生を殺害	長良川艶歌 ワインレッドの心 「お葬式」 * テレホンカード発売	8 4	5 9
4 民営化でNTT、日本たばこ発足 8 日航機 御巣鷹山に墜落 9 藤ノ木古墳で石棺発掘 * エイズ広がる	1 学校給食の民間委託 2 臨教審「自由化より個性化」9 文部省 卒業式の国歌・国旗を通知	恋におちて 「金曜日の妻たち」「乱」 * ファミコンブーム	8 5	6 0
4 チェルノブイリ原発大事故 9 文相「日韓併合は韓国にも責任」発言で罷免 * ソ連ペレストロイカ	2 中学生いじめで自殺 4 中学生通塾率44.5%に 6 中国、復古調の高校歴史教科書に抗議	新人類 * 三原山噴火 * 地価高騰波及 * 円高ドル安 * 激辛ブーム	8 6	6 1
4 国鉄分割民営化 4 防衛費G N P 1%突破 10株大暴落 10利根川進ノーベル賞 * 地価急上昇続く	11教育課程審議会 69年度からの高校社会科廃止、国歌・国旗の明確化を発表	地上げ屋 命くれない 「プラトーン」 * 衛星24時間放送開始	8 7	6 2
3 青函トンネル開業 4 東京地価急上昇 6 リクルート事件の発端 7 「なだしお」事件 11消費税強行採決	5 小学校学習指導要領文部省案に東郷元帥 11元文相・前文部次官のリクルート株譲渡が発覚	朝シャン カウチポテト 「ラストエンペラー」「敦煌」	8 8	6 3
1 昭和天皇逝去 平成に改元 5 リクルート事件拡大 6 中国、天安門広場で弾圧 11ベルリンの壁撤去	4 小学校で初任者研修制度開始 * 管理主義的な校則が問題化 * P C、W P導入加速化	酒よあした 「魔女の宅急便」 * セクシャルハラスメント問題	8 9	6 4 平成元
1 木島長崎市長、右翼に狙撃される 10東西ドイツ統一 10即位の礼・大嘗祭 * 東欧に体制変革の動き急	1 国公立大入試センター試験 7 神戸で女子高校生校門圧死事件 * 全国的に校則見直し	おどるポンポコリン	9 0	2
1 イラクに多国籍軍進攻 5 機雷の掃海に自衛隊海外派遣 5 普賢岳噴火 6 証券会社の不祥事表面化	4 朝鮮学校の公式戦参加 部分的に始まる	バブル企業 * 大都市で地価の下落始まる	9 1	3

<注> ①各項目の頭の半角数字は月を示す。*印は、月日が未詳のもの、あるいは広く風潮を示す。「井草高校の出来事」の項目では○が月日未詳、または独立項目を示す。

②「世相」欄の、下線は流行語、無印は流行歌、カギ括弧は映画・テレビ、*印は流行現象・社会的な出来事、・印はコミックを示す。

井草高等女学校校歌

土岐善磨 作詞
山田耕斧 作曲

東京都立井草高等女学校校歌

作曲 山田
耕斧 善磨

堤のさくら 花さきにほひ

野辺の空 澄みてたかし

あゝ井草 井草の春秋

正しき道を 踏みしめて

育まん われらをとめの力を

櫻のみどり 風ふきかほり

富士の影 つねに清し

あゝ井草 井草の朝夕

御国のさかえ 身にをびて

いそしまん われをみなの

つとめを

井草高等学校校歌

作詞 土岐 善磨

作曲 芥川也寸志

Allegretto $\text{D}=126$

はなびらかけ ふかくやえ さくーら
いちようはもみじして かぜ きよーく

さきわたり はる またーなつ 一へてり そうーつ
ひるがえり あき またーふゆ 一へとーう 一ふじあ

つーじーの いろ あざーー や か き ぼうゆたかー^一
やーぐーも ゆき かがーー や き せんとあかるー^一

にー つねにともよ むねをひらけば しんあいわ き
くー つねにともよ ちかいかさねて ふみゆくじしゅ

あーふーれれい じょうわーれ ーーら た の ー
のーみーちきよーうどうわーれ ーーら た の ー

poco a poco cresc.

しー あゝいぐさ われらここに せかいのまへに

われらあ りーわ われらあり い ぐさこーう こー

校

歌

作詞 土岐 善磨
作曲 芥川也寸志

はなびら影深く やえざくら咲きわたり
照りそうつづじの色あざやか
春また夏へ
希望ゆたかに

つねに友よ 胸をひらけば
親愛和氣あふれ 礼譲われら楽し

公孫樹は黄葉して 風清くひるがえり
いちょう もみじ

遠富士 秋また冬へ
彩雲 雪かがやき

つねに友よ 誓いかさねて
前途あかるく

踏みゆく自主の道 協同われら楽し
ああ井草 われら

世界の前に ここに
われらあり われらあり 井草高校

在職一覽

平成
41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 元 2 3

前島寿一 飛岡正治 桃原良治 新井鎮夫 清水庫之祐 嶋森 敏 高部 正 滝口輝男

増田 信 千野政長 渡辺 寄喜 向坊和郎 平松利夫 杉山 有 藤本 勤

久 安藤太郎 浜道 彰 江渡大輔 川口久美子 田子雅子

鶴田 亘 菊地広志 林 悅三

小出 光 春日盛男 荒井 整

菊池尚人

渡辺 浩 柳 牧也 高橋誠治

桂子 堀家まり子 藤田 隆

桑幡昌典 橋本 洋介

輝夫 関 勇 浅野 治 結城健三

高野輝子 椿 治子

明 天野さゆり 永倉 薫

植田隆之助 鈴木みち子

一成 住岡明朗 加藤成伸 福田修一

中村 佑二 柳田 学 恩田 誠 長谷川義晃

植村耕司 岩根謙一 三浦 裕

高部訓武 上原 徹 小野昭博

児玉 紀 鈴木政之

菅野徳子 石部武子 加藤晴紀

尾崎里兵 名倉敏生

小池文夫 室岡和彦 島田礼子

吉瀬 勲 宮崎順介

鎌田敏雄 大畠起男 松澤 亮

浜田慎亮

大類 一

桂田和子

久我平吉 小松裕明

常雄 都丸 豊

森 弘安 幾島和子

岩崎英子 平岡珠樹 神田亮二

宮脇 進 滝山常男 游賄英一 高橋公治

武三 小沢省二 渡辺 隆

坂本(合田)美津子 大橋書児

森脇直人 佐野森彦 森本泰三[↑] 長津平二

横沢明翁

三柳将明 渡部正輝 松元 敏雄

教職員

	昭和 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40				
校長	廣瀬政次	杉山文雄	高柳一二	眞田幸男	藤井 茂
教頭	杉山文雄	三橋秀郎	隈 明	宇井 茂	
国語	大久保元	戸村(藤田)静子	小田島哲哉	掛川	
	桑田千代	大澤清男	山本哲夫		
	上原好一	水野正良			
	高原利好	谷 栄一			
	白土ワカ 石川悌二			森田穰二 山田(初山)	
社会		鈴木貞三		吉田	
		大野英雄			
		毛利和夫		白井	
		生野眞直		武林	
	白土ワカ	大隅芳秋			
	杉山文雄	岡垣克己		平井	
数学	三橋秀郎	石川弘之			
	斎藤瑞子				
	藤原カノ	吉川正基		渡辺 優	
		木内 誠			
				小倉義文	
				西野清太郎	
理科	新井英二	古屋(小林)尚子			
	辻忠二郎 宮下博善			若林 覚	
	永島(守邦)かおる	梅木清人	藤波恒郎		
	清水慎一			林	
	中川一夫 ?	遠山(松田)春江		小島立一	
		五味義明		松原保久	
				井上	
保体		山根(小堀)美智子			
	近藤 豊 加藤信明	高橋 博	天野敏雄		
			松島四郎		
			佐渡一郎	竹田美喜夫	

在職一覽

教職員

	昭和 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40		
保育			荒木 豊
芸術 音美		国藤ちか子 青山兵吉	佐藤幹一
家庭	岩泉 義 水谷 糸塚雅子 細谷茂子	小澤芳子 山口よしの	王置
英語	隈 明 大西次丸 鈴木貞三 本庄 寛	深澤栄陸 福島恵美子 三上てつ 柴田祐宏 横田 昭	工藤 岩渕育男 大浦暁生
司書教諭 養護教諭 理科助手			
事務長			世間瀬武雄
主事(事務)	新津保雄 山本萬次 石塚一朔 榛葉三郎 石森三代子 小坂恭子 宮森のぶ子 田中 宏	佐藤房義 山下 保谷(田中)芳江 柏谷和野 高嶋 牧田 豊 谷川徳子 坂上 大井良男 基 喜英	鎌田 山下 柏谷和野 高嶋 田中 山本
主事(司書)			
主事(用務)	角日典明 大森繁子	石森正吉 石森いね 寺田 良邦	
警備		大野栄正 寺田精之	

井草祭の歴史

回数	昭和・西暦	井草祭統一テーマ	記事
	2 5 1950		春に小運動会。走り高跳び・走り幅跳び・野球・卓球・テニス等。 創立10周年記念芸術祭、演劇・音楽・英語・ダンス部その他クラス参加（早大・大隈講堂で）。展覧会、文芸・社会・歴史・美術・ドイツ語・理化・読書部など。体育祭は「興味を主体として」学年別対抗、仮装行列。いずれも10月実施。
	2 6 1951		10月、芸術祭、育英高校ドンボスコ講堂で。音楽・ダンス・演劇部。10月、運動会、職員競技・仮装行列等。学芸会11月。
	2 7 1952		芸術祭、育英高校講堂で。運動会。展覧会・研究発表。いずれも10月。
	2 8 1953		このころ学芸クラブの研究発表会充実。
	2 9 1954		体育祭にスリランカ公使来校、優勝カップを授与する。
	3 0 1955		
	3 1 1956		文化祭前日祭あり。「井草の知的雰囲気の増進」をうたう。講堂を使用して研究発表形式の文化祭もあった。 時期は10月。
1	3 2 1957		従来は個別に行われていた文化祭（展覧会・芸能発表・研究発表）・弁論大会・運動会を統合して「井草祭」とする。10/9～13（この年のみ映画会があった） 10/12～15（以後、大体この時期）
2	3 3 1958		
3	3 4 1959		校舎改築のため規模縮小。予算15万円。展覧会の活性化をねらって優秀クラブに賞を出す。入賞 ①位・理化 ②華道 ③生物 など。
4	3 5 1960		20周年記念で行事が分散、井草祭が2週間におよび、反省事項となる。
5	3 6 1961		文化祭（芸能）の会場を、杉並公会堂に移す。本格的な施設で好評。以後定着。
6	3 7 1962		9/27～30
7	3 8 1963		
8	3 9 1964		このころ、展覧会参加はクラブがほとんどであった。
9	4 0 1965		
10	4 1 1966		スローガン「井草祭を井草生の手で」 井草祭常任委員会発足。名称「展覧会」「文化祭」「弁論大会」「体育祭」「後夜祭（ポンファイアーを含む）」に定着。
11	4 2 1967		
12	4 3 1968	「生まれかわれ井草！」	統一テーマ始まる。
13	4 4 1969	「若者の未来と可能性を求めて」	
14	4 5 1970		フォークダンス、この年のみ。
15	4 6 1971		5月に校内大会を実施したため学校は体育祭の中止を決めたが、生徒の要望で復活。

回数	昭和・西暦	井草祭統一テーマ	記事
1 6	4 7 1972	「井草の力」	
1 7	4 8 1973	「井草の鼓動」	
1 8	4 9 1974	「よりよいものを」 「主役になろう」	この年以降「展覧会」を「展示会」に名称変更か。 文化祭に「芸能部門」「展示部門」の名称。中庭の井草縁日・バザール盛況。
1 9	5 0 1975	「世界に挑戦」「協力」	校内でも芸能関係の発表を始める。
2 0	5 1 1976	「発想の自由と最高の表現」	招待試合の最後か。
2 1	5 2 1977	「井草はかわる」	ゲート製作始まる。中庭の縁日・バザールを制限。パークーとバザールを区別して、バザールを教室に移す。
2 2	5 3 1978	「井草の素顔」	大学入試の関係でこの年以後日程が9月中旬に繰り上げられた。軽音楽関係、このころから増加。
2 3	5 4 1979	「井草 その世界」	展示会テーマ「Image of IGUSA」体育祭「井草に熱い風が吹く」 プログラムにマンガ、イラスト増加。
2 4	5 5 1980	「今 心のままに」	文化祭テーマ「飛躍」 招待試合あり。このころから、クラス演劇増加。クイズ、ゲーム、映画増加。
2 5	5 6 1981	「一人につ」	文化祭、立川市民会館で。
2 6	5 7 1982	「思考転換（ひらめき）」	文化祭、立川市民会館で。台風の襲撃で、展示会が終了時刻を繰り上げた。
2 7	5 8 1983	「各駅停車」	この年だけ、体育祭5月に。この年と翌年は文化祭が練馬文化センターに移る。
2 8	5 9 1984	「革命」	校舎改築のため、体育祭は中央大グラウンド跡地で。臨時学級増のため、10クラスの学年ができる、団分けに影響が出た。
2 9	6 0 1985		体育館にステージ完成し、文化祭は以後学校で。不十分な施設と、暑さが問題となる。テーマの形骸化進み、プログラムにすら記載されないこともしばしば。
3 0	6 1 1986	「祭先端 21世紀の井草を求めて」	予算約300万円。文化祭は「生徒全員に見てもらう」ため、出場団体を減らして二回公演。プログラムは委員がワープロで打った原稿をそのままオフセット印刷に。
3 1	6 2 1987	「IT'S TOUGH 全員が自ら燃える井草祭」	
3 2	6 3 1988	「NOW AND THEM 時代（とき）の壁をのりこえて」	「応援団の練習がきつい」と敬遠され始める。また教師側からも、応援団のための応援団と、あり方や意義について疑問が出される。文化祭では、クラス・有志の演劇が増加。
3 3	6 4 1989	「成虫になろう 昭和をこえて脱皮だ井草」	「成虫」になることより「遊び」が強調されている。クラス演劇を一括して社会科特別教室に移して、「コマ劇場」と名づける。
3 4	2 1990	「遊Can Fly」	テーマが次第に言葉遊びふうに。「5日間思いっきり遊ぼう」と、「遊び」の強調いよいよはっきり。応援団の目的は団の団結のためにと、あり方の是正始まる。
3 5	3 1991	「井草だ！ 祭だ！ フィーバーだ！」	

進 路 資 料

昭和・西暦	進学	就職	その他	進学先 (入学者人数順 上位3校)
20・1945	68	72	43	日本女子美術 7、第二師範 4、大妻女子専門・東京高等栄養 3
21・1946	68	15	15	東京経済専門 8、千代田女子専門 6、共立女子専門 5
22・1947				
23・1948				
24・1949				
25・1950	38	68	21	お茶の水13、東京学芸・東京女子 8
26・1951				東京学芸12、東京女子 8、早大・日本女子大 5

昭和・西暦	進学	就職	その他	進学内訳 (国公 私大 短大 専門 進学先 [上位3校])
27・1952	109	138	41	12 27 27 学芸 8、共立 5、早大・東女 4
28・1953	88	89	92	5 24 2
29・1954				
30・1955	39	76	137	3 24 12
31・1956		84以上		
32・1957	98	89	59	13 85 早大 9、明治 8、中央・共立 5
33・1958	91	115	103	7 84 早大11、明治 8、日大 7
34・1959	82	92	156	5 77 早大10、明治 8、青学 5
35・1960	99	114	107	6 93 18 中央 9、学習院 7、立教 6
36・1961	146	112	64	10 136 早大23、中央16、明治13
37・1962	198	135	145	21 177 早大24、中央15、明治14

昭和・西暦	国公	私大	短大	専門	就職	進学先 (上段=国公立 下段=私大 上位各5校)
38・1963	30	189	13	3	124	早大34、中央29、慶應15、明治・日大・理科・立教12
39・1964	20	257	49	14	104	早大50、中央29、日大26、明治21、立教10
40・1965	34	264	62	15	73	東京農工 5、東京外語・埼玉 4、千葉・水産・信州 2 早大40、中央26、日大22、明治20、慶應19
41・1966	46	251	58	20	95	東京学芸 6、千葉・東京農工 5、東京教育・防衛 4 早大39、日大24、中央20、慶應18、明治14
42・1967	47	264	56	21	80	東京農工 7、東京学芸 6、千葉 5、東京教育 4、一ツ橋 3 早大39、日大25、中央22、慶應15、法政・明治14
43・1968	26	317	65	34	63	学芸 7、農工 5、埼玉・千葉 3、東大・北大・横浜国立等 1 中央31、明治29、早大22、立教21、日大19
44・1969	26	285	78	45	46	東京学芸・東京農工 3、埼玉・東京工業・電通 2 法政25、明治・中央22、早大19、立教・上智・成蹊12
45・1970	31	280	63	21	31	東京学芸 9、東京教育・千葉 3、東京芸術・横浜国立 2 立教25、明治24、早大23、青学20、中央18
46・1971	61	295	60	25	17	東京学芸 8、農工・埼玉・都立・横浜市立 5、東大・教育 4 早大37、慶應31、中央21、日大19、青学19
47・1972	51	379	62	19	18	東京学芸12、千葉 7、東京農工 6、東京教育・埼玉 5 早大30、中央27、上智・明治・理科22
48・1973	58	430	85	18	6	東京学芸・都立 8、千葉・東京農工・埼玉・東京教育 5 早大42、青学30、日大29、中央28、明治24

昭和・西暦	国公	私大	短大	専門	就職	進学先（上段=国公立 下段=私大 上位各5校）
49・1974	92	486	90	19	5	東京学芸18、千葉10、農工9、東京工業6、埼玉・都立5 早大47、日大39、中央31、理科28、慶應25
50・1975	95	398	55	8	1	東京学芸20、埼玉11、千葉・電通9、筑波7 中央40、早大38、青学26、理科23、明治・立教・日大20
51・1976	67	435	66	13	2	千葉13、東京学芸12、電通9、埼玉7、東京農工6 早大49、中央39、立教29、青学23、日大22
52・1977	78	534	119	27	2	東京学芸10、都立8、千葉・埼玉7、電通・筑波4 早大・中央・日大39、成蹊37、明治・青山30
53・1978	60	512	86	28	4	東京学芸13、都立・千葉6、東京農工5、筑波4 日大48、明治37、中央35、早大32、青学22
54・1979	82	554	105	22	2	東京学芸15、埼玉12、千葉・都立8、横浜国立5 日大58、理科47、早大31、青学30、中央・武藏26
55・1980	76	588	122	31	4	埼玉12、東京学芸10、都立8、千葉6、東京農工・電通5 早大49、日大44、明治43、中央・青学30
56・1981	60	544	91	19	7	埼玉12、千葉10、都立6、横浜国立・高崎経4 明治42、早大38、中央36、日大35、理科25
57・1982	60	507	82	36	1	東京学芸7、外語・埼玉5、都立4、千葉・電通・農工3 日大38、理科35、明治34、早大32、法政27
58・1983	37	544	124	30	7	横浜国立4、千葉・埼玉・東京学芸・電通・信州3 中央・日大40、早大37、理科30、法政29
59・1984	40	527	82	27	5	千葉8、東京農工6、電通・埼玉4、都立3 明治48、早大38、日大33、中央27、理科24
60・1985	30	506	125	34	8	埼玉4、千葉・東京学芸・東京水産・都立・横浜国立2 日大45、明治39、早大32、中央29、法政20
61・1986	19	424	96	59	10	東京学芸4、都立2、東北・北大・東京芸術等1 日大40、明治25、法政22、中央19、東洋18
62・1987	19	458	164	53	7	千葉4、埼玉3、筑波・都立・東京外語・電通等1 日大46、東洋26、中央25、明治23、法政・専修17
63・1988	20	512	144	68	5	千葉・東京学芸・都立・東京農工2 日大40、東洋37、法政25、駒沢23、専修22
64・1989	18	419	121	68	13	東京学芸3、都立・金沢2、京都・東京芸術等1 東洋35、日大31、専修19、東京理科15・中央14
平2・1990 成	8	393	144	62	6	千葉2、東京学芸・都立・電通・信州等1 日大31、東洋21、中央19、法政17、成蹊15
3・1991	10	497	147	62	16	都立・横浜市立2、北大・東京外語・東京農工等1 日大30、東洋28、駒沢20、専修・中央・明治17、早大13

*「平成3」は、「平成3年4月大学入学」の意味である。

*数字は、初期は実際の入学者の実数、以後は合格者の延べ数（浪人含む）である。

*「その他」のうち、初期には家庭に入った者が相当数あったと思われる。

*大学名のうち、スペースの関係で「東京」を省いた場合がある。（例えば、「東京農工」を単に「農工」とした場合がある）

*複数の資料が矛盾する場合は、より確度が高いと推定される資料（例えば、より遅い時期に編集された資料）に従った。

*空欄は、資料を欠いている場合である。

卒業生徒数

	回	年	総 数	男	女		回	年	総 数	男	女
高等女学校	1	S 20	183		183		20	43	464	240	224
	2	21	99		99		21	44	446	223	223
	3	22	68		68		22	45	447	223	224
	4	23	133		133		23	46	436	219	217
	5	24	70		70		24	47	429	214	215
	計		553		553		25	48	429	216	213
	1	24	25		25		26	49	421	207	214
	2	25	88		88		27	50	405	205	200
	3	26	231		231		28	51	399	197	202
	4	27	288		288		29	52	407	203	204
	5	28	256	84	172		30	53	405	198	207
	6	29	248	96	152		31	54	402	177	225
	7	30	252	79	173		32	55	406	203	203
	8	31	254	77	177		33	56	405	205	200
	9	32	246	73	173		34	57	401	206	195
	10	33	309	135	174		35	58	418	211	207
	11	34	330	157	178		36	59	429	219	210
	12	35	320	155	165		37	60	400	198	202
	13	36	322	162	160		38	61	435	222	213
	14	37	372	176	196		39	62	473	241	232
	15	38	372	191	181		40	63	429	210	219
	16	39	370	188	182		41	H 1	437	224	213
	17	40	367	189	178		42	H 2	475	241	234
	18	41	523	272	251		43	H 3	431	217	214
	19	42	470	237	233		計		15,872	7,390	8,482

井草高校の創立五十周年を祝して

定時制同窓会会長 井 口 茂

親愛和氣あふれ——旧教職員のことば

谷田 関 福 堀 大 宮 田 清
川 中 口 田 部 浦 回 中 水
圭 典 晓 光 晓 福 房 洋
司 子 子 薫 夫 生 吉 子 三

青春の灯は消えない——卒業生のことば

鈴佐 小田 大
木藤 泉 中野
克一 富史郎 和
巳進 男子 子

資料

- | | | | | |
|---------|------------------------------|----------------|----------|-------|
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 在職教職員一覧 | お別れにあたって（元井草高等学校校長
清水庫之祐） | あいさつ（東京都教育委員会） | 定時制課程の歩み | 卒業生徒数 |

井草高校の創立五十周年を祝して

定時制同窓会会長 井口 茂

ここに、都立井草高等学校創立五十周年を迎えるに当たり、ひとことお祝いのことばを申し上げます。

思うに、創立当時の関係各位の新しい学校づくりにかけた情熱と地域の方々の新生井草にかけた期待は大きなものがあつたことと存じます。そのような中で、日々の教育活動は師弟の信頼の絆のうえに確実な成果を挙げてこられたことでしょう。だが、太平洋戦争という歴史の流れによって、当時、本校で学んでおられた方々には厳しい試練の時を過ごされたことでしょう。そのご苦労はいかばかりかと拝察いたす次第です。やがて、終戦を迎えたことが数多くあつたと思ひます。先輩の話として私が承知しているものでは、全・定が協力して、校内に同窓会館や体育館をつくるための資金集めをしたことなどがあります。

昭和二十三年には新制度による井草高等学校となりました。丁度、その時が私たちが学んだ定時制課程が本校に併設された記念すべき時でもありました。この時の状況は、戦後の混乱や物不足という不自由な生活をする中

での学習であったことと思います。当時の先輩たちは、はだか電球のもとで、昼間働いた体に鞭打って頑張つておられたことと思います。名簿を見ますと、当時の第一期生は八名でのスタートのようでした。しかし、その様な状況でも学校生活は、全日制の生徒と定期制の生徒がお互いに、認め合い、お互いの教育を尊重し合い、教育活動を十分に行うことによって、充実した学校生活を送ることができたものと思います。

このような信頼関係の中から、井草高等学校においては全日制と定時制とが協力して事に当たったということが数多くあつたと思ひます。先輩の話として私が承知しているものでは、全・定が協力して、校内に同窓会館に入つて右側にあるのがその記念碑です。碑文には、定時制に学んだ者の心を「ああ井草我らが青春の灯 ここに燃ゆ」と詠つてあります。この碑文をつくるに際し、関係者の間に出了意見は、定時制が無くなつたいま、碑が全日制の生徒の皆さんにも親しんでいただ

果が演劇活動に現れるようになり、関東甲信越地区大会に全日制に伍して参加し、本校定期制の作品が優勝するという、まさに定時制黄金時代を迎えることになりました。

しかし、時代の流れとともに、定時制に学ぶ生徒数が減少する中で、東京都教育委員会

の定時制高校の適正配置によって、昭和五十九年三月をもって三十六年の歴史ある定時制課程を閉じることになりました。当時の校長先生、教頭先生はじめ教職員、生徒はじめ関係者の思いは、いかばかりかと、その当時のことを思うと胸が痛みます。

このような厳しい状況の中で、同窓会としては、寂しさを乗り越え、私たち、定時制に学んだ者の同窓会は永遠であるとの考えに立ち、心の支えとして記念碑をつくることを決め、会員に特別会費徴収を呼び掛けました。そして、昭和六十年三月の第三日曜日に「いぐさ会」総会を開催し、二代校長杉山文雄先生、第十一代校長鳩森敏先生の奥様はじめ旧教職員、同窓会会員多数の参加によって盛大に記念碑除幕式を行いました。いま、校門を入つて右側にあるのがその記念碑です。碑文

には、定時制に学んだ者の心を「ああ井草我らが青春の灯 ここに燃ゆ」と詠つてあります。この碑文をつくるに際し、関係者の間に出了意見は、定時制が無くなつたいま、碑が全日制の生徒の皆さんにも親しんでいただ

けるものでなければならぬという意見がありました。いまの記念碑にはその思いが込められております。その後の様子を伺いますと、皆さんに親しんでいただいているとのお話を聞くにつけ、嬉しく思う次第です。

私達の同窓会には新たな会員の新規加入は

ありませんが、井草で学んだ者として母校への思いを胸に、毎年三月の第三日曜日に集い、恩師を偲んで語り合っています。

全日制で学ぶ生徒の皆さんには、定時制のようなことはありません。五十周年という記念すべき節目に当たり、これまでの歴史に思

親愛和氣あふれ

旧教職員のことば

閉校記念誌

「花びら影ふかく」に想つ

最後の教頭 清水洋三

井草高校定時制課程が廃止されてもう七年も経った。全日制五十周年にあたり定時制三十五年間を一度ふり返りたいと思う

井草定時制のよさは、閉校記念誌「花びら影ふかく」にそのすべてが残されており、

(或は全日制の五十八年度の研究紀要に)今も手にすると多くのことがありありと目に浮かんでくる。定時制の「ともしび」の下に集まり散じた多くの生徒や先生や事務や給食や

司書職員それぞれの心にも熱いものが甦つてくると思う。

全日制だけになった現在の井草の教職員の皆さんにも、五十周年に当たって、ぜひご一読いたゞいて、正門近くの築山の定時制記念碑の由来と共に、在りし日の定時制にしばし想いを馳せて頂きたいものである。中学卒業生の激減期に入り学級減にとゞまらず全日制の統合や定時制の第二次統廃合が進められるかも知れない現在、きっと役立つはずとも自分が負している。

記念誌「花びら影ふかく」には定時制教育のロマンが数多く集められている。敗戦後間もない創立の頃の生徒の真剣な姿やスポーツ・演劇・観月祭・運動会・定通体育祭・芸術祭

に一生懸命生きた大勢の生徒の姿とともに職員の暖かい励ましや願いも十分読みとつて頂きたいものである。井草の定時制から育つていったような多様な生徒達の予備軍は現在も多いはずであるが、今の大規模化した定時制でも手厚く指導されているのだろうか、気がかりである。困難校にこそベテランの配置が望ましいのに定時制には少なく、多様なニーズに合わせた教育指導も充実させられないのではないか。全日制からの脱落者にかけ回され本来の勤労青少年や経済困難な生徒への教育あるいは情緒や体に障害のある生徒、過年度の中年・壮年、樺太や中国よりの引揚生徒、朝鮮学校卒業生等への行き届いた教育など形骸化してしまっているのではないだろうか。

一度しかない生徒達の青春や、生活の合間に貴重な定時制の四年間の充実に教師はどれだけのことをしているだろうか。職業としてルーチン化し、マンネリや繰返しに終わつては厳しい生活を生きる生徒に悪いと、教員同志で頑張るものがあった。教育は愛や信頼にいをはせ、二十一世紀を支える逞しい方々になられるよう、充実した学校生活を過ごして下さい。そして、井草高等学校がこれまでの伝統の上に、更なる発展をされますことをご期待申し上げ、お祝いのことばといたします。

(七期)

より励ましなど無形の経過や積上げが中心で、単なる評価や評定或は統計や数字や規定規定にふり回されではなくることなど定時制には学ぶべき教育の原点が数多くあった。

当初十校、実施は九校となつたあの定時制統廃合、井草定の廢止は何の為だったのだろうか、と思うことがある。学年二学級以上の大規模化、単独校、独立校など定時制の改変は全日制ともからめてどんな高校教育を予想して進められていくのか。単なる費用対効果とか行政の論理ではなく教育論として、教育行政も研究所も、現場の教師も管理職も職員団体も考え続けてほしいと思う。

田 中 房 子

井草高校の創立五十周年、おめでとうござります。五十年前の井草高校周辺は、校舎はどうでしたでしょうか。覚えている方は、そぞろ思い起こして見て下さい。都心からどんどんと開発が進んで、今や井草高校を中心として瀟洒な街となりました。私の在職していた昭和二十五年頃は、学校前は広い畑に農家が点在していました。運動場はどこまでが区切りとも見えぬ広野につづいていました。その中に建つ木造の校舎は、すでに相当いたんでいました。定時制の授業の終わるのは九時、下校の駅までの道は真暗で、お互の顔

も見えません。そんな周囲の状況にひきかえ、仕事を終わってからかけつける生徒さんの顔は明るく、勉強も一生懸命、厚い友情に心は燃え、教師との交流は暖かいものでした。極度に限られた在校時間にもかかわらず、日頃の練習に、諸準備にも苦心準備をしながら、開かれた文化祭も運動会も誠に立派なものでした。全日制より長い四年間を全うするのは容易ではありません。体力的にも気力的にも続かず、途中で挫折する人も多く、それだけに卒業式の感激は大変なものでした。その頃の卒業生は早や職場でも定年を迎える頃です。多感な青春を井草高校で学んだことは、職場でも家庭でも、^{強靭な支柱となつたのではな}いでしょう。

井草高校の創立から五十年、生徒さんの気質も随分変わったことでしょう。今や時代は人間の心のあり方の再検討をせまっています。創立百年へと歩みはじめる井草高校では、豊かな、あたたかい心を持ちながら、根性のあらんと開発が進んで、今や井草高校を中心として瀟洒な街となりました。私の在職して

宮 回 福 吉

公立高校は、義務教育の小・中学校の延長として、希望者は全員入学させるべきであるというのが、公平を教育信条とする私の考え方であります。

点数主義では測りきれないのが人間で、得られた数値も刻々変化してゆくものです。過去の学習成績のみで人を評価しきつてしまわないよう心掛けて井草時代を過ごしました。そのせいか一人ひとりの生徒が皆輝いていい子に見え、先生方についても桃原・新井両校長先生、戸次、清水両教頭先生など懐の深い先生方にお世話になれて幸せだったと思っています。

大 浦 晓 生

井草高校の定時制にいたのは一九六〇年度一度だけだったが、思い出は深い。ちょうど日本安保条約の改定をめぐって日本じゅうが大揺れに揺れていた時代で、六〇年六月には安保反対を叫ぶ数十万人の市民たちが連日国会周辺を取り巻き、戦車こそ出なかつたがこれを力でおさえようとする機動隊の暴行によって、多数の負傷者を出した。東大生樺美智子さんという死者まで出た。私も昼はデモに参加し、夜はその熱情のさめやらぬまま授業にかけつけて、安保のことを生徒たちと話しあつたりした。英語の授業で、安保問題を扱つた『シカゴ・ヘラルド・トリビューン』紙をいっしょに読んだこともある。当時の生徒はこうした時事問題にも関心が深く、まじめでよく勉強した。

その年の九月、結婚した。相手は旧姓小島わか、井草高校定時制の出身で、荻窪病院に勤めており、私が全日制に勤めていたころ修

学旅行の看護婦として付き添ってきたのがきっかけとなつた。私の担任するクラスの生徒が軽い病気になり、彼女とふたり、一行からすこし遅れてその子の看病をしたことが、心のふれあいを深めた。いまは子どもが四人。人生については彼女から教えられることのほうがあるかに多い。長女佳代は私が井草高校定時制にいたころの年齢になっているが、フォトジャーナリストとしてアフリカなどをかけまわっている。

学間に専念するため井草高校定時制をやめあと、一年あまりして私は群馬大学の講師として前橋に来た。一九六八年からは中央大学文学部に転勤し、現在も勤めてアメリカ文学を専攻しているが、ずっと前橋に住んで東京にかよっている。しかし夜とは縁が深く、中大が八王子に移転して家が遠いため毎週大学内に一泊することもある、ここ十年あまりずっと夜間部の担任をつとめている。夜間部の学生は苦労人が多く、勉学の姿勢もまじめだ。入学のとき、夜間部は食事が不規則になりがちだから気をつけること、昼間の時間を活用して生活全体にリズムをつけること、などと注意しているが、井草の定時制にいたときの経験がこんな形で役に立っていると

くづく思う。定年まであと十年、ひきつづき夜間部の担任としてがんばりたい。

堀 部 光 夫

今年は母校創立五十周年を迎える雪の功を積んで卒業せられた皆さんと共に心から御祝い申上げます。

私の教師生活も昭和二十四年本校に転任、大半を楽しく過ごさせて戴きました。まだ戦後荒廃から立ち直らず混乱した時代で今でも瞼を閉じると当時のことが彷彿として次から次へと浮かんで参ります。今日では校舎も立派に建替えられ見違えるように立派になりました。私共の頃は平屋建のガタガタ校舎、草創期で生徒も少なく教室と教室の通路を間仕切りして、三坪ほどの狭い所が職員室でした。毎夜の停電、腹はペコペコ……教室に一灯しかない石油ランプもチラチラして殆んど役に立らず、暗闇同然の教室で生徒の顔も見えず、それでも悪戦苦闘の授業が繰返された訳です。

只救いは生徒が困難に打勝ち皆頑張ったことです。勉学にいそしみ長い間気持ちよく過ごさせていたことが救いでした。

苦難をのりこえ卒業生からの便りでは夫々社会的地位を得られ各界の指導者として活躍されておることは何より嬉しいことです。又春ともなれば桜が咲き皆さんを心から迎

えてくれるでしょう。

色々思い出がありますが、紙面も限られて居りますので、この辺で省略します。

福 田 薫

私は昭和三十二年から昭和四十五年まで勤務させていただきました。南側に平屋建て、中庭を隔てて、北側に二階建ての校舎がありました。これは当時の平均的の学校建築でしたが一ヶ所極めて珍しい建物がありました。それは南北の校舎をつなぐ中央の渡り廊下の脇に、一戸建て六畳一間位の建物があり、それが定時制の主事室でした。それが本校が火災で焼けるまで私はそのチマリした主事室で仕事をしていました。その部屋の事を思うと胸がいっぱいになる程なつかしくなります。

当時、日本は高度成長の始まるちょっと前にしたから、私の仕事は、どこかの会社かお店かを、不當にクビになつた生徒の食う場所を探しに職安訪問する事でした。それも昭和三十五、六年の頃から景気も上向いて来てそんな事もなくなりました。自然と生徒達の顔も明るくなりました。

前任校からやっていた演劇指導も当校に来てから、気合がはいって来た様に感じられました。それは演劇に指導力のある、そしてきっとも演劇好きの伊藤先生がいたし、演劇

好きの生徒がいたからです。着任した三十二

年に都の定時制芸術祭に私の作品「白い部屋」を上演し優勝杯を獲得しました。それがきっかけで、以後七、八回都の定時制で優勝しました。そこで、都では全日制の演劇の大会もあるのでこれに出て、定時制だって、全日制に負けないぞと生徒達に自信をつけさせてやりたいと思いました。然しどうでもならないが、関東大会、全国大会までとなると、経済的負担が大変で、定時制の貧乏世帯ではとても無理で出場できないなと思いました。所が昭和三十九年の要項を見たら、関東大会も全国大会も東京だというので出場を決意しました。作品は私の作品で、「うちのナース達」という看護婦物でした。荻窪病院勤務の人や他の病院勤務の人達から資料を貰った物でした。これが都で優勝し、関東で優勝し、全国大会で二位だったので、大いにみんな気をよくしました。私の最大の思い出というと、こんなところでしょうか。

この二、三年創立五十周年という学校の記念行事をする学校が多い。という事は昭和十四年十五年と都立の高校が方々に建てられたからだ。軍がのさばり出した時機だから、軍は戦闘要員としての後継部隊の養成も或いは意識していたかもしれない。各男子校には陸軍将校を配属させ、教練を強化した。純真無垢な若者に集団的殺人訓練をした訳である。

それは五十年の昔である。

五十年という時間は遙かな遙かな昔と思うかもしれないが、過ぎてしまえば、アッという間の出来事だ。その間に日本は大変な時期を経過して来た。第二次世界戦争の渦中に巻きこまれ、世界の中の悪玉として過ごして来た。それは、軍部が悪かったからだ、政府がダメだったからだと言うかも知れないが、私は国民にも重大な責任があると思うのだ。それは昔からの権力に対する盲従の身の処し方がいけなかつたと思うのだ。この痛い教訓から、今後は絶対に権力に盲従しない、是々非々の態度を明確にして、この国をよくしたいと念願すべきだと私は思う。

関口暁子

都立墨田川高校の定時制から井草高校の定期制へ私が異動して来たのは、今から二十一年前のことでした。その時面接して下さった福田先生が、「定時制で長く続けて下さい」とおっしゃつたことは忘れられません。それから九年間、二度の担任を持って勤めたので一応お約束は果たせたと思いますが、転任してから一年後に定時制統廃合の嵐が吹きすぎ、生徒や父兄も加わっての反対運動にもかかわらず、廃校と決まつたことは、残念でなりません。

井草の定時制には、全日制と合同の文化祭のほかに、観月祭という独特の行事がありました。生徒達が創意工夫をこらして作った燈籠を飾つてキャンプファイヤーを囲んでのフォークダンス。葛谷先生が一生懸命指導して下さったので、この時習つたフォークダンスは今まで覚えてます。演劇部の活動が盛んだったこと、レシティイション（英語暗唱）コンクールで入賞したことなども忘れられません。高校演劇の脚本家としても有名な福田先生が自ら台本をお書きになり、演出までして下さったので、井草高校の演劇部は毎年コンクールに出で優秀な成績を收めました。私の担任していた生徒にも演劇部員がおり、福田先生を大変尊敬しております。清水洋三先生が教頭になられてからもその伝統をひきつがれ、全校生徒の出演する芝居を苦心なさつて作られ全都被定時制の文化祭で上演し、敢闘賞を獲得したことも、なつかしく思い出されます。

レシティイションコンクールでは、初めて出場した佐藤茂樹君（現在、桜金造という名で映画やテレビで見ています。）が優勝し、翌年度も石破登志子さんが上位入賞するなど、がんばりました。真冬の夜十時すぎまで何日間も練習させた甲斐があつたと、今でもうれしい思い出です。

二十二回生の修学旅行では北海道へ行き、ガイドさんをからかつた生徒がいて恥をかき



定時制 初代校長 杉山文雄先生と閉校時の校長 清水庫之祐先生を囲んで

ました。二十七回生の修学旅行では北陸に行き、小京都と言われる金沢の町や輪島の朝市を楽しみました。二十八回生では長崎に行き、その時作った「ザザエさんと十三人の仲間たち」というしおりは、今でも大事に取ってあります。「ザザエさん」とは担任した生徒が私につけたニックネームでした。

小規模校とは言え、優秀な人材が沢山育つた井草高校定時制は、私自身にとっても貴重な経験をたくさん授けてくれた教育の場だったのだと、教員生活二十五年の今、しみじみと思つております。

田中(大沼)典子

井草高校は、私の定時制勤務の最後の学校であった。全日制勤務に替わった当初は、あの、夕方、家を出て、夜帰る生活の大変さ(生徒はもっと大変だった)がつくづく身に沁みていたものだが、全日制勤務八年目の今は、何故か、定時制時代をなつかしく思い返している。

学校は今、多難である。殺伐としたことを目にし、耳にするにつれ、あの、定時制時代のぬくもりがよみがえってきている。気持ちだけはあっても、現実の解決・打開を知らないという点では、私も生徒と同じであった。いや、生徒に教えられることの方が、むしろ

多かった。そして思い返すのは、夜の教室での、あの目の輝きであり、仕事をして夜勉強する生活に慣れているから卒業してもずっと勉強をしていきたい、という言葉である。知識や見かけよりも、本質を鋭く見抜く目を持つた生徒達である。今、あまりにも見かけが大事にされている中に過ぎてゐる者にとって、あの時代は、まさにかけがえのない時であった。

いろいろな出来事があり、そして迎えた卒業式は、とても感動的なものであつた。まさに、我が子の卒業式に匹敵するものである。それは、一人一人の生活や精神の軌跡に、私のようななばやつとした教員も係わり、見てきた結果である。答辞、送辞の言葉に、涙があふれそうになつたのも、定時制の卒業式のみである。

何も出来なかつた定時制時代。しかし、私の教員としての原点である。

何といっても定時制がなくなつたことは残念です。廃校反対闘争のデモ行進の時のゼッケン、今も我が家にあります。

谷川圭司

私にとって井草高校の思い出と言えば、とてもつらかったことがいくつもあり、わずかに楽しかった思い出は、それらに覆い包まれ

てしまっていました。その原因は自分自身が

悪かったことにあるのでしょうか、そうだ

とすれば、私が井草に来るまえにいた学校

(北多摩・定)の先生たちやかなりの生徒た

ちが、このようなだめな私を愛してくれたこ

とを思えば、いまでも納得いかないことが多

過ぎるのです。こんなことを言うと、いざさ

会会員の皆さんすなわち卒業生の方々には大

変申し訳ないのですが、先生たちとの仲がと

ても悪かったとしか思えません。

「我らに罪を犯す者を我らが赦しますよう

に我らの罪を赦してください。」

このことばの『我ら』を『私』に置き換え、

心の底からそう言えるようになることに努力

しています。

「人間にとつていしばんつらいことは、必

要とされないことです。」

最後に、とても大切なことを教えてくれた

齊藤司君(三二回)に感謝し、相変わらずダ

メな人間である私を、現在とりまいているひ

とたちに私のよく犯すあやまちを赦されなが

ら、私は楽しく元気に生きていることを報告

します。

「井草なんてなくなつて良かつたんだ」私

のこの思いが私の心中から早く消えること

を、祈ります。

青春の灯は消えない ことば

卒業生の

なくなる迄やっていた事、文化祭では初めて舞台で演劇をしあげては演技賞を戴く等、数

しれぬ思い出を作つて参りました。あと修学旅行では関西に行きました。着いたとたん病気になり病院さがし、先生にも大変迷惑をおかけして申し訳ない限りでした。

各科担当の先生方も働きながら学ぶ私たち

の気持ちを大変理解して下さり、人生相談に

のつて下さったり激励もして下さったり、いつも親の様な接し方をして居りました。

それがとても楽しく、体育祭の頃は登校が楽しみで夕日の沈みゆく時バレー・ボールが見え

よく各教室に出入りしたものでした。

働き乍ら学ぶ同志なのでわがままな人もなく常に助け合つた学校生活が現在の生活に生きて、何かと子供達に話をする機会が持てゝ役に立つて居ります。

つらい思い出は何も浮かびません。楽しい日々であった事のみなつかしく、あの四年間が青春の最も大切な時であつたと今つくづくと思い出します。改めて先生方への感謝とお礼を申し上げ、又級友の皆様の御多幸を祈つて参ります。
(六期)

田中一男

創立五十周年おめでとうございます。私は昭和二十九年に入学致しましたが、当時は不況の最中であり大企業へ就職するのも大変な時期がありました。そうした世相ですから定

時制の生徒も多く入学した時は教室はスシ詰めの状態でした。校舎は木造平屋建で、廊下は所々に穴があいていたり窓ガラスの割れた部分は紙テープで補修されたり、冬季はストーブを焚いても隙間風が入って来たり、今では考えられない状況でした。此の様な厳しい環境の中で殆んどの人が卒業式に臨んだ時は、涙が出るほどうれしかった事を記憶しています。

又、山本芳夫先生の熱心な御指導のお陰で野球部が東京都大会で大活躍出来たのも、懐かしい思い出となっています。（八期）

小泉富史郎

私が一年生の十六才の時、第四期生を送る卒業式当日、卒業生代表として答辞をのべた



私が一年生の十六才の時、第四期生を送る卒業式当日、卒業生代表として答辞をのべた

程閉校記念誌、三十六年間の想い出」の中に「私の井草」と題した先生の文章がありました。『節分が近づきますとお顔

を知っている八回生までの名簿のお一人ひとりお幸せに、お幸せにと学校当時の顔を思い浮かべつつ一枚一枚の人物に書き記し神様に祈りを捧げています』

という一文を読んで私は涙が出了しました。ほんの少しの出会いだったのに、こんなに長い間、私は観てもらっていたのかと胸が打たれたのです。本当の神様に会つた氣さえしたのです。

女性のことばの中に『学業をやむなく中断しなければならなかつたり、学業につきたくとも学ぶことのできない友のいる中で、四年間の学校生活ができ、ここに卒業式を迎えることができたことは大変に幸せなことだと思います。』と

いう主旨のことが言わされました。私はこのことばに感動を受けました。

入学してからちょうど一年間、仕事と通

学のくり返しで、自分だけの頑張りを思つて、いた私に、周囲の方々への気配りと、なるほど今の自分は仕事と通学ができるめぐまれた

私が井草高校を卒業してから、早二十六年の月日が経ち、平成二年一月には、私達に

友達のように接して下さった担任の渡部恒男先生が心臓病で残念ながら他界されました。

私の井草高校在学中の想い出は、職員室への自由な出入りができ、給食室へ行つて、おばさんとお喋りをしたりと、学校そのものが少人数だったこともあり、とても家庭的な学校だったということです。又、観月祭という井草高校独特の行事もありました。私たちは色々な灯籠を作りましたが、中でも『月』を作つて優勝した時のことです。今でも鮮明に思い出することができます。又、演劇部の小道具等を協力して作った事、その演劇部が色々な大会に出場して優秀な成績を収めた事、他にも文化祭や全校遠足など色々と思ひ出は尽きません。

過ぎ去った今までにはいろいろなことがありますでしたが、本当に私は周囲のめぐり合せに支えられてもらつたと思えることがあります。きっとこの時もこのお祈りのお陰とも思ったのです。

（八期）

佐藤進

私は井草の名を高めたことは何もありますせんが、井草は今も私を支えてくれています。

井草高校定時制が無くなってしまったのはとても残念ですが、いざ会が末長く続く事を祈っています。

(十五期)

私にとって、井草高校在学中は青春時代そ

資料1 卒業生徒数

計	女	男	昭和	回
8	8	0	25年度	第1回
11	10	1	26 "	2
19	7	12	27 "	3
33	23	10	28 "	4
34	18	16	29 "	5
46	23	23	30 "	6
47	25	22	31 "	7
50	26	24	32 "	8
43	28	15	33 "	9
49	25	24	34 "	10
57	32	25	35 "	11
49	24	25	36 "	12
49	30	19	37 "	13
49	20	29	38 "	14
79	55	24	39 "	15
38	15	23	40 "	16
39	21	18	41 "	17
40	19	21	42 "	18
41	18	23	43 "	19
33	12	21	44 "	20
34	15	19	45 "	21
29	10	19	46 "	22
25	8	17	47 "	23
13	10	3	48 "	24
28	10	18	49 "	25
25	10	15	50 "	26
19	4	15	51 "	27
15	7	8	52 "	28
24	9	15	53 "	29
14	9	5	54 "	30
18	10	8	55 "	31
21	6	15	56 "	32
28	11	17	57 "	33
21	5	16	58 "	34
1128	563	565	合計	

のものがありました。と言っても、三〇才に手が届こうという時の一年でしたので、他の人からみればかなり遅い青春であったと思います。それでも当時は私より先輩が何人もいました。勉強よりも人間関係・社会医学を学び、学校内では行事や課外授業の中で楽しさを感じました。月日の流れの中で、定時制がなく

なり、校舎がかわり、周辺の状況が変化していく中に一抹の寂しさを感じます。しかし心中には井草の灯がいつまでも点り続けています。

(二十九期)

資料2 定時制課程の歩み

- 昭和23. 3. 31 東京都立井草新制高等学校に定時制課程設置せられる。校長 杉山文雄
- 昭和23. 5. 1 東京都立井草新制高等学校教諭 広木富之介 定時制課程主事を命ぜられる。
- 昭和23. 5. 31 開校式並に入学式
- 昭和24. 12. 学友雑誌「とも志び」発刊
- 昭和27. 7. 31 主事 広木富之介退職
- 昭和27. 8. 1 都立井草高等学校教諭 三橋秀郎 定時制課程主事を命ぜられる。
- 昭和27. 10. 1 杉山文雄 都立忍岡高等学校長に転補。都立城北高等学校校長 高柳一二、学校長に補せられる。
- 昭和29. 定通芸術祭都大会、関東大会「演劇部門」で優勝
- 昭和30. 3. 10 体育館兼講堂竣工 605m²
- 昭和30. 9. 30 校長 高柳一二 退職。都立多摩高等学校長 真田幸男 校長に補せられる。
- 昭和32. 5. 9 主事 三橋秀郎 都立板橋高等学校へ転任。都立武蔵丘高等学校教諭 福田薰 定時制課程主事を命ぜられる。
- 昭和32・33・34・35年 定通「演劇部門」芸術祭東京大会で4年連続優勝
- 昭和33 観月祭始まる
- 昭和35. 7. 1 本館竣工（図書室を含む）1,653 m² 職員室移転
- 昭和36. 4. 1 真田幸男 都立立川高等学校長に転補、教育庁より藤井茂 校長に補せられる。
- 昭和40. 4. 1 藤井茂 都立竹台高等学校長に転補、都立昭和高等学校長 前島寿一 校長に補せられる。
- 昭和40. コンクール都大会・関東大会で優勝。文部大臣賞受賞
- 昭和41. 10. 10 からまつ山荘竣工
- 昭和42. 3. 30 給食調理室 100m²竣工
- 昭和42. 6. 1 完全給食実施
- 昭和43. 4. 1 校庭投光器 6基設置
- 昭和44. 4. 1 前島寿一 退職。都立小山台高等学校教頭 飛岡正治 校長に補せられる。
- 昭和45. 3. 31 主事 福田薰 退職。
- 昭和46. 4. 1 都立八丈島高等学校主事 戸次重雄 主事を命ぜられる。
- 昭和48. 4. 1 飛岡正治 都立南多摩高等学校長に転補。都立南多摩高等学校教頭 桃原良治 校長に補せられる。
- 昭和49. 9. 1 戸次重雄 定時制教頭に補せられる（職名変更）
- 昭和49. 「いぐさ会」結成発足 「いぐさ会報」発刊
- 昭和49. 11. 1 鉄筋体育館竣工
- 昭和51. 4. 1 定時制教頭 戸次重雄 都立深川商業高等学校に転補
- 昭和51. 4. 1 都立荻窪高等学校教諭 清水洋三 定時制教頭を命ぜられる。
- 昭和52. 3. 31 桃原良治 都立目黒高等学校長に転補、東京都教育庁より新井鎮夫 校長に補せられる。
- 昭和53. 都高校放送教育研究会公開授業
- 昭和54. 6. 22 新井鎮夫 校長退職、教頭渡辺寄喜 校長代理を命ぜられる。
- 昭和54. 7. 1 都立久留米西高等学校教頭 渡辺久男、学校長に補せられる。
- 昭和54. 7. 12 渡辺久男学校長死去。教頭渡辺寄喜 校長代理を命ぜられる。
- 昭和54. 8. 1 都立五日市高等学校教頭 清水庫之祐 学校長に補せられる。
- 昭和56. 1. 16 昭和56年度第1学年生徒の募集停止決定せられる。
- 昭和59. 3. 18 閉校式
- 昭和59. 3. 31 東京都立井草高等学校定時制課程廃止せられる。
- 昭和60. 3 記念碑「ああ井草 われらが青春の灯 ここに燃ゆ」建立

資料3 あいさつ

一 定時制課程を閉じるにあたつて

本日ここに、本校の定時制課程がその歴史を閉じるにあたり東京都教育委員会として一言ごあいさつを申し上げます。

都立高等学校の定時制課程は、昭和二十三年に戦後の教育改革の一環として発足し、それ以来今日にいたるまで、多数の有為な人材を育成して社会に送り出してきました。

教育の機会均等の理念のもとに、主として勤労青少年の後期中等教育に重要な役割を果たしてきた定時制教育も、近年社会情勢の変化に伴って、生徒数の大幅な減少という事態に直面し、様々な問題も生じてまいりました。そのため、東京都教育委員会は、東京都の定時制教育の在り方やその充実・振興策について都立高校整備委員会や都立学校定時制・通信制教育研究協議会で検討を重ねてまいりました。

その結果、諸問題を解決し定時制教育の一層の充実を図るために、定時制課程の適正規模化と適正配置を行う必要があるとの結論に達し、生徒の通学条件等を十分考慮しながら昭和五十六年度八校の学級増と九校の募集停止を実施いたしました。

本校もその対象校となり、本年三月三十一日をもってその歴史を閉じることとなりました。伝統と実績を有する本校の定時制課程が歴

史を閉じることは、情においてまことに忍び難いことではあります、時代の変化に応じ東京都の定時制教育の発展のためにはまことにやむを得ない措置であったことを御理解いただきたいと思います。

なお、募集停止の実施に伴う教育条件の変化の中で最後まで学業に励まれた生徒諸君の努力と御苦労に対し深く敬意を表するものであります。

また、最後まで生徒の教育指導につとめられ有終の美を飾つていただいた教職員の皆様の御苦労に心から感謝いたします。

終わりに、本校定時制課程の卒業生並びに教職員の皆様の今後の御發展をお祈りしてございさつといたします。

昭和五十九年三月

東京都教育委員会

資料4 お別れにあたつて

都立井草高等学校長 清水 庫之祐

終戦後の混乱期を経て、東京都は昭和二年から青年学校を廃止して新制高校定時制課程に切りかえるため、一年間の準備期間を置き、実務学校と称した。そして昭和二年三月末、都立井草新制高校に定時制課程が設置され、杉山文雄校長や広木富之介主事を中心に、一学年一学級（生徒数八名）のさ

さやかな課程が発足したのである。その後の発展の歴史は沿革史にゆずるが、昭和三十九年度の卒業生七十九名を頂点として、現在まで約千百名の有為な人材を育み、世に送り出されたのである。この功績は特筆すべきことである。設立当時の模様を伝える「ともしひ」は昭和二十四年十一月に創刊され、「学友雑誌」とも書ひ」と名づけられて、全く生徒諸君の手作りであった。発刊に際し「……理想は人生の栄光です。光は真美です。眞実と意氣の統合の中に其の灯はともるのです。……私達も手を取り合って暖かい心に触れ合って柔かき“ともしひ”の下に長き年月を語り合いましょう……この“ともしひ”が永遠に燃えることを信じて止みません。」（五十嵐雪男記）と述べている。その後連綿と続けれられたのである。ところがこの大先輩たちの後輩に託した願いも空しく「ともしひ」は昭和五十九年三月の発行で廃刊となる。昭和五十四年八月に着任した私は「学期の始業式に「灯々無尽」を説いた。そして小さいながらも楽しい我が家ならぬ我が課程の発展を願った。しかしながら楽しい一年数ヶ月後の昭和五十五年十一月十日、都教委より「定時制課程の適正規模、適正配置について」の通告があり、生徒、教職員共々長い苦しい対応が始まったのである。募集停止校となつた本校は

年々生徒数は減少し、一つ一つ教室の灯は消えていった。卒業生を送る拍手も少なくなつていき、学校行事も思うようにまかせぬ状態となつていった。万年下級生であった昭和五十八年度卒業生二十一名には心からお詫びを申し上げたい。五・六年後にはまたこの種の問題が起ころないとも限らないが、二度とこのような悲しみを味わせないよう、思いやりのある教育行政を望みたいものである。だがこの三年間楽しいことも数々あった。芸術祭参加第二位、野球大会、卓球部員の全国大会出場、修学旅行、井草祭参加等々。それぞれに思い出多い行事であった。この間、募停校、受入校十八校の校長教頭で組織する「適正規模、適正配置対策協議会」も数多くの会合をもち、時に応じて多くの要望を都教委へ要請し、円滑な学校運営の維持に努めた。都教委も誠意をもって予算面、教員数の確保、異動等に協力を頂いた。とくに河内学務部長のご尽力には感謝を申し上げたい。学校は人口の増減、経済事情、社会の風潮などの微妙な変化によって、新設されたり、統廃合されたりする。私自身も四校の母校のうち二校を失っている。しかし共に学んだ友は生涯の友として存在し、互いに助け合える。これが同窓会である。

卒業生の皆さん！「同窓会いぐさ会」を根幹として逞しく成長発展して下さい。同窓会の弥栄を祈って私のごあいさつといたします。

在職教職員一覽（着任順序）

ご協力者名簿（敬称略）

次の方々には、貴重なご助言やお教えを頂き、また大切な資料をお貸し頂きました。ここにお名前をあげて感謝の気持ちを表します。
ありがとうございました。

卒業生

山村 平田 島 小内 青山
辺上 山村 崎 島 池 久 美智代
昭俊 晴 薫 恵美子 美
代雄 茂 久 子

毛田 青利 中山 和千夫 正代
〔旧教職員〕

吉丹 青瀬 沢山 定兵
黙雄 吉
吉命 福中 代小遠秋
田尾 田島 口浜藤山
貞悦 孝理 友安栄
夫子 学之 香子子子

若十大 林倉畑 義起
覚文男
目正中 隆阪大石
崎村 村野口西村
洋嘉 清豊 小枝子
子彦 子子江子

西桑幡昌典
野清太郎
元松名高佐大岩
倉井倉橋藤村田
彩美智子代彦弓夫豊道
哲

福杉島山美恵子
本丸南田佐鹿岩
部山部中藤毛村
滋洋忠紀治
子子洋子子

古滝谷山尚子
平田弓田愛瑞英
沢田恭子
粕上島千鶴子
川幸惠歌子
子子子子

- 私どもの手落ちでお名前を逸した方があることを心配しています。失礼をお許し下さい。
- 本文中に原稿を掲載させて頂いた方々のお名前は、省略いたしました。
- 現職教職員は省略いたしました。

もむしろ、心の至らざることを憂える。

広い視点から井草高校の伝統を検証するため、多くの卒業生の皆さんからご意見を頂いた。旧教職員の方々にも、さまざまな事柄についてご教示を頂いた。貴重な資料を快くお貸し下さった方々は枚挙に暇ない。

定時制の記事は、ことごとく定時制同窓会からご提供頂いた。PTA、全・定同窓会、その他、当初に予想した以上の多くの方々のご援助を頂いた。心から感謝申し上げる。

卒業生の皆さんのご意見を、編集の最終段階ですべて通して再読し、深く感する所があった。それは、なんと好意に満ちた、まなざしの優しい文章ばかりであったろう。井草高校に対するなんと大きく深い思いである。私も編集委員は、この冊子のために井草高校の歴史に足を踏み入れた。だがはたして、事実という森をこの優しいまなざしで見てきたらどうか。森を見て木を忘れたことはなかったか。

稿を成すにあたり、私どもは多くの誤りをおかしたに違いない。そのことを深くお詫びしなければならない。

だが今、私どもは内容の至らざることより

井草高校の伝統は、自由であるという。人間性の尊重であるという。私どもはその根源を尋ねることを編集の目的とした。しかし、井草高校の教育方針を自由とするといった改めた決定や論議はついに見出せなかつた。その発生は、どうやら個々の教師の信念であり、個性であり、心情であつた。生徒の日常の中、希望の中、心の中についた。あの軍国主義の支配した大平洋戦争中にその端緒を見出すことすらできる。

いわば峰々の水を集めた小渓が次第に巨大多く渓谷を成すように、一つの伝統がつくりあげられたのである。

だが、それら漠然とした意思が、次第に確たる思想、共通の原理として培われるには、終戦後の民主主義という土壤が必要であった。今日、民主主義という言葉を耳にすることはない。明日の教育のために、そのことを遺憾とせざるを得ない。

記念誌発刊の議があつて、すでに二度目の夏を迎えた。

私ども編集委員、非才を恥じ怠惰を悔い、時のあまりに速いことを嘆くばかりである。

井草高校の五十年 —自由と人間性尊重の伝統—	
一九九一年（平成三年）九月一日	●卷頭カラー写真提供／恵雅堂出版株式会社
発行	東京都立井草高等学校
編集	東京都立井草高等学校創立五十周年記念誌編集委員会
編集委員	江渡大輔 大辻敏成 菊池尚人 藤田 隆 矢沢千宜
製作	恵雅堂出版株式会社
東京都新宿区原町1-28	

